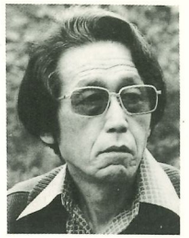
われら旗本愚連隊（上）

柴田錬三郎

集英社文庫



柴田錬三郎
一九一七年三月二六日岡山県生。本姓斎藤。慶大文学部卒。在学中『三田文学』に「十円紙幣」を発表。戦後編集者生活を経て、五一年「イエスの裔」で直木賞受賞。代表作「眠狂四郎」「赤い影法師」「曲者時代」他。

カバー・西のぼる
デザイン・後藤市三

柴田錬三郎
われら旗本愚連隊(上)

集英社文庫

し 1 25

われら旗本愚連隊(上)

柴田錬三郎

集英社文庫
★
¥410

徳川の治政定まって二百有余年、泰平を謳歌する頃、下級幕臣の困窮ぶりは目を覆うばかりだった。切羽詰った直参旗本の中に、武芸才覚に覚えのある者たちは結局、無頼の道を選ぶことになる。平山子龍道場で竜虎と並び称された狩野弥太郎と井部鉄之助は、賭場を荒しに行ったことから流浪の剣鬼・修善寺左膳と乱刃を交え……。艶美な女性を配しながら描く傑作長篇時代小説！

ISBN4-08-749410-1 C0193 P410E 定価410円
(本体398円)

集英社文庫

柴田錬三郎作品

英雄 生きるべきか 死すべきか (上)(中)(下)
度胸時代
生死の門
大　将
図々しい奴
地獄の館
曲者時代
乱世流転記
貧乏同心御用帳
江戸っ子侍(上)(下)
遊太郎巷談
生きざま
おらんだ左近
うろつき夜太(上)(下)
花の十郎太
毒婦伝奇
日本男子物語
若くて、悪くて、
　凄いこいつら(上)(中)(下)
われら旗本愚連隊(上)(下)
忍者からす
南国群狼伝／私説大岡政談

集英社文庫

われら旗本愚連隊
(上)

柴田錬三郎

集英社

われら旗本愚連隊(上)　柴田錬三郎　集英社文庫

集英社文庫

われら旗本愚連隊
(上)

柴田錬三郎

集英社版

われら旗本愚連隊（上）

第一話　賭

一

「さっても、ないない、ないものは――か」

炎暑の午(ひる)さがり、両国橋を、大声をあげ乍ら、渡っている若い旗本がいた。

盛り場この頃、人がない
芝居もさっぱり、入りがない
寄席も、湯屋(ゆうや)も、夜はない
湯銭が高くて、入れない

行きちがう町人が、それを受けて、

「全くで——おかげで、嬶の湯文字が臭うて、やりきれない」
「ははは……突いた撞木が生木にて、か」
「へへ、入りあい鐘の音のわるさ」
若い旗本は、いちだんと声をはりあげて、

臭気ふんぷん、糞小便
政道堕落、汚穢に満つ
地獄、極楽、腹合せ
とかく、浮世は、色と酒
その酒、高うて飲まれない
生酔いこの頃、見たことない
抱かず、飲まずじゃ、愉しみない
先を案じちゃ、いのちがない
どうにか、なるには、ちがいない

橋を渡って、広小路に入って、並び茶屋の前を通りかかった旗本は、落間の床几に、仲間の顔を、見出した。
つかつかと入って行って、まだ手のつけられていない麦湯を、がぶっと飲み、
「天下泰平、汗馬の労なく、先祖に討死させて高枕、目覚めて空腹に堪えず、麦湯でごまかす、か」
と、いった。
麦湯を飲まれた方は、黙って、灼りつける陽ざしの往来へ、眸子を置いている。
この二人は、ともに、旗本小普請組の部屋住みの身であった。
ないないづくしをうたって来たのを、井部鉄之助、茶屋に腰を下していたのを、狩野弥太郎という。
当代随一の学者であり、剣客であり、且また奇人である子竜平山行蔵の道場「平原草廬」で、竜虎と称されている二人であった。
風貌性格は、対蹠的であった。
井部鉄之助は、六尺近い大兵で、魁偉の容姿にふさわしく、気象も陽性で、激しかった。
それにひきかえて、狩野弥太郎は、痩軀鶴に似て、眉目は優しかったが、常に沈鬱な翳を刷いているために、人から親しみを持たれず、また自身も、寡黙であった。
「弥太、養子の口を、ことわったそうだな？　組支配が、わざわざ、仲人に立ったのを、ことわった理由は？」
鉄之助が、たずねた。
「お主は、当分養子でも、行くか？」
「当分養子か」
鉄之助は、首をかしげた。
「当分養子」というのは、嫡子のある旗本が、その嫡子が痴呆あるいは病身であるために、

他家の次三男を、貰って、老中ならびに頭・支配に届けておくのを、いう。
「当分養子でも、わしは、行くのう。行って、実子を毒殺して、当分を永久にしてくれる。南無阿弥陀仏、金欲しや、死んでも生命のあるように——目下、強欲になろうと、自らをはげましているのでな」
そういってから、鉄之助は、大声をあげた。
「ああ、金が欲しい！」
他の床几の町人たちが、それをきいて、くすくすと、わらった。
鉄之助は、見まわして、
「なにが、おかしい。武士も人間だぞ。かすみを食っては、生きてはいけぬ。金が敵の世の中なら、ひとつ、その敵を討ってやろうと思うのは、あたりまえではないか。いったい、お主ら江戸っ子どもは、金もないくせに、気前がよすぎるぞ。宵越しの金はつかわぬ、とか、女房を質に置いても初鰹を食う、とか——ばかげて居る。すこしは、上方の町人のケチを、見習うとよい。こんな話があるぞ。京都のある商人が、仲間のところへ、手紙を書いて、丁稚を使いに遣った。その手紙は、紙を使うのが惜しいので、桐の葉を代用した。すると、受けとった商人の方は使いの丁稚に、さてもお前の主人は世帯持ちがわるい男よ、この葉は焚きつけになる、と云って、丁稚に、双肌ぬがせると、そのせなかに、返辞を書いたそうな。これぐらいのケチになって、金をためる根性にならんとな」
その時、弥太郎が、黙って、床几から立つと、おもてへ出た。
「おい弥太——待て」

追って出て来た鉄之助は、
「お主、ふところに、いくらある？」
と、訊ねた。
「二分ぐらいはあるが……」
「それを元手に、十両ばかり、かせぐか」
「……？」
弥太郎が、怪訝な視線を向けると、鉄之助は、にやりとして、
「懐中窮迫すれば、士といえども、非常の手段にうったえざるを得ぬ」
「どうするのだ？」
「大名賭場を荒らす」
当時、大名や旗本大身の屋敷内にある渡り奉公の中間部屋では、なかば公然と、賭博場がひらかれていた。
旗本の中には、そのカスリを取って、生活費の足しにしている家もあったのである。
「勝負の途中で、いかさまだ、と呶鳴って、あばれる。そのどさくさに、すばやく、十両ばかりひっつかんで、遁走することにするのだ」
「強盗と同じではないか」
「かまわん、かまわん。敵は、表沙汰にできぬ弱味がある。切取り強盗は武士のならい、と先祖が教えてくれている。禁制を犯している場所で、先祖のやったことを見習うだけの話だ。手に唾して奪うべし、袁彦道の不浄の金！」

二

十万石の大名屋敷の、渡り奉公の中間部屋は、常時四、五十人がごろごろしているのでだだ広かった。

その四分の一ほどの場所を、破れた六曲屏風で仕切って、十数人が、盆蒲団をかこんで、いまや、勝負が酣であった。

勝負に加わっているのは、井部鉄之助で、中盆のわきに、座を占めていた。

狩野弥太郎は、鉄之助の後方で、壁に凭りかかって、差料を抱いていた。

渡り中間のほかに、脱いだ肌に、刺青をあぶらぎらせた無職者、火消人足など、いずれも、一癖も二癖もありげな顔つきの手輩が、壺振りの伏せた壺皿の下の二つの骰子に、生命をぶちこめている。

障子も板戸も閉めきっているので、部屋は蒸し風呂さながらの暑熱がこもっている。

それが、かえって、博徒らの興奮を増す効果があるようであった。

ひとり、狩野弥太郎だけが、遠い傍観者の立場にいた。

はじめて、賭場というものを見物しているのであった。

――酒・女・博奕、いずれにせよ、われを忘れさせる興奮状態に入るものを知っている男は、幸せといえる。

弥太郎自身、これまで、そうした興奮状態に陥ちた経験がなかったのである。

恋をしたことはある。しかし、その恋は、こちらが想っただけで、あいての心に、つたえないうちに、終った。「平原草廬」で、七年あまり、兵法修業を積んでいた。しかし、剣の奥旨をきわめたい、というそのむかしの兵法者のごとくまっしぐらに寝食を忘れて精進をつづけたわけではなかった。

武芸を十八般と定め、そのすべてに通じ、寝る時に、寒中でも夜具をもちいず、食事といえば粟を炊いて水漬けにしてふやかしたものを摂り、それに路傍で摘んだ雑草をなまのままで菜とし、妻帯せず、和漢の蔵書千数百冊を集めるのを唯一の趣味としている子竜平山行蔵の門下としては、むしろ、不肖の弟子であった。

井部鉄之助とならんで、竜虎と称せられているのは、たまたま、いささかの天稟を与えられていたからにすぎぬ、と自身のいいわけがなされている。

「勝負っ！」

中盆の鋭い掛声とともに、壺振りが、さっと壺皿をあげた。

いっさい、どよめきは起らぬ。ひくい呻きや舌打ちが、負けた側のなかから、もらされるばかりであった。

と――。

不意に、鉄之助が、

「同じ目が、出すぎるぞ」

と、大声で云った。

それが、合図であった。

弥太郎が、応じて、
「いかさまだろう」
と、云った。
「なにっ！」
中盆が、凄い形相で、ふりかえった。
「旦那！　いま、なんと云った？」
「いかさまだろう、と云った」
「おいっ、さむれえ！　ふざけたことをぬかしやがると、ただじゃすまねえぜ！」
「ただですまぬ時を、こっちは、待っていた」
「野郎っ！」
中盆が、上座の胴元に、目くばせしておいて、匕首を抜きはなった。
瞬間――。
鉄之助が、その中盆を、突きとばした。
「たたっ斬れっ！」
「ぶっ殺せっ！」
博奕の次には、喧嘩の好きな連中であった。
部屋は、騒然となった。
弥太郎は、長脇差をふりかぶって襲いかかって来た一人を、かわすでもなく、差料の鐺で、股間を突いて、身を二つに折らせた。

それから、ゆっくりと、盆蒲団を踏んだ。
黙然として、胴元を凝視したその姿に、鬼気があった。
やくざどもは、喧嘩馴れているだけに、その鬼気を感じて、いずれも、微かな戦慄の様子を示した。

三

鉄之助と弥太郎は、その大名屋敷の裏門の潜りを出た。
「団十郎ばりだったのう、弥太。思わず、千両！　と声をかけたいところだったぞ」
そう云ってから、鉄之助は、袂を振って、じゃらん、と金の音をきかせた。
「金をひろったこの手の早さ。ははは、十二、三両はあるぞ。これから、吉原へくり込んで、いざ抱かんかな、解語の花――」
「……」
弥太郎は、黙って、歩いた。
「弥太、行くだろう。吉原へ――？」
「女郎を抱くのは、好きではない」
「そういえば、去年、お主が買った女郎が、お主に惚れたのう。幽霊のように影のうすい女であったが、わしが登楼するたびに、お主をつれて来てくれ、とせがんで居って、わしがつれてゆかぬうちに、首を縊って、自殺し居った。それがあるので、吉原へ行くのを避けて居

るのだろう。深川の岡場所にしてもいいぞ。檜下に、ういういしいのが一人居るのを、見つけて居る。お前にゆずっていい」

「おれは、今日は、家へもどる」

「どうしてだ？」

「母親の祥月命日であることを、いま、思い出した」

「ふうん――。では、金を山分けするか」

「お主、吉原で、全部使ってしまうがいい」

「そうは、いかん」

鉄之助が、袂から、金をつかみ出して、分けようとした折であった。

「狩野様――」

背後から呼びかけて、息をはずませて、近づいて来た者があった。

振りかえると、それは、弥太郎、鉄之助とは共通の幼馴染である鵜殿主馬の屋敷の足軽であった。

「今朝から、おさがし申し上げて居りました。もう一度、お屋敷へお伺いしようと存じて居ったのでございます」

「主馬が、おれに、用だというのか？」

「はい。是非たのみたき儀があるゆえ、と申されまして……」

鵜殿主馬は、小普請ではなかった。五年前、その父が隠居して、主馬に、評定所勘定組頭の役をゆずっていた。

三百五十俵高、役料百俵で、中位の旗本としては、貯えもあって、まずゆたかな家であった。

小普請の次男である弥太郎や鉄之助とは大きな差がついていた。

ただ――。

不幸なことに、主馬は、三年ばかり前から、肺をわずらって、臥牀したきりになっていた。

幼馴染の仲間は十人あまりいたが、主馬は、その中でも、最も誠実で、自分の心をいつわることのできぬ性情の持主であった。放埒の日々を送る者たちが、一向に病まず、主馬だけが、不治の病患におかされたことは、皆の同情を呼んでいた。

「参ろう」

弥太郎が、承知すると、鉄之助も、

「そうだ、わしも、久しぶりで、主馬を見舞ってやろう」

と、云った。

四半刻のち――。

弥太郎と鉄之助は、主馬の病室に坐っていた。

主馬の顔には、死相が色濃くあらわれていて、弥太郎と鉄之助に、そっと、顔を見合させた。

主馬は、看護の女中を、退らせておいて、なお、しばらく、目蓋を閉じて、沈黙を守った。

「主馬、用向きをきこう」

弥太郎が、うなずくと、主馬は、

「うむ――」

と、微かにうなずいて、目蓋をひらいた。

しかし、それから、またしばし、天井へ眼眸を送っていた。

ようやく、主馬は、口をひらいた。

「井部が一緒に、来てくれたことゆえ、どちらかに、わしのたのみを、ひき受けて、もらいたい」

まずそう云ってから、主馬は、はじめて、二人の顔を見くらべた。

「わしらにできることなら――」

鉄之助が、こたえた。

「わしの妻を――志乃を、犯して、もらいたい」

意外な言葉を、主馬は、口から押し出しておいて、息苦しげに、とがったのど仏を、上下させた。

二人の友人は、息をのんだ。

「……志乃には、男がいる。わしは、カンでさとった。……密通の証拠は、ない。……わしは、ただ、志乃のからだから、男のにおいを、かいだだけだ。……知っての通り、わしは、志乃を娶って、すぐ、血を喀いて、寝ついた。志乃とは、ただの二度しか、夫婦の契りを、して居らぬ。……生娘と、同様であったといえる。……それが、いつの間にか、志乃の肌は、男を知ったものに、なって居る。……この手で、さわってみたわけでは、ない。ただ、眺めているだけで、その肌が、変って来ているのを、わしは、はっきりと、みとめた。……志乃は、男に抱かれる味を、おぼえた。顔はかくして居るが、肌がかくすことが、できぬ。……わしは、それを、たしかめたい。わしのカンが、狂って居らぬことを、生きているうちに、知りたい。死んで行こうとする者の妄執であろう。……志乃は、三日に一度ずつ、わしの病気恢復の祈願に、南本所番場町の多田薬師へ、出かけている。用人を供させているが、この参詣は、たしかに、やって居る。用人は、往復の途次、寄り道は、して居らぬ、と報告して居るが……。わしには、信じられぬ。……わしは、その対手の男が、何者か、知りとうは、ない。……わしは、考えた。わしを裏切った妻に、復讐してくれるには、幼馴染の友に、たのんで、これを、犯す――この手段がある、と」

喘ぎで、声音をかすれさせたり、とぎらせたりし乍ら、そこまで語った主馬の顔面は、凄愴な色をおびていた。

「……たのむ！　弥太郎でもいい。弥太郎が、いやだ、と申すのなら、井部でもよい。……どちらかが、志乃を犯してくれい。……わしの、疑心暗鬼だ、と云ってくれるな。わしのカンは、狂って、居らぬのだ」

「……」

弥太郎も、鉄之助も、無言のまま、主馬の顔色を、瞶めている。

「もし、お主らが、拒絶するなら、他の友を、呼んで、たのむ」

主馬は、云った。

「お主が、どうしても、やってくれ、とたのむのなら、引き受けてもよいが、弥太か、わしか――指名してもらおう」

鉄之助が、云った。
「それは……、そちらで、きめてくれ」
主馬は、こたえると、目蓋を閉じた。
「弥太、どうする？」
鉄之助から、問われて、弥太郎は袂から、二箇の骰子を、とり出した。
「先刻の賭場から、これを、ひろって来たのが、役に立つようだ」
「うむ――」
鉄之助は、うなずいた。
「わたしは、半だ」
弥太郎が、さきに、云った。
「よし――」
鉄之助は、緊張した表情で、二箇の骰子を握った弥太郎のこぶしを、凝視した。
弥太郎は、きわめて、無造作に、骰子を、宙へほうりあげた。
畳へ落ちた骰子は、二と四――丁であった。
「鉄之助の勝だ。……わたしは、ひと足さきに、失礼する」
弥太郎は、骰子をひろって、袂に入れると、すっと、座を立った。

鵜殿家を出て、もの影の長くなった往還を、ゆっくり歩き出した弥太郎の相貌は、さらに沈鬱の翳を濃くしていた。

百歩あまり、歩いたろうか。
弥太郎は、左手で、袂の二箇の骰子をとり出すと、病室でやったと同じく、宙へほうりあげた。
刹那、右手が、抜く手もみせずに、差料を鞘走らせて、白光を閃かせた。
二箇の骰子は、ともに、ま二つになって、地面へ落ちた。
弥太郎は、冷たい視線を、それに落した。
それは、一点物という、鉛を入れた、まごうことなきいかさま賽であった。
大名賭場で、弥太郎が、「いかさまだろう」と云ったのは、真実をあてたのであった。
鉄之助は、騒動を起すために、弥太郎に、わざとそう云わせたのであったが、弥太郎の方は、勝負を眺めているうちに、まさしく、その骰子は、いかさま賽であることを看破したのである。
そして――。
弥太郎は、そのいかさま賽を使って、鉄之助に、勝たせたのであった。
主馬の妻志乃こそ、弥太郎が、ひそかに恋して、ついに、胸のうちを打明ける機会のなかった――その女性だったからである。弥太郎の心には、まだ、恋情がのこっていた。

第二話　決　闘

一

江戸は、四季それぞれ、行事で明け暮れる。行事にふりまわされている観がないでもない。およそ一年三百六十五日、行事のない日はない、といってよかった。

たとえば——。

八月を眺めると、朔日は、始祖徳川家康が天正十八年のこの日、はじめて関東に入った故事によって、江戸城内で、大名旗本総登城の祝賀が催された。十五日は、月見である。

月ごとに見る月なれど、この月のこよひの月に似る月ぞなき

「続古今集」の天暦御製で、この宵の月かげが冴えて、士家も町家も、その光に、団子と味噌煮の芋を供えた。そして、大川は、月見船でいっぱいになった。

この日はまた、放生会が、各八幡社で、にぎやかに催された。

さて、この日、空に月が冴えるまでには、まだ二刻ばかり間のある頃あい。

井部鉄之助は、むずと腕組みして、大川端を——駒形堂をむこうにのぞむところを、歩いていた。

珍しく、この大兵の陽気な旗本の口は、真一文字にひきむすばれていた。

二十歩ばかり前方を、一梃の駕籠が行き、視線は、それにそそがれていた。

駕籠は、一瞥でそれとわかる旗本屋敷の女駕籠であった。用人が一人、若党が二人、供をしていた。

「おや、鉄之助ぬし——」

不意に、右手の鰻屋の二階から、声がかかった。

鉄之助が、仰ぐと、出窓に、白い顔があった。

女ではなかった。ただ途方もない美男であった。

どんな遠くからでも、一瞥で判る、これほどの美男は、まず二人と見当るものではなかった。優美な眉、切長の澄んだ双眸、鼻梁と口もとのかたちのよさ、そして、顔ぜんたいが湛えている妖しいまでの気品。

これほどの美男になると、神がこころみに完璧な造作を、この世に送り出してみたか、と思われて、いささか薄気味わるいくらいである。

当人は、充分その美貌を心得ていて、華やかな柄の丹後ちりめんを、なで肩にぞろりとまとって居り、これに、月代に紫の布をのせれば、まさしく、歌舞伎の女形である。

これが、れっきとした直参で、しかも、千石取りなのであった。

父は、奥祐筆をつとめて、謹直無比の生涯をすごした。そのまま世襲によって、その職を得られたものを、部屋住みの頃から、女言葉を使い、ぞろりとしたいでたちを好んだのがわざわいして、父が逝って家禄を継ぐと同時に、小普請組に入れられた。あやうく、山流し（甲府勤番）になるところを、親族一同の連署歎願によって、まぬがれた。

しかし、小普請組に入れられると、当人は、おおっぴらに、中性の装いと言辞挙措を、市井にまきちらしはじめたのである。

父が呉れた強右衛門というういかめしい名も、優之助と改めて、桜田優之助は、いまは、江戸の名物のひとつになりつつあった。

「ちょっと、窓から、失礼――」

桜田優之助は、出窓から廂に、すっと、出ると、ちょいと前を膝にはさんで、宙へ跳んだ。裾も乱さず、井部鉄之助の面前へ、降り立ってみせた鮮やかな業ぶりは、通行人をして、あっけにとらせた。

桜田優之助が、幼馴染の仲間から、疎外されないのは、武芸に天稟をそなえているおかげであった。

尤も――。

いまは、井部鉄之助は、衆人をおどろかせる姿やら業ぶりを見せられるのは、少々迷惑であった。

「鉄之助ぬし、会いたかった。ここで会ったが百年目、はなしませぬぞえ」

すり寄られて、鉄之助は、

「おい。わしが、まるで衆道趣味があるように見られるではないか。はなれろ」

と、叱りつけた。

「あたしは、お主の、そういうごつい目つきが、たまらなく好きなのさ」

「止せ！」

鉄之助は、握られた手を、あわてて振りはらった。

「急ぎの用があるのだ」

「なんの――？」

「あの駕籠の中に――」と指さして「主馬の妻女が、乗って居る」

「それが、どうかしたかえ？」

「あとを尾けて行って、犯す」

「犯す？」

「主馬からたのまれて、義をみてせざるは勇なきなり――引き受けた」

「いったい、それは、どういうことでござんしょうかえ？」

「仔細は、あとで――、そうだ、お主にたのみがある。いま時分なら、弥太が、柳橋のちぐさやに、いるはずだ。お主、行って、わしが今宵、主馬との約束を果す、と告げてくれ。たのむぞ」

言いおいて、鉄之助は、大股に、歩き出した。

桜田優之助は、流石に合点できぬまま、小首をかしげて、鉄之助の後姿を、見送った。

二

狩野弥太郎は、鉄之助が優之助に言った通り、柳橋の船宿ちぐさやの二階にいた。
床柱に凭りかかり、立てた片膝を抱いて、呼びあげた鳥追いに、常磐津をうたわせていた。
鳥追いは、まだ十五、六の少女であったが、可哀そうにあき盲であった。
声も稚く、節まわしもたどたどしかったが、かえって、それが、弥太郎の空虚な気分をなぐさめていた。
視線は、大川の上の空へ投げられていた。
月見の船は、もうさわがしく、岸をはなれていて、絃歌が川面を流れている。
窓から吹き込んで来る夕風は、もう秋のものであった。
——志乃さんが、不義を働いている？
そのことが、この五日間、弥太郎の脳裡を占めていた。
——あのひとは、そんなことのできる女ではない。
つよく否定する気持が、かえって、そのことを脳裡から、払いのけられぬようにしていた。
弥太郎の知る限り、志乃は、優しい気だての、旗本の躾を身につけて、その埒外へは一歩もふみはずすことのできぬ女性であった。たとえ、良人が、三年はおろか十年病臥していようと、不義の心など、みじんも起す筈もない、と弥太郎には、考えられた。
良人の主馬の妄想としか思えなかった。

しかし、長らく病臥する者は、ふしぎな鋭い直感力を発揮することも、弥太郎は知っていた。
弥太郎の母は、病弱で、弥太郎が物心ついたころから、薬餌にしたしんで、寝たり起きたりするくらしをしていたが、周囲の者たちが、びっくりするような直感力を働かせたものだった。
たとえば、弥太郎の父親が、大切な品を見失った時など、その置き場所をピタリと当ててみせたし、再び牀から起き上れなくなってからは、神のような予想をしたりした。
「来月あたり、大きな地震があるような気がするゆえ、火の元に、充分気をつけて欲しい」
使傭人たちに、注意したが、みごとにあたった。
弥太郎は、母が、自身の逝く日を、言いあてたことを、想い出し乍ら、
——主馬のカンは、あたっているのかも知れぬ。
そう呟いて、志乃の俤を宵空に描いた。
——あのひとが、何者と不義を働いているというのか？
事実ならば、弥太郎は、その男を許せなかった。
——おれが、そいつを、斬る！
……いつの間にか、鳥追いは、常磐津をうたいおわって、膝に両手をかさねていた。
ふと、われにかえった弥太郎は、窓から、その顔へ、視線を移した。
目立たぬ顔だちだが、よく視れば、整って、品もあった。ういういしさが匂うていて、あき盲が、あわれであった。

「そなた、もしかすると、士の家に生れたのではないのか？」
弥太郎は、訊ねた。
「はい――」
少女は、うなずいた。
「どこの藩だ？」
「……」
こたえるのは恥、と教えられている様子をみせた。
弥太郎の懐中には、鉄之助と分けた金が、まだ充分のこっていた。
少女の膝へ、二分銀を投げて、
「行ってよい」
と、云った。
少女は、その金を手にしてみて、
「こんなに、たくさんは、いただけませぬ」
と、怯ず怯ずと、返そうとした。
「自分の芸のつたなさを、慙じているのなら、遠慮することはない。そなたが、上手であったら、かえって、興を殺がれたことだ」
その時、流行歌をうたい乍ら、階段をのぼって来る者があった。
――優之助だな。
弥太郎は、女に生れそこねたこの友人を、好まなかった。

「弥太郎ぬしはこちらかえ？」
声をかけて、障子を開けた優之助は、
「おや、ぬしにも門付を呼ぶ風流心が、ござんしたか」
と、笑った。
少女は、頭を下げておいて、手さぐり乍ら、去ろうとした。
「可哀そうに、あき盲かえ」
優之助は、手を把って、廊下へ出してやっておいて、
「弥太郎ぬし、不男という語をご存じか？」
「誰かに、そうあざけられたのか？」
「いま、この宿へ入りがけに、通行の老人が、不男だのう、と申して居りましたぞえ」
「医書にも仏典にもある。男にして、男に非ざる生きもの。仏典には、たしか、不男を、五種目に分けていた」
「五種目とは――？」
「天、捷、妬、変、半――だったかな」
「意味を教えて頂きましょう」
「萎縮して筋ならざるものが天。男に会えば女になり、女に会えば男になるものが捷。男根あるに似て亦なきにひとしいものが妬。半月は能く男になり、半月は能く女になるものが変。これは、化物じみているが、たぶん、両形を備えたやつのことだろう。さいごの半、というのは、男根は正常なるも全く不能なやつ、ということだ。……お主は、その半ではないの

か？」

「ありませぬな。ちゃんと、朝立ちつかまつる。なんなら、いまここへ、女中を呼んで、くわえさせましょうかえ」

弥太郎は、苦笑した。

「おっと、肝心の用向きを、忘れていたわえ。……駒形堂の前で、鉄之助ぬしに、出会うたところ、妙な伝言を、たのまれましたげな」

それをきいて、弥太郎の表情が、ひきしまった。

「なんと云った？」

「駕籠でどこかへいく主馬ぬしの妻女のあとを尾けて行って、犯す、と――」

「……」

「弥太郎に、今宵主馬との約束を果す、とつたえてくれ、と云いおいて、駕籠のあとを、追うて行ったが、いったい、これは、どういうことでござんすかえ？」

弥太郎は、差料を手にすると、すっと、立ち上った。

「不男には、わからぬことだ」

三

弥太郎は、昏れなずむ南本所番場町の多田薬師の境内に、足早やに入った。

弥太郎は、志乃を犯す役目を、鉄之助にゆずったのを、後悔していた。

今宵、犯す、ときいて、にわかに、弥太郎は、

――犯させてはならぬ！

と、決意したのであった。

志乃が、三日に一度ずつ、この薬師へ参詣していることは、主馬からきいていた。

鉄之助は、そのあとを、尾けて来たのだ。

境内に入った弥太郎の心は、ぴいんとはりつめたものになっていた。

一隅に、旗本の女駕籠がとめられ、若党二人が憩うているのを、みとめて、近づいた。

「鵜殿家の者だな？」

「はい」

「志乃さん――いや、主馬の室は、いずれだ？」

「はい。参詣をすまされまして、御隠居所の方へ、ご挨拶に参られました」

「隠居所！……この近くにあるのか？」

「はい。そこの道から、二町ばかり行ったところにございます」

隠居した主馬の父格左衛門の隠居所が、この近所にあることは、弥太郎は、知らなかった。

弥太郎は、不意に、胸さわぎをおぼえた。

道へ出ると、走らんばかりの足どりになった。

若党から、人家がきれて、かなり広い空地があり、隠居所は、その隣りと、きかされていた。

空地のわきに来て、弥太郎は、足を釘づけた。

二個の影が、相青眼で対峙する光景が、そこにあったのである。
じっとすかし視た弥太郎は、その一人が、鉄之助であることを、みとめた。
空地へ足を踏み入れた弥太郎は、鉄之助に、声をかけることは、許されぬ、とさとった。
着流した浪人ていの対手の剣に、鉄之助を圧倒する凄味がみなぎっているのであった。
——この男が、志乃さんの不義の対手か？
一瞬、その疑惑が、弥太郎の脳裡をかすめた。
弥太郎は、ゆっくりと、浪人者の背後へまわった。
そして、無言の鋭気を、その背中へ、送った。
しかし、浪人者は、その構えを微動だにさせず、弥太郎の存在を無視した。
——これは、できる！
弥太郎は、鉄之助があぶない、と感じた。
とたん——。
「弥太——、助太刀無用！」
鉄之助が、云った。
誇りの強い男であった。借りをつくるのを、好まぬ気象なのだ。まして、弥太郎は、剣に於ては、競争対手なのである。その助勢は、断乎として拒否しなければならなかった。
弥太郎は、やむなく、後退した。
宵闇の濃くなる空間に、剣を固着させた対峙は、およそ四半刻も、つづいたであろうか。
ついに、鉄之助が、すっと動いた。

刹那——。
——危い！
弥太郎は、感じた。
浪人者が、その白刃へ凄味をみなぎらせ乍らも、先制攻撃に出ようとせぬのは、あきらかに、鉄之助の方から初太刀を放たしめる存念に、ほかならぬ。
隙をつくって誘うことをせずに、ただ、待っているのは、撃たせて撃ちかえす業に、自信があるからであった。
鉄之助が、それを看て取れぬ筈はなかった。
にも拘らず、鉄之助が、対手ののぞむがままに動いたのは、あせりではなく、弥太郎に対して、おのが真剣勝負のしかたを見せる心を起したからであったろうか。
「ええいっ！」
満身からの気合を噴かせて、鉄之助は、斬り込んだ。
同時に、敵は、斜横に、滑走した。
弥太郎は、鉄之助の上半身が、崩れるのを、視た。
「おれが、代る！」
鉄之助が、膝を折って、地面に崩れた時、弥太郎は、浪人者の正面に、進んでいた。
「……」
浪人者の方は、沈黙したまま、受ける態度をみせた。
その折、かなりの距離を置いた地点から、

「勝負は、それまでにせい」
という声が、かかった。
すると、浪人者は、刀を引いて、しずかな足どりで、遠ざかった。
弥太郎は、声をかけた者へ、視線を据えた。
主馬の父格左衛門が、枳殻の生垣をへだてて、胸から上をのぞかせていた。
弥太郎は、鉄之助のそばへ寄った。
「鉄之助、どこをやられた？」
「膝の上だ。跛になるかも知れんのう」
鉄之助の声は、意外に、あかるかった。自身で、すばやく、手当を了えていた。
「あの男は――？」
「知らん」
「知らん、とは？」
「志乃さんと用人が、隠居所へ入るのを、尾けて来たら、突然、前をふさいで、果し合いを申し入れて来やがった。……強かったのう、あいつ。お主でも、勝てたかどうか……。すまんが、辻駕籠を、呼んでくれ。あとは、お主にまかせて、わしは、ひきあげる」
そう云っているところへ、格左衛門が、近づいて来た。
「志乃の駕籠で、もどるとよい」
「お借り申す」
隠居所の小者が、駆けて行って、薬師の境内で待っていた鵜殿家の駕籠を呼んで来た。

鉄之助は、それに乗ってから、「弥太――」と小声で呼んだ。
「気をつけろ。あの浪人者は、もしかすれば、隠居がやとったのかも知れん」
そう忠告した。
弥太郎は、駕籠が、闇に溶けるのを見送っておいて、格左衛門に、向きなおった。
「おたずねつかまつる」
「あの浪人者のことかな。……あれは、わしが懇意にして居る男だ」
格左衛門は、こたえた。
「ご隠居が、あの男を井部に立ちむかわせた、と云われる？」
「そうだ」
「何故に――？」
「尾けて参ったのが、鉄之助であったからじゃ。弥太郎、尾けて来たのが、お主であったら、立ちむかわせは、しなかったであろう」
「……」
「仔細を、うち明けるゆえ、寄ってもらおうか」
格左衛門は、隠居所へ、弥太郎をさそった。
志乃は、そこにいるに相違なかった。
弥太郎は、老人に跟いて歩き出し乍ら、なぜか、ふっと、志乃という女性に、はじめて、微かな憎しみに似たものを、おぼえた。

第三話　異常の夜

一

「恥を、打明けねばならぬ」

鵜殿格左衛門は、離れの茶室に、弥太郎をみちびくと、地紋に雲鶴の絵を浮かせた茶碗をその前に置き、弥太郎が作法通りに喫するのを待ってから、云った。

「……？」

弥太郎は、格左衛門を、じっと瞶めかえした。

弥太郎は、父を知らなかった。物心ついた頃には、すでに亡く、ひとまわり年上の長兄が、狩野家の当主であった。弥太郎は、その兄と反が合わなかった。

弥太郎が、少年時代から、尊敬していたのは、この鵜殿格左衛門であった。評定所勘定組頭としては、頭脳の切れることに於て同僚の追従を許さぬ評判が高く、また、不正に対して潔癖で、上司としばしば衝突し、隠居する年齢でもないのに、息子の主馬に、はやばやと役職をゆずらなければならなかったのはそのためのようであった。

しかし、屋敷にもどって、裃をぬぐと、格左衛門は、まことに洒脱な人間に還った。

旗本屋敷で、三絃をひびかせることは、不文律として、許されぬことであったが、格左衛門は、平気で、三味線を膝にのせて、しぶいのどを、家の者たちにきかせていた。長唄からよしこのにいたるまで、なんでもこなした。また、主人が台所へ姿を現すということなど、他家では考えられなかったが、格左衛門は、気がるに、台所へやって来て、鴨の羽毛をむしったり、鰻をさいたりしてみせた。また、若い頃、長崎のオランダ商館で習いおぼえた、カステラなどの南蛮菓子も、上手につくってみせた。

武芸にも秀れていて、主馬がつれて来る弥太郎や鉄之助などの少年たちに、稽古をつけた。わが子、他人の子という分けへだてをせず、常に扱いが公平であった。

弥太郎は、このような父親がいたならば、とひそかに主馬を羨望したものであった。

家督を主馬にゆずって、この隠居所にひきこもってからは、ずっと無沙汰に過ぎていたが、二年ぶりで逢う格左衛門は、別人のごとく、老いの色を面貌に刷いていた。

「先日、主馬が、お主と鉄之助を招いて、たのみごとをした時、用人がぬすみぎいて、わしに報らせた。……たしかに、志乃には、男が居る」

格左衛門は、云った。

「……」

弥太郎は、胸の裡がひきしまった。

「男というのは、このわしだ」

「え?!」

「まことだ。主馬は、実父に、女房を寝取られたのだ」

弥太郎は、老人の表情が、微かではあるが、苦悩でくもるのをみとめた。

「但し、この老いぼれが、嫁御の色香に、迷うた次第ではない。鵜殿家を断絶させまいための非常の措置であった」

「……」

「主馬は、臥牀して、すでに三年になる。評定所では、主馬がお役御免を願い出るのを、待って居る。主馬が組頭をしりぞけば、鵜殿家は、小普請に入れられ、いずれ、改易の悲運に遭う。わしには敵が多すぎたし、その敵が、いま、それぞれ、力をふるう地位に就いて居る。鵜殿家をとりつぶしてやろう、というこんたんを持っていることは、わしには、わが掌を見るように、明白なのだ」

「しかし、ご老人は、すでに、隠居して居られる。もはや、対抗なさる力をお持ちではありませんが……」

「あいにく、わしの手許には、かれらにとって甚だ気がかりな文書が、のこって居る。もし、わしが、これを、ご老中にさし出せば、すくなくとも十人以上、罪に問われ、遠島か、これに相成る」

格左衛門は、切腹するまねをしてみせた。

「かれらが、わしの手許にある文書を、奪うには、鵜殿家を改易にして、闕所物奉行に、家財一切を押さえさせるよりほかに、てだてはない。鵜殿家を存続させるためには、主馬が、子供をつくっておかねばならぬ。主馬の若さでは、養子は許可にならぬことは、お主にもわかるであろう。……しかし、主馬には、もはや、子供をつくる能力は、ない」

「……」

「そこで、わしが代って、あと嗣ぎをつくってやるほぞをきめたのだ。……志乃は、わしから、そう云われると、一度は、強く拒んだが、文書のことをきかされて、ついに承知した。……わしは、志乃と密通した」

「……」

「わしと志乃は、鵜殿家のあと嗣ぎをもうけるために、この一年間、必死にはげんだ。……しかし、志乃は、懐妊の兆候を、一向に示さぬ」

二

弥太郎は、格左衛門の意外な告白に対して、なんと返辞していいか、わからぬままに、沈黙を守った。

「わしは、志乃が懐妊したならば、主馬に打明けるつもりであったが、打明ける前に、主馬は、気づいてしまった。……志乃は、もはや、覚悟をいたして居る。わしが、許さぬので、自害を思いとどまって居るが、鵜殿家にとついで来たために、夢想だにしなかった不幸な窮地に陥ちてしまった」

「……」

「弥太郎、たのみがある」

「……」
「お主、志乃と密通してくれぬか？」
「……」
「志乃を懐妊させてくれい。おねがいする」
「……」
弥太郎は、老人の悲痛な眼眸を受けて、とまどった。
格左衛門の為した行いは、弥太郎からみれば、尊敬する人物が狂気したとしか思えぬばかげたものであった。
息子に代って、嫁を犯して、子供をつくろうとする。こんなばかげた行為が、またとあるだろうか。志乃が、首尾よく妊娠したとしても、生れて来るのが、男児とは限らぬではないか。
自分が知る限りの人の中で、最も尊敬していた人物の、これが必死の思案の挙句のあがきなのか、弥太郎は、索然たる感慨をおぼえずには、いられなかった。
鵜殿家を存続させたい一念は、わからぬではない。しかし、これほどのみにくいあがきをしてまで、存続させねばならぬほど、家というものは、大切なのか。
秘密の文書を、旧敵に奪われたくないのであれば、どこかへかくしておけばよいではないか。
「弥太郎、どうやら、お主は、わしを、さげすんで居るようだな？」
「正直を申して、尊敬の念は消えました」

「当然だ。しかし、もはや、お主に、きかせた上からは、わしは、あとへは、引かぬぞ。……お主が、拒絶して、立ち去れば、わしは、志乃に、自害させる」
「……」
「やむを得ぬ仕儀だ。事態がここに及んでは、志乃に自害を思いとどまらせる説得力を、わしは持たぬ」
――なんという身勝手な云いぶんなのか。
弥太郎は、老人に対して、腹が立って来た。志乃に対しても、腹を立てていた。
「目下、志乃は、お主の庖丁の下に置かれた、真魚板の魚と相成って居る。……お主が、抱いてくれれば、志乃は生きのびるであろう。お主が拒絶すれば、志乃は、死ぬ。お主の料簡次第じゃ」
云うべきことを云い了えると、老人は、目蓋を閉じた。
いくばくかの時間が、流れた。
不意に、弥太郎が、重苦しい沈黙を破った。
「志乃さんと、通じましょう」
そう云ってから、弥太郎は、自分で自分の返辞に、いささか、あきれた。その瞬間まで、弥太郎は、この老人と志乃を、悪む意識しかなかったのである。老人のたのみを肯く気持など、みじんもなかった。
どうして、そうこたえてしまったのか、自分で自分が、わからなかった。
「そうか。通じてくれるか」

格左衛門は、沈痛な面持をかえようとせず、うなずいた。
「たのむ」

三

格左衛門は、茶室に残った。
弥太郎は、母屋に入ると、指示された座敷の前に立った。
障子に、灯かげが映っていた。
――おれは、本当に、志乃さんを抱くつもりなのか？
弥太郎は、一瞬、障子を開けるのを、ためらった。
人も我も、みな、すこし、どこかが、狂っているような気がした。
弥太郎は、なかば自棄な気分で、障子を開けた。
座敷の中央に、牀がのべられてあった。志乃は、その裾で、俯向いていた。
細い白い項が、いたいたしかった。
弥太郎は、かけるべき言葉が、見つからないままに、枕もとへ、坐った。
志乃は、身じろぎもせず、沈黙を守りつづけている。
――酒が必要だな、密通には……。
弥太郎は、そう思った。
志乃に、それを命じようとして、弥太郎は、思いかえした。

――酔いをかりて、為すべき行いではない。
「志乃さん――」
弥太郎は、呼んだ。
「はい」
「きものを脱いで、牀に入ってもらおう。長襦袢も二布もとって、一糸も、まとわずにだ」
弥太郎は、わざと冷たい口調で、命じた。
「おれは、貴女を懐妊させるために、抱くのだ。愛して、抱くのではない。貴女も、そのつもりで、良心の咎めも、羞恥も、すてることだ」
志乃は、うなずいて、立ち上った。
流石に、弥太郎は、志乃が衣裳を脱ぎはじめると、視線をそらした。
――老人は、この座敷で、この嫁を犯しつづけたのか？
ふっと、想像すると、弥太郎は、嫉妬をおぼえた。
志乃が、牀にそっと身を横たえるのを待ってから、弥太郎はやおら、起って、自分も素裸になった。
志乃のわきに入った時、自分が生涯でただ一人恋した女を、こういう状態で抱くことになった運命を、弥太郎は、なにか、のろわしいものに感じた。
志乃は、死んだように、目蓋をふさいで、微動だにせぬ。
弥太郎は、愛撫することをためらった。
――老人は、どう扱ったのだろう？　いきなり、のしかかって犯したのか？

残忍にふるまうのが、この異常な交合には、ふさわしいと思われた。
しかし、弥太郎は、いまもなお、志乃を愛している自分に気がついた。
弥太郎は、残忍にふるまう代りに、志乃を、そっと、抱いた。そのからだは、軽かった。胸の隆起も小さく、胴も細く、掌にのせた臀部は薄かった。肌は冷たくかわいていて、どの柔らかな部分も、なんとなく稚さがのこっているようで、
——石女ではあるまいか？
と、疑われた。
弥太郎は、小さな乳房の上へ、顔を落した。
すると、すぐに、志乃の口から微かな呻きがもらされ、悚えようとして悚えきれぬ律動を、四肢に起した。
——老人は、この女に、官能の悦びを教えている！
瞬間、弥太郎は、はじめて、この細いしなやかな肢体を、さいなむ気持になった。
その時——。
廊下に、跫音が近づいた。
「弥太郎——」
格左衛門の声が、呼んだ。
——思いかえして、中止させようとしても、もう手おくれだ。
弥太郎の片手は、志乃の腹部をすべると、わずかな茂みの谷間を匍い降りて、湿った箇処を指先でさぐっていた。

「弥太郎、その営みは、無用に相成った」
——無用？　ばかな！
弥太郎の指頭は、容赦なく、奥へ押し入ろうとした。
「主馬が、ただいま、鬼籍に入ったことを、屋敷の者が、報せに来た」
格左衛門が、告げた。
はっ、となって、弥太郎は、心身をひきしまらせた。
跫音は、遠ざかった。
弥太郎と志乃のあいだには、しばらく、息苦しいまでの沈黙があった。
弥太郎は、まだ、志乃の裸身を抱いたままであった。
「……おゆるしを！」
志乃が、わずかに、身もだえして、ひくく、云った。
亡くなった良人に詫びたのか、それとも、弥太郎に乞うたのか、弥太郎の方には、わからなかった。
弥太郎は、しかし、もはや、志乃を犯す気持は、失せた。

四

弥太郎と志乃が、身じまいをととのえた時、すでに、格左衛門は、息子の遺体に会うべく、隠居所を出ていた。

志乃を、屋敷へつれて戻るのが、弥太郎の任務となった。
隠居所の門を出ると、弥太郎は、
「そのさきまで行けば、辻駕籠がある」
と、志乃に云った。
「はい」
志乃は、ものの十歩も行ってから、
「弥太郎様――」
と、呼んで、足を停めた。
弥太郎が、ふりかえると、志乃は、
「わたくしは、もう、鵜殿の屋敷へは、帰りませぬ」
と、はっきりとした声音で、云った。
「帰らぬとは？……このまま、実家へもどる、といわれるのか？」
「いいえ――。実家へももどりとうはありませぬ」
「……」
「弥太郎様、おねがいでございます。わたくしを、このまま、どこかへ、おつれ下さいますまいか？」
「……」
弥太郎は、返辞をしかねた。
「おねがいでございます！」

志乃は、必死の様子をみせた。
「わたくしは、良人を裏切った女でございます。口をぬぐって、その枕辺に坐る勇気はありませぬ。……良人が亡くなったこれからは、自分の心をいつわらずに、生きて行きたいと存じます。針仕事でも、なんでも、どんな辛い仕事でもいたしますゆえ、わたくしに、小さな住居を、おさがし下さいませぬか？　どうぞ、お願いでございます」
弥太郎は、こたえようとして、ふと、背後に、人の気配を感じて、首をまわした。
月あかりの中に、うっそりと佇立する人間をみとめて、弥太郎は、それが、鉄之助を斬った浪人者であるのを、見分けた。
その孤影にただよう殺気が、こちらに、つたわって来た。
「志乃さん、貴女をどこかへつれて行く前に、まず、こっちの生命を守らねばならなくなった」
弥太郎は、云った。
浪人者は、ゆっくりと、三歩ばかり寄って来ると、
「その婦人を、こちらに、申し受けたい」
と、云った。
ひどく陰気な、かすれぎみの声音であった。
「渡せとは、どういうことなのか？」
弥太郎は、問うた。
「その婦人に、惚れているからだ。ご亭主が逝ったいま、べつに、申し受けても、さしつか

えなかろう」

——こいつは、老人が志乃を犯していることを、知っていた。

弥太郎は、合点した。

「あいにくだが、こっちも、惚れているので、渡せぬな」

弥太郎は、はねつけた。

「では、勝負になる。それがしは、修善寺左膳」

浪人者は、名のった。

「狩野弥太郎」

「その名は、きいて居る。平山道場の高弟だろう。子竜門下の竜虎を、二人とも地べたに匍わせるのは、愉しい」

修善寺左膳は、鉄之助を手負わせておいて、また、弥太郎と果し合いをすることに、絶対の自信を持っている様子であった。

弥太郎は、無言で、草履をぬぎすてた。

刹那——。

修善寺左膳が、懸声もかけずに、凄じい抜きつけの一撃を、あびせて来た。

弥太郎は、隅田川の川縁の方へ、地面をすべって、これをかわした。

流れを背にして、青眼に構える弥太郎を、じっと、すかし視た左膳は、

「井部鉄之助より、お主の方が、出来る」

と、云った。

その構えは、どの流儀にもない独特のものであった。

柄を摑んだ双手を、顔面よりもやや高く、左の空間に置いて、刀身をかなりふかい角度で、斜めに立てていた。

これは、おのが右半身を、すべて隙だらけなものにしていることだった。

その隙へ、斬りつけさせておいて、斜め上段から、飛電のひと薙ぎで、勝負を決する迅業を、得意とするものであったろう。

弥太郎は、その誘いに乗るほどおろかではなかったが、さりとて、この異様な構えに対して、いかなる業を使えばいいのか、とっさに、脳裡にひらめかなかった。

——待つよりほかはない。

そう思いきめた。

背水の陣をとったのは、敵に、地歩の有利によるおごりを生ましめる策であったが、どうやら、これは、失敗のようであった。

修善寺左膳は、人を幾人も斬った実戦の経験者のようであった。

——流れへ逃げて、ぬれ鼠になるのは、ごめんだな。その間に、志乃をさらわれては、こっちの面目がなくなる。

弥太郎は、自分をおちつかせるために、呟いた。

修善寺左膳は、じりじりと間隔をせばめて来た。

第四話　魔性地獄

一

――殺られるかも知れぬ！

修善寺左膳が、さらに一歩、肉薄して来た刹那、弥太郎は、その奇形の剣に、微かなおそれを、おぼえた。

その時であった。

かなりはなれた地点に佇んでいた志乃が、突如、左膳の背後へ、奔り寄った。

右手に、懐剣が、抜きはなたれていた。

左膳は、その鋭い一撃を、かわすことはかわしたが、当然、構えが崩れた。

弥太郎には、その隙をとらえて、左膳を斬ることが、できた。

しかし、弥太郎は、それをしなかった。

左膳は、志乃を突きとばして、地面へうずくまらせておいて、弥太郎に、

「なぜ、斬らぬ？」

と、問うた。

「女の助けは、かりぬ」

弥太郎は、こたえた。

「ふん――」

左膳は、弥太郎の態度を、小面憎い、と感じた様子をみせたが、

「今夜は、この女性を、お主に預けておく。後日、もらいに行く」

と、云いすてて、すっと、二歩ばかり退ると、刀を鞘に納めて、歩き出した。

弥太郎は、左膳の姿が月闇に消えるのを見送ってから、

「志乃さん、貴女に、礼を述べるべきなのだろうが、余計なことをしてくれた、という気持も、こっちにある」

と、云った。

「さし出がましい振舞いをいたし、申しわけありませぬ」

志乃は、詫びた。

「貴女が、ああしてくれなければ、わたしは、斬られていたかも知れぬ。……あれは、ただの浪人者ではないようだ。魔剣、とでもいいたいほどの凄味を、みせた」

弥太郎は、志乃をつれて歩き出した時、ふっと、

――このひとは、主馬に嫁ぐ前は、おれに惚れてくれていたのではなかろうか？

そんな気がした。

それから小半刻過ぎて、弥太郎が、志乃をともなったのは、麹町二番町にある宏壮な構え

の旗本屋敷であった。

旗本小普請組でも、三千石以上の、布衣の身分の大身がいた。この屋敷のあるじが、そうであった。

篠田主水之介といい、数代前からの小普請であった。

主水之介は、弥太郎や鉄之助の友人、というよりも、畏敬する存在であった。頭脳の鋭く切れることは、旗本八万騎中比肩する者がなかった。

いずれは、役職に就いて、大目付にまで昇進するのではなかろうか、と噂されていた異数の人材であったが、二十一歳の時に、凶厄が待ち伏せていた。幕府があらたに設けた品川砲台で、オランダから購入した大砲の試し撃ちをしている時、奉行に乞われて、これを手つだっていた主水之介は、隊員が操作をあやまったために、砲身が炸裂して、その破片を双眸にくらってしまったのである。

いまは、歩行もおぼつかぬ不自由な身を、かこっていた。

弥太郎は、潜り門から、屋敷内に入ってみて、夜目にも荒れはてた光景に、

「ひどいものだ」

と、独語をもらした。

主水之介ほどの秀れた人物が、盲目になる不運に遭うたことが、どうしても、条理に合わぬように思われてならなかった。

主水之介は、盲目になった身をすねさせたか、妻を持たず、家来や使傭人にも次々と暇をくれて、いまは、ほんの三、四人しかのこさず、幽霊屋敷のように荒れはてさせたまま、門を閉ざして、くらしているのであった。

半年に一度ぐらい、弥太郎や鉄之助が、訪れるほかは、交際している武家も町人もいなかった。

二

表玄関で、案内を乞うと、この屋敷の主のような、七十過ぎた用人が、身を二つに曲げて、出て来た。

「狩野弥太郎が、夜分非礼を承知で、是非お願い申し上げたき儀があって、罷り越した、とお取次ぎ頂きたい」

「お待ち下され」

いったん、ひっ込んだ用人は、すぐに現われて、弥太郎と志乃を、書院へ通した。

絶えて客を迎えたことのない書院は、しめって、かび臭かった。

主水之介は、屋敷内では、歩行も馴れているとみえて、べつに手さぐりもせず、入って来て、座に就いた。

黒白ぐらいは、見分けがつくのであった。この身になって、十五年過ぎて居り、その間に、この人物の頭脳が、どのような変化をしたか、誰も窺知していない。

弥太郎は、志乃を主水之介に、ひきあわせてから、

「良人の鵜殿主馬は、本日、みまかりましたが、この女性は戻る意志を持ちませぬ。その

気持に至るまでの事情を、ご説明つかまつる」
そう云ってから、包まずに、一切述べた。
主水之介は、黙然として、きき取った。
志乃が義父から犯された、ときかされても、主水之介の表情は、すこしも変らなかった。
弥太郎は、語り了えてから、
「つきましては、ご当家へ、しばらくのあいだ、お預り頂けぬものか、とお願いに参上いたしました」
と、たのんだ。
「よかろう」
主水之介は、即座に、承知した。
「ご厚情、忝じけなく存じます」
弥太郎が、頭を下げると、志乃も、
「お礼の申し上げようもございませぬ」
と、平伏した。
主水之介は、用人を呼んで、志乃に部屋を与えるように命じておいて、志乃をつれて行かせた。
弥太郎一人をのこした主水之介は、
「弥太郎、あの女子は、お主に惚れているようだな」
と、云った。

「はあ？」
「めくらになってから、黙って向い合っているだけで、対手の気持が、汲みとれるようになった」
「わたしの方は、たしかに、鵜殿主馬に嫁ぐ前から、惚れて居りますが……」
「女子が、生涯に二度とないほどの重大決意をして、それを男にたのむ時は、その男に身も心も与えてよい、と思っている、と解釈して、さしつかえなかろう」
「……」
弥太郎の心が、動揺した。
「弥太郎、今夜は、志乃と一緒に寝てやることだ」
「は――、しかし、主馬がみまかった同じ日に……」
「からだを交えよ、とは云って居らぬ」
「はあ？」
「ただ、一緒に、やすんでやれ、とすすめて居る。……いやか？」
「いやではありませぬが……」
「いやでなければ、そうしてやれ」
主水之介は、弥太郎の返辞もきかずに、座を立った。
弥太郎は、腕組みした。
――主馬は、志乃に男がいる、その復讐をしてやりたいから、志乃を犯してくれ、とたのんで、それを宛然遺言代りにして、逝った。逝ったその日に、犯してやるのも、主馬の霊を

なぐさめることになるのかも知れぬ。
そんなことを、いささか身勝手に、考えた。
老用人が、顔をのぞけた。
「お部屋へ、ご案内つかまつります」
弥太郎は、ためらった。
——どうすれば、よかろう？
用人の方は、弥太郎の起つのを、待っている。
——ままよ、抱いてくれる。ただ、抱くだけだ。
自分に云いきかせると、弥太郎は、立ち上った。
奥まったその部屋に、灯かげがあり、弥太郎の胸は、にわかに、さわいだ。
「ごめん——」
障子を開けると、志乃は、延べられた牀の裾に、まだ、帯も解かずに、坐っていた。
弥太郎が入って来るのを見ても、べつに、おどろきの色も示さなかった。
「この屋敷のあるじから、貴女と一緒にやすむように、命じられた」
弥太郎は、云った。
「……」
志乃は、俯向いた。
「主馬が逝った日に、貴女と一緒にやすむのは、良心がとがめる、とこたえたところ、からだを交えよとは云わぬ、と云われた」

「……」
「貴女の気持次第だが……？」
弥太郎は、志乃を瞶めた。
志乃は、俯向いたままで、
「ご一緒に、おやすみ下さいませ」
と、こたえた。
「貴女は、主馬にすまぬ、とは思わぬのか？」
「思いませぬ」
志乃の語気は、きっぱりとしたものだった。
逆に、弥太郎の方が、たじろいだ。
——この女子は、意外にも、邪悪の性を心底に秘めているのではないか？

三

牀には、弥太郎がさきに就き、志乃は、ややおくれて、そっと、入って来た。
間隔を空けて、志乃は、仰臥すると、目蓋を閉じた。
そのまま、寝室には、重い静寂が占め、弥太郎も志乃も、身じろぎもしなかった。
弥太郎は、何者かに、しばりつけられているような、息苦しさをおぼえていた。
女の数をかなり知っていたし、その中には、町家の娘や浪人者の後家も加えられる。牀の

技も、ひとわたり演じて来た自信もあった。
にも拘らず、不動しばりに会ったごとく、指一本も動かせぬとは、どうしたことなのか。
弥太郎は、思いもかけぬおのれの小心さを、知らされたような気がした。
と――。
その時、志乃の方が、微かに動いた。
その動きに応じて、弥太郎の神経が、苛立った。
「弥太郎様――」
志乃の方が、さきに、口をひらいた。
「なんであろう？」
「貴方様は、主馬を、お仲間のうちでは、最も謹厳な、誠実な、表裏のない人物だ、とお思いだったと存じます」
「その通りではなかった、といわれる？」
「主馬は、二重の人格を持っておりました」
「なに？」
「亡くなった人を、鞭打ちたくはございませぬが、わたくしがこうして、貴方様と、同じ牀にやすむのを、なんという不倫な女子か、というお気持があると存じますので、正直に申し上げるのでございます」
「……」
「主馬は、男子としては、不能者でございました」

「……」
弥太郎は、固唾をのんだ。
「このことは、義父上と主馬とわたくしと、それから……」
志乃は、そこで、ひと喘ぎしてから、
「用人の松尾嘉兵衛と、四人しか知りませぬ。……主馬は、十七歳の正月の乗馬始めに、落馬して、背中を打って、その時から、不能者になりました。……不能者であることを、かくして、主馬は、わたくしを、妻に迎えたのでございます」
と、語って、また、しばらく、沈黙を守った。
その沈黙を破ると、志乃は、おどろくべきことを、告白した。
主馬は、不能者ではあったが、激しい欲情を持っていた。
その一点だけを行うことが叶わぬままに、志乃を全裸にして、狂おしい愛撫をした。しかし、そのうちに、肝心の営みを為し得ぬための焦燥から、主馬は、用人の松尾嘉兵衛を呼びつけて、志乃を犯させ――その光景を目撃することで、倒錯した満足感を得ようとした。
忠実な家来の松尾嘉兵衛は、
「その儀ばかりは――」
と、拒絶したが、主馬は、許さなかった。
やむなく、嘉兵衛は、志乃を犯した。
志乃にとって、これは、生地獄であった。
人には語れぬことであったし、一度犯されると、もはや、のがれることはできなかった。

主馬は、毎夜、嘉兵衛に志乃を犯させ、それを目撃した。いや、目撃するだけではあきたらず、嘉兵衛に犯されている最中の志乃の、唇を吸い、乳房を吸ったのである。

やがて、その地獄の沙汰は、主馬が、喀血して、牀に臥す身となってから、止んだ。

その代り、主馬は、志乃を枕辺に、仰臥させ、下肢を拡げさせて、その秘所を、一刻でも二刻でも、じっと凝視する習慣をつくったのである。

そして、それは、三年間もつづけられたのであった。

志乃は、語りおえると、両手で、顔を掩うた。

「……すると、ご隠居が——格左衛門殿が、貴女を犯したことも、主馬は、ちゃんと知っていたのであろうか？」

「いいえ。義父上は、わたくしを、犯して居られませぬ。義父上のお話は、嘘なのです。……義父上は、主馬の狂気の行状をご存じでした。それで、わたくしを、ふびんとお思いになって、……せめて、わたくしが娘の頃好きだった貴方様に——と、考えて下さったのだと存じます。……主馬が鉄之助様と貴方様に、わたくしを犯してくれ、とたのんだのは、自分が死んで、わたくしが生き残るくやしさ、のろわしさのゆえであったと存じます」

弥太郎は、茫然となって、天井を仰いだなり、志乃のあまりにもいまわしい話を、どう受けとっていいか、わからなかった。

——まことなのか？　それとも、志乃の苦しまぎれのでたらめなつくり話なのか？

疑惑は、まだ、のこっていた。

事実とすれば、志乃が、鵜殿家へ戻りたくないのは、当然である。

そらぞらしく、良人の葬儀をつとめることはできない、という気持は、充分理解できる。

そしてまた、良人の亡くなった日に、その友人に身をまかせる決意をしたのも、決して、非難されるべきではないであろう。

四

「弥太郎様——」

志乃が、呼んだ。

「……うむ」

「わたくしを——けがれたわたくしを、お抱き下さいますか？」

「……」

「お願いでございます。……わたくしに、なにもかも、忘れさせて下さいませ」

弥太郎は、一瞬の躊躇ののち、双腕をさしのべた。

志乃は、その双腕の中に入って来ると、もう官能の疼きを起して、喘いだ。

隠居所の寝室で抱いた時とは、別人のように、激しく積極的であった。

弥太郎が、思わず、きつく抱きしめると、

「……うれしい！」

志乃は、声をふるわせて、そのしなやかなからだを、弥太郎の体軀の中へ、溶け込ませようとした。

弥太郎は、唇へ口を重ねて、激しく吸いながら、片手で、その下肢から長襦袢と二布を、はぐり取った。

志乃の肌は、冷たくかわいて、なめらかであった。

自ら狂おしげに、下肢を、弥太郎の下肢にからめ、押しつけて、身もだえした。

弥太郎は、唇から乳房へ、口を移した。

「ああっ！」

志乃は、あたりをはばからぬ呻きをあげて、全身を顫わせ、弥太郎の頭を、ひしとかかえた。

その時であった。

襖をへだてて、次の間から、

「そこらあたりで、よかろう」

冷やかな声が、かかった。

主水之介であった。

弥太郎も志乃も、石のように動かぬものになった。

「弥太郎、女の魔性が、判ったであろう。起きて参れ」

――魔性?!

弥太郎は、愕然と、目がさめる思いがした。

志乃は、弥太郎が起き上ろうとすると、しがみついて来た。

「弥太郎様！　わたくしは、貴方様が好きなのです！　こ、これは、いつわりではございません。貴方様を、ずっと以前から、わたくしは想いつづけて参りました」

弥太郎は、しかし、志乃をふりはなして、起きた。

主水之介は、書院で、待っていた。

弥太郎は、その前に端座すると、俯向いた。

「弥太郎、女の虚言というものは、見事なものだな」

「貴方様は、あの女子の正体を、看破されて、わたしを一緒に牀に就かせてみようと、お考えになりましたか？」

「女子が、それを拒否すれば、尋常の性根の持主であろうが、もし、同衾を承知すれば、これは、相当な魔性だ、と想像した」

「……」

「実にまことしやかに、むごたらしいでたらめ話を、思いついたものだ。あっぱれ、というべきであろうな」

「では、主馬の方が、やはり、正しいカンを働かせていた、と仰言いますか？」

「うむ。主馬は、あの女子を妻にして、月日が経つにつれて、その魔性を看てとったに相違あるまい。……用人の松尾嘉兵衛とやらを、誘惑したのも、志乃であろうし、義父の格左衛門をも、だました」

「……」

「格左衛門に向っては、鵜殿家の血統を絶やさぬためにも、是非そうして欲しい、と持ちかけたのではあるまいかな」

「……」

「弥太郎、あやういところであったな」

そう云って、主水之介は、笑った。

「お詫びつかまつります。……志乃を、実家へ、突きもどすことにいたします」

弥太郎は、憤怒をこめて、云った。

「待て――」

主水之介は、とどめた。

「お主のたのみ通り、当分、わしがあずかろう」

「は――？」

「わしは、魔性の女に、興味がある。わしに対して、どのような誘いの手を思いつくか、これを見とどけたいと思う」

平然として、主水之介は、云ってのけたことだった。

第五話　華やかな婚礼

一

「武人、銭を愛さずして、首がまわらず、さりとて、無い袖は振れず、借金、借金、また借金、か」

大声で云い乍ら、階段をのぼって来た者が、二階の座敷をのぞいて、

「いずれも、小人閑居して、不善を為す顔だのう」

と、云った。

この柳橋の船宿ちぐさやが、小普請組（こぶしんぐみ）の若い旗本連中の、居溜り場所になっていた。

座敷には、四人ばかり、思い思いの姿勢で、ひまをもてあましていた。

小普請というのは、将軍家に召し出される機会がなく、職に就かぬ旗本たちの集団をいう。

家督相続したが、幼少のために、役職に就けぬ者、病気で職をしりぞいた者、落度があって、職を免じられた者などが、小普請入りをした。しかし、これは、幕府が初期の頃のことで、時代も下って、この天保期になると、親の代からの小普請組が大半で、よほどずば抜け

た秀才でない限り、召し出されて役職に就くのぞみは、なかった。

小普請組は、役職に就いていないのであるから、旗本であり乍ら、江戸城へ登城することもなく、献上物の心配をすることもなかった。

小普請の面々で、なんとかして御番入りをしようと、八方へ手をつくして、就職運動をする者もいたが、ほとんど成功しなかった。

昇進の道は、全くとざされていた。

知行所持ち、切米取りのちがいはあっても、一年中何もせずにごろごろしているよりほかに、目的のないくらしぶりであった。

旗本は、食禄のほかに、収入の手段が皆無であった。全くの消費者であった。商売をすることは、厳禁されていたのである。

することがなく、金もないので、自分の屋敷の前に、小料理屋をつくった旗本が、その罪を問われて、切腹した例もあった。

屋敷が広いので、庭を畠にして、野菜をつくって、自給自足をやる者もいたが、その野菜を売ることは、許されなかった。あるいは、花壇をつくって、四季の花を、こっそり、富裕な町家へわけたりしている者もいたし、万年青（おもと）を丹精したり、小鳥飼いに熱中して、それを内職にしている者もいたが、これが表沙汰になると、改易のおそれがあった。

幕府では、かれらが内職しなければ、しのぎがつかぬことを充分承知していたので、その内職を見て見ぬふりをしているだけのことだった。

旗本大身が、門番長屋を、博奕場（ばくち）にして、そのかすりを取る、ということも、生活手段とし

ては、やむを得なかった。尤も、こうした悪質の内職は、露見すれば、主人は、切腹を覚悟しなければならなかった。

要するに、小普請組は、何もせずに、ごろごろして、怠惰な一生を送るよりほかはなかったのである。

「内藤、お主、女房よりも愛していた鶯（うぐいす）を、とうとう、日本橋の越前屋に、売ったそうだな」

一人が、訊ねた。

「うむ。三年さきの扶持米まで抵当にしている身ではのう、背に腹は、かえられず――泣き泣きゆずった」

「啼き啼き売られる鶯の、ほうほけ今日の、別れのつらさか」

「ここに集った面々で、百両以下の借金を背負った者は、いないだろう」

「自慢ではないが、身共（みども）は、去年だけで百二十両、一昨年の残りが七十六両、親爺の代から、踏み倒した借金だけで、ざっと八百両あるぞ」

「こっちは、十一代も前からの借金だ。先祖が、東照神君（家康）から、甲冑代として銀一貫をお借り申して以来の伝統を持って居る」

「おれの先祖をたずねると、神武天皇のお供をした金鵄（きんし）飼いの伝書役でのう、もっぱら、借用証文をくわえさせて、あっちこっちへばらまいたらしい」

でたらめを云って、大あくびをすると、

「ああ、金が欲しいのう、金が――」

「いっそ、思いきって、押込みでもやるか」
「浪人ていになって、覆面して、西国なまりでおどかせば、まさか、直参とは、お釈迦様でも気がつくまい」
「おいおい、恥を知れ。押込み強盗を働くほど、お主ら、見下げはてた料簡になったか」
「そういうお主、先程、百両出す商人がいたら、いつでも、女房を一月貸してやるのだが、と云っていたぞ」
「女房を貸すのと、押込み強盗を働くのとは、ちがうぞ。こっちは、女房の操を売るのだ。押込みは、脅して掠奪するのだからなあ」
「あさましさに於ては五十歩百歩だろう」
「いや、ちがう。十年間抱いた古女房が、百両になるなら、その百両で、三年も未払いになっている用人・若党・中間・女中の給金を支払うことができるとすれば、べつに、他人様に迷惑をかけることではないし、おれは、本気だぜ。しかし、押込みはいかん。世の中万事、売買契約で成り立って居るのだ。やらず、ぶったくりは、世間のしくみに反する」

二

桜田優之助が、相変らず華やかないでたちで、流行歌をうたい乍ら、その座敷へ現われたのは、云いたい放題のことを口にしているうちに、なんとなく、座がしらけた頃あいであった。

「御一統、おそろいで――」
横坐りになると、裾から緋の長襦袢を、なまめかしくこぼして、
「千歳なる松だに枯ゆる世の中に今日とも知らで送るわれかな――おお、いやなこと」
と、いかにも堪えがたそうに、首を振った。
「鵜殿主馬のことか？」
「そうじゃわいな。……黄泉の路上、老は少なし、というけれど、主馬は、あの若さで鬼籍に入って、可哀そうに……。お主らも、くれぐれもからだをいとうがよろしかろう」
「ふん――。どの面も、今日明日にくたばりそうもないな」
「芭蕉の句にあるぞえ。やがて死ぬ気色は見えず蝉の声」
その折、片隅で、ずっと寝そべっていた一人が、むっくり起き上った。
小笠原金吾、という。眉間に、三日月形の刀創があるので、三日月金吾とも称ばれている。性情の酷薄さでは、仲間さえも戦慄させるほど、その行状は、荒れていた。
「面白い金もうけの方法がある」
唐突に、そう云った。
「どんな方法だ？」
「優之助が、現われたので、思いついた。……おい、優之助、どうせそういうさまが好きなお主だから、一度ぐらい、花嫁御寮になっては、如何だ？」
「花嫁御寮に――？」
「左様、華々しく嫁いで、新郎と牀入りして、契ってみてはどうかな」

「成程、それで金がもうかるのなら、あたしに異存はないぞえ。美しい花嫁になる自信はありますわえ」

「よし、きまった。話は、こうだ」

小笠原金吾は、語りはじめた。

蔵前の札差仲間の中で、随一の富裕を誇る伊勢屋三郎兵衛が、このたび、伜の久七に、嫁を迎えることになった。

江戸の札差仲間は、百人の組織で、現米支給の旗本・御家人の米受け取りを取扱う独占商いであるために、そのもうけは、莫大であった。

幕府の初期の頃は、切米取りの旗本は、たとえば、三百石取りならば、自身または家来が、直接幕府の御蔵に出頭して、現米を、年三回、百石ずつ受け取ったものであった。そして、受け取った米を、御蔵前の米屋へ売って、金に換えたのである。

その手続きが面倒なので、旗本は自身で出頭する代りに、米屋を代理にたてて受け取らせるようになった。さらに、時代が下るにつれて、旗本は、その年受け取る支給米を抵当にして、米屋から前借をするようになった。

天和年間には、旗本・御家人の切米受け取りは、すべて、米屋が代理となり、米屋の手代が、前日に、御蔵役所の札差場へ出頭するようになった。

札差の名称は、ここから起った。

享保年間には、札差たちは、株仲間の組織を設立した。

斯くして、蔵前の米屋百人は、切米取りの旗本・御家人の代理として現米を受け取り、給米手形を質にとって金を貸す営業を独占した。

いわば、旗本・御家人から、しぼりあげることで、財産をふくれさせた商人が、札差であった。

当時――。

蔵前の札差から、借金をしていない旗本・御家人は、一人もいなかった。

なかでも、伊勢屋三郎兵衛は、もっぱら千石以上の旗本大身を対手にして、あこぎなもうけかたをしていた。

土蔵に、千両箱がうなるほどたまると、こんどは、身分地位が欲しくなるのは、人情である。

伊勢屋三郎兵衛は、伜の久七のために、御家人の株を買い、ついでに、旗本の家から、眉目麗しい娘を、嫁に迎えることにしたのである。

伊勢屋三郎兵衛は、自分が金を貸している旗本大身を物色した挙句、一家をえらんだ。

松平主膳、小普請組、八百石の廩米取りが、それであった。

松平主膳は、もとは小姓組であったが、その妻が気が狂って、家出をして、四谷のお濠へ投身して相果てた罪を問われ、小普請に貶された旗本であった。

その娘の千津は、美貌の評判が高かった。

伊勢屋三郎兵衛は、松平主膳に、十年前から、金を貸し、元利つもりつもって、千二百両になっていた。

札差は、一両につき一箇月金二分の利息を取っていたから、十年も貸しっぱなしにしてい

れば、大変な金額になる道理であった。
松平主膳は、千二百両を棒引きにする条件で、
「ご息女を、伜の嫁に――」
と、伊勢屋から、申し込まれると、しぶしぶ承諾せざるを得なかった。
ひと時代むかしならば、想像もできない縁組みであった。
いまは、御家人の株を買った商人の方が、公儀をはばかることなく、こうした縁組みを堂と実行できるのであった。
文字通り、阿弥陀の光も、地獄の沙汰も金次第の世の中になっていた。

三

「……という次第で、明後日、松平主膳の娘は、伊勢屋へ輿入れする。千二百両を棒引きにした上に、結納は、五荷五種に添えて帯代として千両。ごうせいな婚礼だな。……ひとつ、この祝言を、手玉にとって、金もうけをしようという算段だ」
小笠原金吾は、そう云って、にやりとしてみせた。
「つまり、あたしが、松平主膳の娘の身代りをつとめる、ということかえ？」
優之助が、訊ねた。
「そういうことだな。こういう替玉役は、お主としては、待ってました、というところだろう」

「伊勢屋の伜が、どんな男か、それが問題だねえ」
「おあつらえ向きの男だ。まだ一度も女郎買いをしたこともない堅物と来ているから、お主が、手玉にとるには、もって来いではないか」
「あたしは、女の二人や三人、泣かせた奴の方が、歯ごたえがあって、やり甲斐があるがねえ」
「その意気で、ひとつ、伊勢屋の伜を料理してもらおう。……さあ、きまったぞ」
小笠原金吾は、手をたたいて、女中を呼ぶと、料理と酒を命じた。
他の旗本たちは、どういう大芝居になるのか、と興味津々の面持であった。

二日後の暮六つ――。
蔵前の伊勢屋の店さきは、紋入りの提燈が、ずらりとかかげられて、紋服に裃をつけた新郎を中心に、あるじ三郎兵衛以下数十人が、並んで、松平家よりの花嫁の到着を、待ち受けた。
やがて、花嫁の行列は、しずしずと近づいて来た。
往還には、無数の見物人がひしめきあい乍ら、旗本大身の家から輿入れして来た花嫁について、あることないことの噂を、私語し合っていた。
乗物が、店さきに据えられ、新郎の久七が、しきたりにしたがって、それに歩み寄って、新婦の手を把って、つれ出そうとした――その時。
「あいや、待たれい！」

大声をあげて、見物の人垣を割って、進み出て来た武士があった。
小笠原金吾であった。
「伊勢屋の婿殿に、もの申す。それがしは、旗本小普請組小笠原金吾」
「へい――」
久七は、提燈のあかりの中に浮き出た眉間の三日月傷を、うす気味わるげに見やった。
「それがしは、これなる松平家の息女千津殿と、筒井筒、振りわけ髪の頃よりの幼馴染でござる。ありていに申さば、それがしは、元服いたした時より、妻にするならば、千津殿、と心にきめ、千津殿にも、その意のほどを、つたえて居り申した。千津殿もまた、異存はない旨を、こたえてくれて居ったのでござる。……しかるに、松平家の台所の逼迫により、千津殿は、当伊勢屋の、にわか御家人である貴殿に、輿入れすることに相成り申した。いわば、金で買われた人身御供――と申しては、みもふたもござらぬ。金が万能の世の中でござれば、斯くの次第に相成ったのも、やむを得ぬ仕儀、とそれがしは、無念の泪をのんで、あきらめ申した。但し！」
金吾は、その「但し」という言葉に、力をこめると、
「もし、千津殿を、家風に合わぬ、などと難癖をつけて、離縁にでもいたすような事態に相成れば、松平家は如何様に納得されようとも、この小笠原金吾が、承知せぬ。この腰に佩びた伝家の宝刀を抜きはなって、当家へ乗り込み、貴殿をはじめ、一家全員、下婢小僧にいたるまで、悉く斬り仆す覚悟なれば、かまえて、千津殿を大切にとり扱って下さるようお願いいたす」

と、云った。
三郎兵衛が、息子に代って、
「離縁などとは、滅相もない。お手前様こそ、この目出度い宵に、要らざる忌みことばを口になされて、おつつしみなされませい」
と、たしなめた。
「伊勢屋、おのが一生にただ一人の女人、と想いをこめて、一日片刻も忘れたことのなかった千津殿が、むざむざと、他人に取られるのを、眺めなければならぬ男の心中が、お主には、判るか？」
「いえ、充分にお察しいたします。お察しいたしますからには、当家へお迎えした嫁御は、それはもう大切にいたしますゆえ、何卒ご安堵のほどを――」
「よし、その誓言、神明に誓って、違約いたすなよ」
「仰言るまでもありませぬ」
三郎兵衛は、久七にも、誓わせた。
小笠原金吾は、
「明朝、あらためて、参上して、当家の誠意のほどを見とどけることにいたす」
と、云いのこした。

四

新婦は、伊勢屋の奥に、みちびかれると、化粧部屋で、粉黛をしなおし、衣裳をきかえてから、祝言の式の座敷へ現われた。

綿帽子をかぶって、白い顎しかのぞけていなかったが、その顎だけでも、ういういしい美しさがうかがわれた。

婚礼の座の次第は、婿は、客位といって、上座に就き、新婦は、主位といって、下座に就く。これは、そのむかし、良人が妻の家にかよった風習をのこしていることを示す。

二人の可愛らしい少女が酌人になって、式三献がなされる。別に瓶子の役がいる。瓶子は、紙を折ってつくった男蝶女蝶で飾られている。

盃は三重ね、それをおのおの三度ずつ飲む。すなわち、三三九度の盃である。

婿が、盃を置くと、すぐに、雑煮が出される。

それを喰べ了って、婿は、席を立ち、新婦の前には、高盛が出される。

この式には、真行草の三方式があって、ふつうの町家では、とうてい正式を行うことはせぬ。伊勢屋では、三方式のうち、第一の真級をえらんで、滞りなく、すませた。

この式が畢ると、色直しの儀がある。

新婦は、はじめは白綾の小袖であるが、化粧部屋へもどって、五色金銀で彩ったあでやかな小袖にきかえて、座にもどる。

これは、舅から贈られる衣裳であるから、今宵の花嫁の色直し衣裳は、参列の人々が目をうばわれるほど、贅をつくした華麗きわまるものであった。

婿の方もまた、小袖、帯、扇子などをあらためて、席に就いた。

双方の親、兄弟姉妹、親族との近づきの盃が交されてから、新婦の方からの進物が、舅、姑、小姑、縁戚から下婢にいたるまで、披露されて、おひらきになる。

新郎は、新婦の手を把って、いよいよ、寝所へ入るのであった。

寝所でも、夫婦かための盃が、褥の前で交される。

伊勢屋の伜久七は、今日まで、ついに女の肌に接したことのない、生真面目そのものの若者であったので、新婦の顔へ、まともに視線をあてることさえも、できなかった。

新婦の方は、寝所に入ると、綿帽子をはずしていたが、久七は、どうしても、その顔を、視ることができなかった。

盃を交し了えると、久七は、しばらく、もじもじしていたが、

「どうぞ、よろしく、お願い申します」

と、頭を下げた。

新婦は、黙って、礼をかえしただけである。

牀入りは、婿が先で、新婦は、燃えるような緋の長襦袢姿になって、あとからそばへ横たわることになる。

久七は、牀に仰臥すると、目蓋を閉じた。とたんに、胸の動悸が、高くなり、せわしくなった。

生れてはじめて、女人を抱くのであった。しかも、美貌の評判高い、旗本大身の息女を、であった。

久七が、胸をおどらせたのは、当然である。

花嫁は、褥の裾で、ゆっくりと時間をかけて、小袖を脱いだ。

第六話　狂乱記

一

燃えるような緋の長襦袢（ながじゅばん）姿になって、新郎久七の仰臥する牀の中へ、入って来たのは、松平主膳の娘千津ではなく、桜田優之助であったことは、あらためてことわるまでもない。

優之助は、牀入りしたところで、久七に、こっちが男である証拠を示して、仰天させ、騒動を起す手筈であった。

久七が、遊興の経験者ならば、この芝居に対して、余裕のある態度をみせるであろうが、吉原などへ一歩も足を踏み入れたことのない男であるから、ただもう仰天して、為すすべを知らぬであろう、というのが、この策を樹てた小笠原金吾の予測であった。

優之助としては、さっさと、久七に、こっちが男である証拠を示せばよかった。

久七が仰天したところで、牀から脱け出す。久七の方は、しかし、仰天はしたものの、優之助にとびかかったり、呶号をあびせる勇気はなく、うろたえたまま、父親の三郎兵衛に、

「あの嫁は、松平家へもどして欲しい」

と、たのみに行くに相違あるまい。
三郎兵衛が、理由をきいても、久七は、こたえられまい。
よしんば、こたえたにしても、三郎兵衛の方は、
「ばかな！」
と、信じる道理があるまい。
ともかく、新郎が花嫁をきらって、一夜が明ける。
そこへ、小笠原金吾が乗り込んで、伊勢屋父子をおどかし、居直って、千両ばかりせしめて、花嫁をつれて、ひきあげる、という筋書きであった。
ところが——。
優之助自身は、この婚礼を、大いに愉しんで、牀入りして、すぐに男であることを、久七にばらすのが、もったいない気がした。
——いっそのこと、朝まで、花嫁でいてくれようか。
そういう考えが、起った。
優之助は、女装に近い姿になってすごして来たが、実際に、男に身をゆだねて、もてあそばせたことはなかった。
湯島の陰間茶屋の前髪立ちの少年どもは、上野の破戒僧の玩弄物になっているが、優之助は、そんな経験をしたい、とのぞんだことは一度もなかった。
小笠原金吾に、そそのかされて、美しい花嫁衣裳をまとってみると、しだいに、自分が、今宵はじめて、男に操を与える処女のような錯覚が起って来たのである。

なまめかしい長襦袢姿になって、牀に入ったいま、
——男に身をまかせるのは、こんなにうれしく、はずかしいものなのか。
と、知ったのである。
対手は、一度も女郎買いをしたこともない堅物である。
美しい女房をもらって、それを抱く興奮で、胸を、早鐘のように動悸打たせているのが、こちらにつたわって来るのだ。
——ままよ、一度、陰間のまねをしてみてくれようわえ。
優之助は、ほぞをかためた。
久七は、こちらが牀に入っても、仰臥したなり、石になったように、身じろぎもせぬ。
やむなく、優之助は、誘発することにした。
そっと、上半身をねじって、久七の方を向いた。
すると、久七は、喘ぎ乍ら、
「ご、ごめん下さいまし」
顫え声でささやくと、片手を肩にかけて来た。
優之助は、唇を与えやすいように、やや仰向いてやった。
久七は、無我夢中で、口を唇に重ねて来た。全身をわななかせている。
そのうぶさが、優之助に、たまらない快感を与えた。
唇をひらいてやると、舌がおそるおそる忍び入って来た。
女になるということが、このようにも愉しいものであろうとは、優之助は、女になった自

分に興奮しはじめた。

処女の羞恥を対手につたえつつ、抱かれる悦びを、しだいにからだに現わすことは、たしかに、たまらない快感であった。

やがて、久七は、そこは男の本能で、そろそろと、片手を、胴をすべらせて、下へのばして来た。

優之助は、ここで、羞恥の身もだえをして、

「いや！」

と、小さく叫ぶと、唇だけを久七に与えておいて、首をねじって、体位を変えた。

臀部を向けられた久七は、その臀部を、撫でまわしつづけた。

長襦袢と二布（ゆもじ）を捲りあげて、下肢をはだかにするには、久七は、相当勇気をふるい起さねばならぬ模様であった。

しかし、ついに、久七は、それをやってのけ、片手を、背中からのばして、下腹部をさぐろうとした。

優之助は、その手を押さえて、しばらく、動かぬものにしていたが、ゆっくりと、おのが臀部へ移した。

二

女を知らぬ久七は、女から手でさぐることをこばまれると、おとなしく、またしばらく、

臀部を撫でつづけた。

堅いものが、臀部の谷間（たにあい）にふれた瞬間、優之助は、久七の顔から顔をどけて、完全に、男に背中を向けると、海老のような姿勢になった。

久七は、もはや興奮の極に達して、うしろから、しがみついた。

優之助の臀部の谷間は、久七の堅い物で、したたかに濡れた。

男の力が、肛門に強く加えられるまでには優之助の方が、そうさせるべく誘導するのに手間がかかったし、かなり長い時間を費さなければならなかった。

一瞬——。

「い、いたあい！」

優之助は、悲鳴をあげた。

その悲鳴が、久七をふるいたたせたらしく、強い力は、容赦なく、体内に押し入って来た。

「いたい！　いたい！……ゆ、ゆるして——」

女声をつくりつつ、悲鳴をあげることが、優之助にとって、無上の刺激となり、いまは、完全に、操をやぶられる処女そのものであった。

双方とも、生れてはじめての営みは、またたく間に終った。

終ったとたん、優之助は、くるりと向きなおって、自分の方から、久七の口をもとめた。

久七は、ただぐったりとなって、優之助が口をむさぼるにまかせた。

優之助は、ひとしきり、口をむさぼっておいて、そっと、牀から脱け出した。

自身もしたたかに放射していて、二布をよごしていたのである。

屏風の蔭で、二布をとりかえて、牀へもどって来た優之助は、
「おやすみなさいませ」
と挨拶しておいて、目蓋を閉じた。
こころよい睡魔が、おそって来た。
夜明けの頃合、久七の手がのびて来た。
久七は、どうやら、あまり睡らず、しばしば目ざめては、幸福感に酔うていた様子であった。ただ、寝息をたてている花嫁を、再び抱くことをためらっていたに相違ない。
ついに、我慢できなくなり、夜が明けて来たので、あわてて、思いきって、手をのばしたものであった。
優之助は、その手が腹にふれる触感で、なかば目ざめた。
わずらわしい、と感じたし、面倒でもあったので、そのまま、下腹部へ匍いさがして来るにまかせた。
「あっ！」
久七が、驚愕の叫びをあげたので、優之助は、薄目をひらいた。
久七は、眼球がとび出さんばかりの形相で、こちらの顔を、瞶めている。
有明の仄かな灯かげの中では、優之助は、自分の顔の美しさに、充分の自信を持っていた。
久七が、穴があくほど瞶めても、この顔は、女のものなのである。それも、絶世の美貌といっても、いいくらいである。
優之助は、ただ、けげんそうに、久七の眼眸を受けとめている。

久七は、瞶めているうちに、自分の手がふれたのは、なにか別のもので、とんでもない錯覚を起したような気がして来た、という表情になった。
「どうか、なされたか？」
優之助は、やさしく、訊ねた。
「い、いえ――」
久七は、鎌首を落した。
もう二度と、優之助のからだには、ふれず、むこう向きになった。

朝、はやばやと、小笠原金吾は、伊勢屋をおとずれた。
べつに、こちらが期待したような、変った空気にはなっていなかった。
「無事に、婚礼が終ったかどうか、そのことをたしかめに参上した」
小笠原金吾は、番頭や手代の顔を、じろじろと眺めやり乍ら、云った。
番頭の一人が、奥へ取次ぎ、金吾は、
「どうぞ、お入り下さいまし」
と、みちびかれた。
――奥で、内密に処理しようというわけだな。
そう思いつつ、金吾は、うす暗い長廊下を進んだ。
通された座敷は、贅をつくしたものであった。
――直参を食いものにしやがって、こうも肥えやがったか。

その証拠を、座敷のたたずまいに見せられて、金吾は、胸がむかむかした。

――千両といわず、三千両もまきあげてくれようか。

腕組みして、そう呟いていると、跫音がして、あるじの三郎兵衛が姿をみせた。

「これは、わざわざ、お越し下さいまして、有難う存じます。……おかげさまにて、婚礼は、滞りなくおわらせて頂きました」

「千津さんは、相違なく、昨夜、お主の息子の嫁になった、と申すのだな！」

「はい。仲人が、今朝がた、寝所に入りましたところ、むつまじく、牀あげをすませて、五日帰りまでの部屋見舞いのことやら、三ヵ日の振舞いのことなど、相談いたして居りました由にございます」

「……？」

金吾は、内心、

――いったい、どういうのだ、これは？

と、わけがわからぬ気持だった。

三郎兵衛は、番頭がはこんで来た三方を受けとって、

「ほんの些少でございますが、披露目のおしるしまでに、ご受納下さいまし」

と、さし出した。

三方には、切餅二つ――五十両が、のせられてあった。

三

小笠原金吾が、憮然たる面持で、柳橋の船宿ちぐさやの二階に上って来た時、そこには、すでに十人以上も、集って来ていた。

一斉に、期待の視線を金吾に向けて、上首尾に事がはこんだ、という報告を待った。

金吾は、むっつりして座をえらぶと、

「ばかげている！」

と吐き出した。

「おい、優の字が、仕損じた、というのか？」

「わからん」

金吾は、首を振った。

「わからん、とは――？」

「わからんから、わからんと云って居る」

「なんのことだ、それは？」

「……つまり、優之助は、松平主膳の娘になりすまして、滞りなく、伊勢屋久七と、合歓の営みをすませた、ということだ」

「では、今朝もまだ、花嫁が男であることが、露見していないのか？」

「うむ――」

「優の字の奴、さては、陰間のまねをやり居ったな。対手が、女郎買いをしたこともない朴念仁なら、ごまかせただろう」

「それにしても、婿の腰を抜かさせてこそ、千両になるものを……、優之助め、しばらく、伊勢屋で、嫁に化けているつもりかな？」

「なにか、連絡をして来るだろう。木乃伊取りが木乃伊になった、というやつだ」

金吾は、五十両を拋り出すと、

「分けるには、足らぬ」

と云った。

「五十両あれば、これだけの人数でも、吉原で、三日は流連できるが……」

一人が云ったが、賛成する者もいなかった。

なんとなく、はずまぬ空気の中で、若い旗本たちは、酒を飲みつづけた。

やがて、一人去り、二人立ち、座敷には、金吾だけが、ぽつんととりのこされた。

その頃合、階段に跫音がした。

入って来たのは、ういういしい町方女房姿になった優之助であった。

金吾は、かっと目を剝いて、

「貴様っ！」

と、呶鳴った。

「おしずかに――」

優之助は、にっこりして、

「どうだえ、このすがた、似合うかえ？」

と、しなをつくってみせた。

「冗談ではない！　一体、どうしたというのだ？」

「許してたもれ。花嫁になって、祝言したからには、ついでのことに、婿に抱かれて寝てみたい、という気持になったのは、人情ではあるまいか」

「千両になったのだぞ、千両に――」

金吾は、呶鳴った。

「ま、そう慍らずに――」

「これが、慍らずに居れるか！　陰間のまねごとをやりたいために、千両をフイにするとは、あきれはてた奴だ。……見ろ、たったの五十両にしかならなんだぞ」

いまいましげに、切餅を蹴とばした瞬間、金吾は、ふっと、妙な気分になった。

「おい、優之助――」

「なんだえ？」

「お主、久七に、からだをくれて、快感をおぼえたか？」

「ふふふ……」

「女子に生れそこなったお主のことだ、さぞかし、いい気持であったろうな」

金吾の双眼が、妖しい光を発した。

「……」

優之助は、黙って、視かえしている。

「ふむ！　どう眺めても、その姿、女でしかないぞ」
「……」
「おい、おれにも、抱かせぬか？」
「……」
「たのむ！　抱かせろ」
金吾は、さっと、迫るや、優之助へ猿臂をかけた。
優之助は、目蓋を閉じて、上半身を崩した。
抱き取った金吾は、激しく、その唇を吸った。優之助は、拒絶しなかった。
金吾は、片手で、裳裾をはね、二布をたくしあげて、掌を、脛から膝、膝から太腿へ、匍いあがらせた。
優之助の肌は、金吾の妻よりも、柔かで、滑らかであった。
金吾は、流石に、前をさぐらず、指を臀部へまわした。
とたん——。
優之助が、顔をはなして、
「そこいらで、とどめておかれい」
と、云った。
意外に、冷やかな声音であった。
「い、いや、おれは、犯すぞ」
金吾は、上ずった語気で、云った。

次の瞬間、金吾は、胸を突かれて、上のけに倒れた。
「優之助！　恥をかかすかっ！」
叫びざま、金吾は、差料をつかんだ。
「金吾、逆上するのは、みっともないぞ。正気にもどれ」
「その化け姿を見せられて、狂わずに居れるか。……優之助、おれにしたがわぬと、斬るぞ！」
優之助の顔に、憐憫と軽侮が入れまじったような表情がうかべられた。
「貴様っ！」
金吾は、かっとわれを忘れて、差料を抜きはなった。
「金吾！　友を失うぞ」
「ほざくなっ！」
金吾は、猛然と、優之助に、斬りつけた。
優之助は、初太刀も二の太刀も、鮮やかにかわして、廊下へのがれた。
金吾は、青眼につけて、優之助を、じりじりと、踊り場へ、追いつめた。
「止せ、金吾！」
優之助も、流石に、必死になって、叫んだ。
「斬る！　貴様を生かしてはおけぬ！」
金吾は、呻くように、云った。
その時、階段下に、狩野弥太郎が、立った。

「どうしたのだ？」

弥太郎には、女装の優之助と、金吾がさしのべた白刃だけしか、見えなかった。

眉宇をひそめて、訊ねかけた——その刹那、金吾が、突きをはなった。

優之助が、壁をこすって、辛うじて、その突きをかわしざまに、金吾へ体当りをくれた。

金吾は、階段を、凄じい音をたてて、ころがり落ちた。

弥太郎の足もとへ倒れた金吾は、それなり、起(た)とうとはしなかった。

自身の差料で、のどをふかぶかと刺しつらぬいていたのである。

弥太郎は、降りて来た優之助と、顔を見あわせた。

「この男は、いずれは、こういう死にざまをさらすのではないか、と思っていたが……」

弥太郎が、そう云うと、優之助は、いたましげに、屍体(したい)を見下して、

「五十両は、葬儀代になったわえ」

と、呟いた。

第七話　男と女

一

江戸に、名月の宵が、来ていた。

望月という。

この宵は、武家屋敷をはじめ、商家でも裏店でも、すべて、団子をつくり、これに柿や栗や芋や枝豆や葡萄を添えて、三方や盆にうずたかく盛りあげ、座敷の縁さき、あるいは、屋上の物干台にかざった。尾花秋草を挿した花入れを配して、風情をつくることは、勿論であった。

文士墨客は、観月の筵(えん)をひらいて、吟詠を愉しむ。

江戸の風雅な行事のひとつであった。

麹町二番町の旗本屋敷でも、十五夜観月の用意は、ととのうていた。

ただ——。

遺憾なことは、その家の主には、せっかく美しく晴れた宵空に、昇って来る明月を、見る

ことが、叶わなかった。

座敷の縁側に、坐った篠田主水之介の双眼は、かたく閉じられていたのである。

主水之介は、遠くからひびいて来る八幡宮の神楽太鼓の音に、耳をかたむけているばかりであった。

この家の夕餉は、早かった。七つ（午後四時）に摂られた。

視力がようやく黒白の見分けがつく主人のために、昏くならぬ時刻を、えらんでいたのである。

したがって、主水之介は、ただでさえ長い秋の夜を、よけいに長いものにおぼえ乍ら、黙然として、すごすことになるのであった。

妻を持たず、交際する友もなく、望月といっても、訪れる客は、ないのであった。

衣ずれの音が、ひびいた。

「お茶を――」

膝の前へ、さし出したのは、志乃であった。

主水之介が、狩野弥太郎から志乃を預ってから、早いものでほぼ一月が経っていた。

この一月間、べつに、屋敷内に、何も変ったことは、起っていなかった。

志乃は、与えられた部屋に、殆ど終日閉じこもっていた。

こうして、主水之介の前へ、お茶をはこんで来ることなど、今宵が、はじめてであった。

志乃は、すぐに立ち去らず、主水之介が一服喫むあいだ、つつましく、膝に両手を組んで、俯向いていた。

主水之介が、茶碗をもどした時、志乃は、顔をあげた。

「すこしのあいだ、お邪魔をしても、よろしゅうございましょうか？」

「話したい儀があるのであれば……」

「はい」

「きこうか」

主水之介は、許した。

「貴方様は、わたくしを、魔性の女子、と仰せられました」

「申した」

「弥太郎殿は、そのため、わたくしを悪んで、立ち去られました」

「うむ」

「貴方様は、わたくしを、まこと、魔性の女子、とお考えでございましょうか？　ご本心のほどを、おきかせ頂きとう存じます」

「……」

「わたくしは、弥太郎殿を、鵜殿家にとつぐ前から、想うて居りました。これは、いつわりではございませぬ。……また、わたくしが、あの夜、弥太郎殿に告白いたしましたことも、決して、弥太郎殿をあざむこうという下心からつくった虚言ではなかったのでございます。良人主馬は、不能者でございました。良人が、わたくしを、用人に犯させたのも、真実でございます。良人から、どのようなむごたらしいさいなみかたをされたか、まだまだ、語りつくせぬくらいでございます。……貴方様は、わたくしの告白を、すべて、虚言だと否定なさ

いました。貴方様は、あの時、本当に、虚言だとお考えあそばしましたのか——それを、うかがいとう存じます」

主水之介は、その問いに対して、返辞をする代りに、

「真実であったのならば、そなたは、弥太郎に対して、どうして、虚言ではない、と必死に云いはろうとしなかったのか？　そなたは、惚れている、ということだけを、高声でくどいたばかりではなかったか」

と、責めた。

「わたくしは、貴方様が、わたくしから弥太郎殿をひきはなそうとお考えになった——そのご存念が、わかったからでございます。弥太郎殿が、この志乃のとりこになってしまうことは、身のためにならぬ、とお考えになって、わたくしの告白を、でたらめなつくり話だ、と否定なさったのだ、と——」

主水之介は、ひくく笑い声を、たてた。

それから、

「済んでしまったことだ。今更どうなるものでもあるまい。弥太郎のことは、忘れるがよかろう」

と、云った。

志乃の云うことを、みとめた、とも受けとれる態度であった。

志乃は、行燈のあかりを片面に受けた主水之介の顔を、しばらく、じっと瞶めていたが、それ以上は、何も云わずに、一礼して、座を立った。

二

主水之介は、同じ場所に坐りつづけていた。

八幡宮の神楽太鼓の音は、とだえ、庭ですだく虫の音が高くなっていた。

と——。

広縁へ向って、近づいて来る忍びやかな跫音を、主水之介は、きいた。

——望月に断りもなく不意に訪れる客は、殺気を含むのか。

主水之介は、胸のうちで、呟いた。

「篠田主水之介殿に、御意を得たく参上つかまつった。浪人修善寺左膳」

無断の訪客は、そう名のった。

「用向きをかんたんに述べて、早く退散してもらおう」

「では、申し上げます。御当家お預りの鵜殿主馬の妻女志乃殿を、当方に申し受けたく、参上つかまつった」

「誰人にたのまれた？」

「身共一存でござる」

「と申すと？」

「身共は、志乃殿に惚れ申した」

「惚れたから渡せ、というのは、いささか身勝手にすぎるのではあるまいか」

「身勝手は、承知の上でござる。……曲げてご承諾のほどを――」
「お主は、よほど、腕におぼえがある兵法者らしいな」
「いささか――」
主水之介は、ちょっと沈黙を置いてから、
「この篠田主水之介が、浪人ずれの脅しに屈したとあっては、名折れになろう」
と、云った。
「では、一騎討ちをなさるか」
「あいにくだが、この盲目だ」
「得物ご随意に――、いかなる条件でもつけられい」
「そうか」
主水之介は、ゆらりと立つと、座敷へ入った。
床の間わきの袋戸棚から、とり出したのは、一梃の短銃であった。
オランダ製の精巧なつくりで、当時としては珍しい武器であった。
それを携げて、ゆっくりと広縁へもどって来た主水之介は、
「つくばい脇に立ってもらおう。それから、声をあげて三つかぞえてくれぬか」
「承知いたした」
「条件は、もうひとつ。わしが撃ち損じたならば、お主は、奥に入って、志乃を、その場で、犯すこと」
「心得申した」

修善寺左膳は、差料を抜くと、これを直立させた。
主水之介は、短銃を、水平に挙げた。
「ひとーつ！」
左膳は、ゆっくりと、語尾を長くひいて、かぞえつつ、短銃の銃口が正確に、わが胸に狙いつけられるのを看てとるや、じりじりと、右半身になった。
「ふたーつ！」
主水之介は、左膳のかぞえる声だけをたよりに、狙いをつけている。ほそめられた双眸には、左膳の姿は闇に溶けて、映ってはいないようであった。
「三つ！」
その声に合せて、主水之介は、引金を引いた。
轟然たる銃声につづいて、鋭い金属音が、宙をつらぬいた。
左膳の直立させた刀身は、鍔もとから三寸あまりの箇処で、ぽきりと折れた。
「うむっ！」
刀身から、柄をつかむ双手につらぬいて来た衝撃に堪えた左膳は、次の瞬間、脇差を抜きざま、広縁上に、跳躍した。
「ごめん！」
左膳は、盲目の旗本大身に対して、一応の敬意をはらいつつも、殺気凄じく、じりじりと肉薄した。
「わしを、斬るか？」

「その短銃を、こちらへ渡して頂きたい。渡さぬとあれば、やむなく、斬ることに相成る」
主水之介は、短銃を、左膳に投げた。
左膳は、薄ら笑うと、
「志乃殿を、当方に、頂戴いたす」
云いおいて、奥へ進んで行った。
主水之介は、しずかに、観月の座にもどった。
——あの女が、墜ちて行くところは、どうやら、あきらかになったようだ。
冷たい呟きが、胸のうちに、もらされた。

三

志乃は、居間で、小袖を縫っていた。主水之介のふだん着であった。
この一月のあいだに、志乃は、主水之介という人物に対して、畏怖とともに、なにか、自分にできるかぎりのことをして、つくしたい意識を抱くようになっていた。
主水之介の態度は、あきらかに、こちらを寄せつけぬ冷たくかわいたものであった。
その態度を、かたく保持されれば、されるほど、志乃の方は、なんとかして、女の献身を示したいというねがいを、強くわかせた。
しかし、それは、いまだに、実行はされていなかった。志乃にできたのは、今宵はじめて、お茶をはこんだことだけであった。

——この小袖を仕立てあげても、お手を通しては下さるまい。
志乃は、そう思いつつ、縫いつづけている。
跫音が近づき、障子が、ひきあけられた。
ふりかえった志乃は、そこに、修善寺左膳の姿を見出して、悸っと身をすくませた。
「そなたを、拉致しに参った」
左膳は、云った。
「貴方につれて行かれる理由がありませぬ」
「そちらになくとも、こちらにはある」
「おことわりします」
左膳は、ふみ込んで来ると、志乃の片手を、むずとつかんだ。
「なにをなさる！」
志乃は、必死にあらがおうとした。
左膳は、矢庭に、志乃を、畳の上へおさえつけると、片膝で、その膝を割らせた。
どうあがいても、剣法で鍛えた男の暴力に、敵うべくもなく、志乃は、たちまち、衣裳の前を、ひきめくられ、太腿まであらわにされた。
死にもの狂いに、乳房をつかんだ男の腕へ嚙みついたが、ひきしまった筋肉に、わずかな歯型をつけるにとどまった。
左膳の一方の手は、容赦なく、女の秘部をさぐって来た。
志乃は、ついに、あらん限りの悲鳴をほとばしらせた。

「左膳っ！」
突如、次の間から、声がかかった。
「邪魔だて無用っ！」
左膳は、呶鳴りかえした。
しかし、襖は、ひきあけられた。
次の刹那、
「うっ！」
唸りを発して、左膳は、志乃の上から、はね退いた。
その片目には、小柄が突き刺さっていた。
「くそっ！」
左膳は、脇差をひろって、よろめき立つと、抜きはなった。
「左膳、見苦しいぞ！」
主水之介は、冷やかに、云った。
その左手には、大刀が携げられていた。
「片目に脇差、盲目に大刀、ちょうどつりあいがとれて、再試合は、恰好となったようだが、お主の方に疼痛があるだけに、分がわるかろう。……今宵は、引きあげるがよい」
「……」
左膳は、ひくく呻きつつ、攻撃の一瞬を狙った。
しかし、主水之介には、隙がなかった。

「ふん――」
左膳は、自嘲した。
「盲目に、この修善寺左膳が、おくれを取ったか」
左膳が立ち去ったあと、主水之介は、志乃の嗚咽をきき乍ら、しばらく、その場に、立っていた。
ようやく、嗚咽をおさめた志乃は、
「ひとかたならぬお世話に相成りました。今宵をもって、おいとまいたします」
と、挨拶した。
「止めはせぬが、行先があるまい」
主水之介は、云った。
「途みち、考えまする」
「それは、むりだろう。江戸の町は、女が一人、あてもなくさまようことを、許してはおかぬ」
「……」
主水之介は、そろりとそばへ寄った。
志乃の手を把ってみて、
「冷たい肌をして居る」
と、呟いた。

志乃は、俯向いて、肩を落したまま、じっとしている。
主水之介は、抱き寄せた。
志乃は、されるがままになった。
「そなたは、男にもてあそばれるような宿運を背負っているのかも知れぬ」
「……いえ――」
志乃は、わずかに、身もだえした。
主水之介は、腕の中で身もだえる女の重さ、柔かさを、あじわっていたが、しずかに仰臥させて、
「わしのものになるか？」
と、訊ねた。
「……」
志乃は、微かに喘いだ。
「わしのものになれば、幸せが来るかも知れぬ」
「はい――」
志乃は、こたえた。
主水之介は、志乃に、牀を延べるように命じた。
やがて――。
牀に添い臥した志乃は、男の愛撫の手がのばされるのを、待った。
しかし、主水之介は、なぜか、行為に出ようとしなかった。

志乃は、いぶかって、
「わたくしを、おさげすみでございますか？」
と、問うた。
「いや、そうではない」
主水之介は、仰臥したなりで、かぶりを振った。
「……どうしたのであろうな。久しく、女の肌にふれなかったせいであろうか。燃えぬのだ。……そなたの良人と同様、不能者かも知れぬ」
「……」
「そなた、わしを燃えさせてくれるか？」
「は、はい――」
主水之介は、掛具をはねると、志乃の顔を両手ではさみ、わが身の下方へ、移させた。
志乃は、主水之介の股間へ、顔をうずめた。
沈黙が来た。
志乃は、その部分で、必死に、唇と舌をうごめかした。
主水之介は、微動だにせず、微かな呻きすらも、もらさなかった。
志乃は、くりかえし、くりかえしそのつとめをつづけた。
と――急に。
主水之介が、双手をのばして、志乃の身を起させた。
「そなたは、舅に対して、このつとめを、つづけたのか？」

主水之介の声音は、冷やかであった。
志乃は、はっと、息を止めた。
「どうやら、わしが、そなたを、魔性と看たのは、まちがいなかったようだ」
主水之介は、そう云いすてて、牀から立った。
その一瞬、志乃は、枕の下にかくした懐剣を抜きはらって、主水之介の背中めがけて、突きかけた。
主水之介の方に、油断はなかった。
その手くびをつかんで、ひとねじりすると、懐剣をとりおとさせておいて、
「まことの魔性の女は、おのれが魔性であるとは、露いささかも、考えては居らぬ。……そなたは、いつの間にか、わしに、惚れていたのではないのか？　その気持は、嘘ではなかろう」
主水之介は、ひくく笑い声をたてた。
「こ、殺して！」
志乃は、口走った。
「もう、生きていとうは、ありませぬ」
「その気持も、嘘ではあるまい」
「嘘ではありませぬ。わたくしのような女は、生きているねうちがありませぬ」
「たしかにな」
「ならば、早く、殺されませ」

「さあ、どうするか――」
「蛇の生ごろしのように、生かしておかれるのは、まっぴらです。……もう、朝を迎えとうはありませぬ」
「そう云われると、生かしておきたくなった」
「……」
「実を申すと、わしの方も、いつの間にやら、そなたのことが、四六時中、脳裡にあるようになって居るのだ。……魔性の女ゆえ、無視してはおれぬようだ。このままで、ひとつ屋根の下でくらせば、あるいは、わしが、負けるかも知れぬ」
「……」
「ひとつ、試してみようか。どちらが、勝つか。男と女のたたかいを――」
主水之介は、その言葉をのこして、部屋を出ていった。

第八話　倭　寇

一

「鉄之助殿――」

嫂（あによめ）の呼び声が、母屋の縁側から、ひびいた。

井部鉄之助は、離れの六畳に、寝そべって、笑い本を読んでいた。

離れは、母屋と渡廊でつないである。渡廊といえば、体裁がいいが、床板は腐って、ところどころ穴があいていた。屋根が、数年前の地震で崩れたままになって、雨漏りがひどかったのである。

離れは、六畳一間で、隠居した父親が、中風で七年間、寝たきりで、逝（い）ったところである。鉄之助が、これをもらって以来、修理がしていないので、ここも、雨が漏る。

母屋には、十歳年長の井部家当主鉄之進がいる。子供はない。

嫂の佐和は、狐面した、おそろしく疳高（かんだか）い声を持った、ぎすぎすした女である。

鉄之助は、嫂と口をきくのも避けるほど、きらいであった。

嫂の方も、それを知っていて、決して、渡廊を渡っては来ない。

「鉄之助殿、薬餌函（やくじばこ）を、お返し下され」

嫂は、催促した。三日前から、催促している。

鉄之助は、鵜殿家の隠居所まで、志乃を尾行して行き、修善寺左膳という浪人者に行手をさえぎられ、決闘して、膝の上を斬られている。

傷は、ようやく、癒えたが、まだ、冷えると痛むので、膏薬（こうやく）を貼ることにしていた。

鉄之助は、手枕で、天井を仰ぎ乍ら、小声で、

「それ、女人の性、と云っぱ、嫉妬、妄嗔、罵詈、呪詛、貪欲、好飾、含毒、忌諱……、嗚呼！」

と、呟いた。

「鉄之助殿、きこえているのでしょう。返辞をなされ」

キンキンひびく声に、鉄之助は、やりきれなくなって、

「膝が疼（うず）いて、起き上れそうもござらぬ。お使いだていたすが、薬餌函を、取りにおいで下さい」

と、返辞した。

嫂は、なにやら、ぶつぶつ独語したようであったが、やむなく、渡廊をぎしぎし鳴らして、渡って来た。

鉄之助は、すばやく、ふんどしをはずして、特大の陽物を出しておいて、膝を立て、嫂が障子を開けたら、まる見えの姿勢を、とった。

「よいのですか」
嫂は、一応ことわって、障子を開けた。
鉄之助は、天井を仰いでいる。
佐和は、一瞬、その場に、立往生した。
「その床の間に、あります」
鉄之助は、云った。
佐和が無言でいることは、一大衝撃をくらった証拠である。
「どうぞ――」
佐和は、促されて、のろのろと、床の間へ進むと、薬餌函を把りあげた。
「ずっと、痛むようでしたら、あとで、また、持って来ましょう」
佐和は、云った。その声音は、上ずっていた。
鉄之助は、内心にやりとした。
兄の鉄之進は、水戸へおもむいて、恰度一月留守をしている。水戸の弘道館で、天文地理を講義しているのであった。鉄之進は、学識がゆたかで、才藻に富み、どうして、公儀が、登用せずに、小普請に置いたままにしているのか、周囲から、ふしぎがられていた。
「姉上――、兄者は、当分、水戸から帰りそうもありませんか？」
鉄之助は、そう云って、はじめて、視線を、佐和の顔へ移した。
眦がつりあがり、高い鼻梁がたれ下り、反歯のために唇がめくれ気味で、とうてい好きになれぬ狐面である。

それよりも、この三十女が、井部家よりも実家の方が、身分地位が上であることを、いまだに、鼻のさきにぶら下げているのが、鉄之助には、腹が立つのであった。
なにかといえば、すぐ、高家である実家のしきたりや行事のことを、口にして、わずか二百石の小普請を、いやしむべきもの、と見下すのは、甚だむなくそがわるかった。
「兄上は、妻のわたくしよりも、学問がお好きでありますゆえ――」
佐和は、こたえた。
――あたりまえだ。こんな六十年の不作に、兄貴のやつ、よく堪えて居るものだ、と感心しているのだ。
「申しわけありませんが、夕食の後ででも、薬餌函を、おとどけ下さい」
鉄之助は、云った。
佐和は、出て行った。
鉄之助は、むっくり起き上ると、

股間に一物
肚にも一物
合せて二物を、やっこらさ
狐を捕える武器にする、か

と、うたった。

二

庭から、流行歌をうたい乍ら、近づいて来る者があったのは、それから半刻ばかりのちであった。

ままよ三度笠
横ちょにかぶり
旅は道連れ、世は情

それをきいて、鉄之助は、
「おっ！　進八郎、帰って来たぞ」
と、障子をひき開けた。
総髪に、古渡り唐桟を着流し、無腰で、ふところ手の人物が、庭さきに立っていた。
鉄之助より、二、三歳年長であろう。
男が視ても、魅力のある風貌であった。殊に、切長の大きな双眸が、妖しい光を宿している。
古城進八郎は、書院番から、自ら乞うて、小普請入りして、長崎へおもむき、三年余も、その地にとどまっていたのである。

「いつもどって来たのだ、進八郎？」
「一昨日だ。……同じ顔をして、同じくらしをして、同じ不平不満を抱いて居るようだな、鉄之助」
「お主は、長崎で、なにかを学んで、開眼したとでもいうのか？」
「学んだのう。高島秋帆について、西洋火器をな。野戦砲とか、臼砲とか、榴弾砲とか。日本の砲術など、西洋のそれと比べると、児戯に類するのう」
「お主は、砲術家になるために、小普請に入って長崎におもむいたのか？」
「いや――」
古城進八郎は、にやりとして、
「実は、便船を得て、オランダかイギリスへ渡ってやろうと、企てたのだ」
と、こたえた。
「ふうん！」
鉄之助は、あきれて、進八郎を見まもった。
旗本の中で、こんな大それた野心を抱いた者は、未だ嘗てなかったといえる。
「ざんねん乍ら、イギリスが清国と喧嘩をやらかしたので、長崎出入りの西洋船に対する監視が、厳重になりすぎて、ついに、おじゃんだった。しかたがないから、イギリス語を、少少かじって、鉄砲と大砲の撃ちかたを、学んで来た、という次第。……鉄之助、もう、腰に大小をさして、往来を歩くのは、滑稽だぞ」
「どうしてだ？」

「刀にまさる武器が、西洋には、ある。これだな」
進八郎が、懐中から、ひょいと、出してみせたのは、一梃の短銃であった。
「レオルバアといってな、弾丸をつづけさまに五発撃てる。……ひとつ、試してみせるか」
進八郎は、庭に飛んで来ている雀へ、短銃を向けた。
「おい、ここは困るな」
江戸では、朱引外（郊外）を含めて十里四方、鉄砲を撃つことは、厳禁されているのであった。
「井部鉄之助ともあろう男が、やけに気が小さくなったものだな。柳橋の船宿あたりで、ごろごろしているうちに、だんだん、胆が縮んで来たか」
「そういうお主、江戸へ帰って来て、何かやる目的でもあるのか？」
「ある！」
「なんだ？」
「なんだと思う？」
「わからん」
「一番手取り早い手段に、訴えて、まず、金をつくる」
「……？」
「軍資金ができたら、公儀の軍艦をひとつ、ぶん奪って、日本を脱出だ。つまり、海賊になる。倭寇というやつだな」
「夢だな」

「夢ではない。直参小普請の青年たちが、驥足を展ばす余地が、日本のどこにある？　飼い殺しの犬ではないか。お主にしても、この離れの六畳に、ただ、寝そべって、鼻くそをほじくっているだけではないか……。倭寇の歴史を知って居るか、鉄之助？」
「よくは、知らぬが……」
「公儀が、国を鎖す前、日本人が、どれだけ、海外に雄飛したか、お主、知ったら、血がわき、肉がおどるぞ」
進八郎は、倭寇について、話しはじめた。

三

倭寇の歴史は、古い。
倭寇が、いつの時に起ったか、分明ではないが、すでに南北朝時代に、小舟を駆って、海を渡っている。
南朝の正平五年（西暦一三五〇年）――この年、楠正行が討死しているが――わが日本海賊は、百三十余艘の船首をつらねて、朝鮮を侵している。
この頃より、日本海賊（朝鮮や清国からいわせれば、倭寇）は、毎年朝鮮を劫掠し、その南岸から北上して行き、一転して遼東半島に及び、支那の山東省から江蘇、浙江にも、侵入した。
日本海賊は、源平時代に、すでに興っている。

備後の桃島、伊予の大島、因の島、久留島、野島などに拠って、遠く海洋を渡って、金銀、財宝を掠奪して来ていた。

その利得が、各地につたわって、主家を喪った西国のさむらいたちが、われもわれもと、海へ出たのである。

朝鮮、支那から、安南、ジャワまでも、小舟を駆った。

明の太祖の洪武年間に著された「籌海図編」によれば——。

倭賊は、海嶋の中に出没し、しばしば蘇州、崇明を侵し、居住民を殺戮し、貨財を掠奪し、呉淞江沿岸一帯をあらし、また、広東、恵州、潮州、浙江、温州、永嘉、玉環の諸処を剽掠した、という。

洪武といえば、日本の南北朝の末、明朝が創業された頃で、その国力昌隆の時である。

日本海賊は、この興隆の明国に対して、一大打撃を加えたのである。

その後、足利義満が、明国との交易を為さんがために、倭寇二十人を捕えて、明朝に送り、寧波港で、この者たちを蒸し殺しの刑に処したが、これぐらいの威圧で、日本海賊が、鳴りをひそめるものではなかった。

明国嘉靖年間には、倭寇は、浙江の東西、揚子江の南江浜海数千里にわたって、侵した。

明国の記録によれば、最大なる船は三百人を容れ、小なるものでも七、八十人を容れ、一挙して襲うて来る時は、連艦百艘以上が一団となっていた。すなわち、二万人以上の軍勢となっていたのである。

凄じい戦闘力であった。

『倭賊の入寇するや、風にしたがって至る。東北の風、猛なれば、あるいは薩摩に拠り、あるいは五島に拠り、琉球に至りて、風の変るを見て、北風多ければ、すなわち広東を犯し、東風多ければ福建を犯す。福建を犯すには、澎湖島より泉州に入る。もし正東の風、猛なれば、五島より天堂官を経、風の変るを見、東北風多ければ、烏沙門より温州を犯し、あるいは丹山島の南より大猫港を経て、定海を犯し、正東の風多ければ、李西渓に至りて、紹興を犯して銭塘に迫り、あるいは洋山の北より進んで大倉を犯す。倭船の来るは、清明節の前後なり』

清国の学者はそう記している。

明国嘉靖は、わが国の大永享禄にあたる。北条氏綱が、江戸城を占有し、武田信玄と上杉謙信が、川中島で争った頃である。

国を鎖さなかった以前の日本は、山なす波濤を乗り越えて、隣邦にむかって、その武力を、思う存分に、ふるったのである。

上海という港が築かれたのも、倭寇の侵略に備えるためであった。

それまでは、上海は、全くの沮洳の地で、小さな漁師がところどころに散らばっている寒村にすぎなかった。

倭寇が、黄浦江附近から上陸して来るので、これを防ぐための城廓として、上海がえらばれて、嘉靖三十三年に、築かれたのであった。

倭寇を防ぐための、砦や城廓は、支那沿岸数千里にわたって、数十も築かれた。そして、それらが、後年さかんな町となった。

日本には、銭貨が乏しかった。

足利将軍さえも、貨幣を、明朝に求めたほどである。

貿易による貨幣獲得は、ほんの微々たるものであり、その大半は、海賊によって日本へもたらされた。

倭寇には、明朝を追放された武人も加わっていた。汪直、徐海、陳東、鹿葉ら、明朝に於て志を得ない者たちが、倭寇に加わり、いつの間にか謀主の地位に就いていた。

倭寇侵犯の最も大組織のものは、嘉靖三十三年――天文二十三年のそれであった。明人汪直が参謀として加わり、総勢三万余、同年三月江蘇、浙江から揚子江一円を襲撃した。

まず昌国衛を破り、大倉、上海を侵し、江陰を掠め、乍浦を攻め、八月に入ると、金山衛を奪い、崇明から常熟を踏みにじり、翌年正月には、大倉から下って松江を攻め、四月には嘉善城を陥れ、嘉興を取り、ひるがえって、拓林に駐屯した。

さらに、夏に入るや、長駆して蕪湖まで達し、南京江寧を攻め、秣陵関を破り、漂水、漂陽を侵した。

八幡大菩薩の旗じるしをかかげ、紅衣に大刀二本を背負い、槍をかざして突進する日本海賊の前に、明国民は、ことごとく慴伏した、という。

四

倭寇の猛威は、豊臣秀吉の時代になって、ようやくおさまった。

おさまったといっても、なお、多くの海賊が、朝鮮を、明国を襲いつづけた。

八幡大菩薩の旗をひるがえした八幡船が、朝鮮、明国の海岸に、出没しない日はない、といってよかった。

明人茅元義の「武備志」は、倭寇の陣法を、次のように記している。

『その兵を用いるや、よく埋伏し、数を分って、わが軍の後に出て、両面を撃ち、つねに、寡を以て衆に勝ち、塁をおびやかし、華人しばしばその術中に落つ。そのいまだ戦わざるや、分散して三三五五、一人扇子をふるうや、伏兵四方に起る。これを蝴蝶軍という。しかれども、歩戦に長じ、水戦は劣る。刀法、銃術に精にして、弓と槍は疎なり。倭兵は、身に甲をまとわず、冬夏ともに一枚の花彩衫あるのみ。下に短袴をつく。軽捷、飛ぶが如し。頭領には、鎖子甲をつける者あり』

倭寇が、その頭領の指令によって、手足のごとく、整然と行動することも、明人には、驚異のひとつであった。また、倭寇は、決して、奪掠した財物を、かくすことなく、頭領にさし出して、公平に分配することも、明人を、感服させている。

明国の人民にとって、やりきれなかったのは、倭寇が襲来すると、その土地の若い女子が、すべて、犯されることであった。

倭寇にとって、最大の弱点は、海戦に於ける場合の、船の構造の狭小さで、明船に及ばなかったことである。

その弱点をおぎなったのは、風力を利用する巧みな航行法と、凄じい闘志と、そして戦闘術であった。

いずれにしても、日本海賊は、徳川幕府の鎖国政策によって、衰微し、そして終焉した。

「しかしだな――」

古城進八郎は云った。

「祖国をとざされて、帰国が叶わなくなった日本人は、爾来、フィリピンで、カンボジヤで、シャムで、大いに活躍した。フィリピンのマニラには、日本人町をつくったし、シャムでは、山田長政が王となった。……鉄之助、無念ではないか。公儀が、国をとざさなければ、日本人は、ぞくぞくと海のむこうへ渡って、南方の各地に、王国をつくりあげたかも知れぬのだ。国をとざされたおかげで、山田長政はじめ、異邦に雄飛した同胞のあとを継ぐ者が出なかったのだ、こんな無念があるか」

「……」

鉄之助は、進八郎がしゃべりまくるにまかせて、黙然と、耳をかたむけていた。

進八郎に、そう云われれば、その通りだ、という気がした。

実際――。

旗本小普請組は、全く何もすることもなく、一年中無為にすごしているのだ。

もし、船を与えられて、海洋をのし渡れ、と命じられたならば、目ざめたごとく、決起して、そのむかしの倭寇の血汐をわきたたせるに相違ない。

山田仁左衛門長政とその一党は、あとにつづく者がないために、一時はシャムを占領し乍らも、長政自身は毒殺され、その子オインと一党は討死して、ついに日本人は一人のこらず、シャムの地から消えうせてしまった。

しかし、その強さは、いまだに、語り草になっているに相違ないのだ。

そこへ――。

旗本の若い屈強の武士が、万の隊を組んで、押し寄せて行ったならば、必ず、シャム国は、慴伏するに相違ないのではあるまいか。

鉄之助は、進八郎の言葉をきいているうちに、こうしてじっと坐ってはいられない気分になって来た。

「鉄之助、やろうではないか。山田長政の偉業を、われわれの手で、再現してみせるのだ。どうだ？」

「う、うむ！」

鉄之助は、うなずいた。

「やるな？」

「やる！」

「よし、きまった。善は、いそげだ。今夜のうちにも、軍資金をつくる」

進八郎は、うそぶいた。

第九話　夜盗崩れ

一

井部家の夕餉は——というより、離れの鉄之助の許へ、箱膳がはこばれるのは、いつも五つ（午後八時）すぎであった。

鉄之助は、いわゆる冷飯を食わされていたのである。

ところが、その宵に限って、暮六つ（午後六時）には、下婢が、きちんと、はこんで来た。

「ははは、面白い。狐めは、罠にかかって参ったか」

鉄之助は、いつもより二品も多い食膳を眺めて、笑った。

「なんでございます？」

耳の遠い下婢が、けげんな面持で、問うた。

「お前は、狐が、どんな声で啼くか、知っているか？」

「え？　狐が、どうかしましたか？」

「狐が、どんな声で啼くか、知っているか、ときいて居るのだ」

「啼き声、でございますか。……コン、コンじゃございませんか」

「はっはっ……コン、コンか。はたして、そう啼くかどうか、もうすぐ、ためすことができるぞ」

半刻あまり過ぎた頃あい、渡廊を通って来る衣ずれの音が、きこえた。

——来たぞ、狐め。

鉄之助は、にやりとした。

わざと、行燈をつけずに、部屋には、夕闇をただよわせておいてある。

「鉄之助殿——」

嫂が、障子の外で、呼びかけて来た。

「はあ、なんでござろうか」

「薬餌函を、持参いたしました」

「忝じけない。お入り下さい」

佐和は、障子を開けた。

灯がないにも拘らず、佐和は、黙って、入って来ると、薬餌函を床の間に置いた。

夜具に仰臥した鉄之助は、佐和の出様を、じっと、待ちかまえた。

佐和は、いったん、障子ぎわまで出て来てから、そこで、立ちどまった。

ほんのしばし、動かずにいてから、急に、はじかれたように、鉄之助のそばへ来た。

「鉄之助殿！」

喘ぐように、ふるえ声で、呼びかけると、ぺたりと坐り込んだ。

「どうなされた、姉上？」
「わ、わたくしは……」
いいかけて、いきなり、がばと、鉄之助の厚い胸へ、身を伏せかけた。
「わたくしは、さびしいのです。……鉄之助殿、察して下され。……兄上は、もう、三年も、わたくしを、褥へ、お呼びになりませぬ。……本当なのです。兄上は、妻のわたくしに対しては、氷のように、冷たい御仁なのです。……察して下され、わたくしも、からだに、熱い血汐の流れている女子です。……閨のさびしさには、堪えられませぬ！」
かきくどくと、唇を口へ重ねて来た。
――女に口説かれたのは、はじめてだが、たとえ、あいてが、嫂の狐でも、わるくはない。
そう思いつつ、双手は依然として、後頭で組んだふりでいた。
佐和は、鉄之助の口腔内へ、舌をめり込ませて来つつ、胸を、胴を、腰を、なやましげに、うねらせた。
一瞬――。
鉄之助は、佐和を抱き締めると、くるりと寝返って、彼女を下にした。
「ああっ……もう――ど、どうなってもいい！」
佐和は、狂おしく、身もだえした。
「姉上――」
「は、はい」
「ひとつ、啼いてみせられぬか？」

「え？」
「狐なら、なんと、啼くか――コンコンと、啼いてみせられては、如何？」
「鉄之助殿！」
屈辱で、佐和は、鋭く、悲鳴に似た声をあげた。
「はっはっは……」
鉄之助は、哄笑を爆発させて、起き上った。
佐和が起き上るのを待って、鉄之助は、笑い声をピタリとおさめて、
「姉上の実家は、武家の礼儀作法をつかさどる高家でござるが、父上は、貴女に、良人が三年も褥に呼んでくれなければ、良人の家弟に、身を許してもよい、と教えられたかな！」
と、あざけった。
「畜生っ！」
旗本の妻にあるまじき叫びを発して、佐和は、起き上ろうとしたが、鉄之助の双手に押さえつけられて動けなかった。
辛うじて、片手だけを自由にすると、鉄之助の頬げたへ、平手打ちを、くれた。
「女子に叩かれることは、これほど、心地よきものか」
「は、はなせ、畜生っ！」
「侮蔑されたならば、畜生という罵詈を吐いてもよい、と高家の作法帳に書いてあるのでござるか」
佐和は、鉄之助の手くびに噛みついた。

鉄之助は、平然として、嚙みつかせたままで、片手をうしろへまわし、乱れた裳裾の隙間から、五指をすべらせると、深い茂みをさぐった。
そして、それをひと摑みにするや、恥毛ぜんぶをひき抜く勢いで、ひっぱった。
ひいっ、と悲鳴をあげた佐和は、ぐったりとなった。

二

同じ時刻——。
上野寛永寺の末寺のひとつに、若い小普請の面々が、五、六人集っていた。
三年ぶりに長崎から帰府した古城進八郎が、使いを遣って、集合させたのである。
「急に、夜気が冷えて来たのう——」
一人が、胴ぶるいして、入って来た。
「ふところも寒いし、か。雲静かにして妖星落ち、秋高くして馬は肥え、冷気、肌に透って、旗本小普請の痩肩いたずらにとがりけり、か」
「金がないと、だんだん誹諧の境地に入るのう。秋の野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花もひととき、などとな」
「おれは、ちがうぞ。こう借金の山で、首がまわらなくなると、——ええい、くそ、札差の蔵へでも押し込んで、どうせ盗るなら、千両箱」
「やるか」

「やろう」
そこへ——。
総髪、古渡り唐桟の着流し、無腰で、ふところ手の古城進八郎が、すっと姿をみせた。
「久闊。天下もかわらず、人も相変らず、か」
座に就くと、
「早速だが、諸兄に集ってもらったのは、男子が驥足を展ばすための相談をするためだ」
と、云った。
進八郎の弁舌の妙は、仲間たちの知るところであったが、三年ぶりに飄然として帰って来たこの男の風貌は、さらに魅力のあるものになっているとともに、流れるような弁舌もまた、いちだんと冴えていた。
半刻ちかくも、しゃべりまくった進八郎は、どの顔も、のこらず、自分が企てるところに、惹き込まれているのを、みとめた。
「天保倭寇党、か。面白い！」
一人が、云うと、他の面々も、目ざめたように、口をひらいて、進八郎の計画に賛成した。
「では、決ったな」
進八郎が、見まわすと、いずれもうなずいた。
「もうすぐ、井部鉄之助もやって来る」
「狩野は、さそわなかったのか？」
「弥太郎は、一昨日から、行方知れずだ。あいつは、時折、行方知れずになる。秩父山中に

こもって、一人で木太刀をふりまわしたりするらしい」
「井部を加えて七人か。ちょうど、よかろう」
進八郎の軍資金づくりは、大きな町家へ押し込むことであった。
その家は、もう進八郎がえらんでいた。
やがて、鉄之助が、姿をみせた。
「お主、負傷した、ときいていたが、もうよいのか？」
一人に、訊ねられて、鉄之助は、にやりとすると、
「女を抱いて来たし、腕もむずむずして居る」
と、こたえた。
旗本小普請組が、押込み強盗をやる、というのは、前代未聞のことであった。
なかばは金に飢えたあまり、なかばは自棄気味で、進八郎の口車に乗せられたあんばいであった。
旗本たちは、その末寺を、ばらばらに、忍び出て行った。

三

その夜更けて、天保倭寇党七人に押し込まれたのは、一石橋から常磐橋御門へ至る途中の本両替町の酒問屋「なだ屋」であった。
江戸の酒は、その大半が、下り酒といって、灘、伏見、尾張、美濃、三河方面からはこばれていた。年間九十万樽（一樽は三斗六升入り）といわれ、三十八軒の酒問屋が、この利益を分けあっていた。
下り酒問屋は、いずれも、産地の蔵元の出店問屋で、冥加金千五百両を納め、株仲間が成立しているので、三十八軒が定数であった。
こんなボロもうけはなかった。
「なだ屋」は、その店名の通り、灘の蔵元の出店であった。
押し入った七人の行動は、すばやかった。進八郎の指揮ぶりの鮮やかさであった。
あっという間に、店中の雇人が、大番頭夫婦をはじめ、のこらず、勝手元に降りる広い板の間に、集められてしまった。
進八郎は、雇人たちを、縛ることはしなかった。
店支配の嘉助という初老の大番頭とその女房を、中心にして、二十余人を円形に坐らせ、二人に監視させておいて、五人が、金を置いてある場所を見当つけて、さがした。
嘉助を責めて、金の置き場所を白状させる、という脅迫がましいこともしなかった。
進八郎は、嘉助に対して、
「当節、一部の町人の家に、金がたまりすぎている。すまぬが、多少、外へ流通させてもらおう」
と、云ったものであった。
嘉助は、当然、この強盗団を、食いつめ浪人と受けとった。
いずれも、よれよれの着物を着流し、覆面をして、差料（さしりょう）を一本だけ帯びていたのである。

嘉助は、寝衣の上へ、羽織をかけて、腕組みして、俯向いていた。
灘の荷主のあるじに、このことを、どう報せればいいのか——そのことを、考えていた。
自分の金ではないので、強奪されるのは、べつに惜しくはなかった。店が、どれほど、ぼろいもうけをしているか、を思うと、これぐらいの罰を受けてもいいような気もした。
廊下で、
「かきあつめて、ざっと二百両だ」
という声がした。
進八郎が、奥から出て来て、
「嘉助、もうないのか？」
と、問うた。
「ございません」
嘉助は、かぶりを振った。
「この夏、御用金として、五百両、ご公儀にさし上げて居りますので——」
「年に四回、千両箱をひとつずつ、灘へ送っている、ときいたぞ」
「滅相もない。下り酒で、そんなにもうけるものではございません」
こたえつつ、嘉助は、心中では、
——去年は、千両箱を五つ、今年に入って、もう三つも送っている。
と呟いていた。
「嘉助、自分の金ではあるまいし、かくすな。お前の給金がいくらか、知って居るぞ。その

年まで、わき目も振らずに、蔵元のために、けんめいに働いて、お前ら夫婦が、いくら残して居るのだ。二百両もたくわえては居るまい。蔵元だけをふとらせて、ばからしいとは思わぬか」
「……」
——その通りだ、と嘉助は、思った。
「いいか、嘉助、お前は、主人のふところをふくらませるために、一心不乱に働きつづけて来たであろうが、ここらあたりで、目をひらいて、世間のしくみをよく眺めるがいい。駿河町の三井八郎右衛門は、江戸・大坂・京に大店を持って、番頭・手代を千人以上も使い、一日に二千両のあきないをして居る。大坂の升屋は、諸藩へ四千両も貸しつけ、利息だけでも、一年に二十七万両ももうけている。米にして二十五万石。六十万石の大大名の一年分の年貢だ。……同じ人間に生れ乍ら、京橋附近、南伝馬町、南鞘町、南塗師町、松川町あたりの裏長屋の日稼ぎ細民と、比べてみるがよい。一畳に三人の貧窮ぶりだ。一畳十文の店賃さえ支払えぬ者が、六割以上だ。これが、江戸だけでも、五十万人いるのだ。本居宣長が、『玉くしげ』に書いて居るぞ。貧人は富人の為に貧を増し、富人は貧人によりて富を重ねる、とな。……お前は、その手だすけをして居るのだ」
——うまいことを、云う。
嘉助は、俯向いてき乍ら、ひそかに感服した。
「よいか、嘉助。今夜の被害は、天罰と思え。蔵元へは、強盗が、そう云った、と書いてやれ。わかったか」

「はい――」

嘉助は、思わず、頭を下げてしまった。

四

やはり。

押込み強盗を働いたあとの酒は、まずかった。

井部鉄之助は、夜明けに、一人深川へ身を移して、櫓下の茶屋へあがっていた。

伏玉という淫売を呼んで、酒を飲みはじめたのだが、酔いそうもなかった。

まだ十七、八の伏玉は、ねむそうな目つきで、鉄之助を見まもっている。

「お前は、生国は、どこだ？」

「羽前でございます。酒田という湊で……」

「ふむ。羽前から、買われて来たのか。顔だちは、わるくないが、百姓か？」

「いえ、むかしは、家は、大きな廻船問屋でございました。祖父の代までは、三十六人衆の一軒で、二百人もの手代を使っていたとか……」

「売家と唐様で書く三代目、か。可哀そうに――」

鉄之助は、ますます酒がまずくなった。

伏玉は、もじもじして、

「旦那様は、おやすみにならないのでございますか？」

と、訊ねた。

「お前のような小娘を抱いたところで、べつに、愉しくはないぞ」

「いえ……、わたしは、寝て下さらないと、枕代が頂戴できません」

「金が欲しいのか？」

「国元へ、送って居ります。弟と妹が、六人も居りますのです」

「よし、寝たことにして、枕代をくれてやろう」

「それでは、わたしの気がすみません。抱いて下さいませ」

「いじらしいことを申すではないか」

鉄之助は、小判を一枚、伏玉の膝へ投げた。

伏玉は、目を見はった。

「これを胸に抱いて、さきにやすんで居れ」

「そんな、……こんな大金を――」

「お前は、いくらで、買われて来たのだ？」

「三年年期で、十二両でございます」

「安いのう」

「父親の手に渡ったのは、八両でございました」

「成程、これでは、世の中のしくみが、わるすぎる」

鉄之助は、懐中をさぐると、さらに、小判を十数枚とり出した。

「お前を、身請けしてやる」

「ほ、ほんとでございますか？」
「本当だとも――」
午近くになって、鉄之助は、すえというその伏玉をつれて、わが家へ帰って来た。用人が、不安顔で、
「奥様が、しばらく、実家へもどる、と申されて、出てお行きになりましたが……」
と、告げた。
「去んだか。めでたい！」
「は――？」
「あんな悪妻は、兄者は離縁したがよいのだ。……そのかわり、今日からは、わしが、女房をもらって、この家の留守居をさせるぞ」
「この娘御を――？」
用人は、けげんな視線を、すえにあてた。
「どうだ、ういういしくて、やさしそうで、いじらしげで、わしの女房には、ふさわしかろう」
「左様で……」
鉄之助は、すえを離れへ、ともなった。
「旦那様、ほんとに、ここに、すまわせて下さいますか！」
「おそろしそうな顔つきをするな。ここはわしの城だ」
「有難うございます」

すえは、両手を畳につかえると、
「よろしく、お願い申します」
と、平伏した。
「ここへ来い」
鉄之助は、すえを膝の上へのせて、かかえると、
「但し、面倒くさくなったら、こんどは、わしが、吉原へ売りとばすぞ。それでも、よいか？」
「はい――」
すえは、こくりとうなずいた。
「どうせ、けがれた身でございます。いつまでも、おそばに置いて頂けるとは思って居りません」
「からだはけがれて居ても、お前の心は、まだよごれては居らんぞ。……今日はじめて、男に、心を与える、と思え」
「はい」
「ははは……、どうせ、この冷飯食いが、まともに、女房をもらうことはできぬのだ……。わしの女房には、お前のような娘が、ふさわしいのだ」
鉄之助は、すえに牀をとらせると、抱いて、倒れ込んだ。
そのまま、すえは、鉄之助の高いびきをきき乍ら、夕刻まで、じっとしていなければならなかった。

第十話　酔いの果て

一

「八幡船再興？」

伊奈次郎右衛門は、眉宇をひそめた。

三年ぶりに、飄然として長崎から帰って来た古城進八郎から招かれて、訪ねて来ると、いきなり、

「小普請組の有志相集いて、八幡船再興、という計画があるが、お主、乗らぬか？」

そうきり出されたのである。

「どういう意味だな、それは？」

伊奈次郎右衛門は、説明をもとめた。

「公儀の用船を、頂戴して、八幡船にする、ということだ」

進八郎は、平然として、云った。

――正気か、この男は？

次郎右衛門は、まじまじと、進八郎を瞶めかえした。

次郎右衛門は、船手頭であった。船手頭というのは、幕府の用船を管理し、海上の運輸を司る。五組があって、一組一人の船手頭に、同心三十人が配属されている。

元禄以来の泰平つづきで、船手頭など、退屈な閑職であった。

将軍家の出陣用の軍船は、品川湾につながれてあったが、これに、将軍家が乗って、海へ出た、という例は、絶えてないのである。また、大小の用船もここ数十年使われたためしがなかった。

「八幡船というのは、つまり、海賊船のことではないか」

「手っとり早く云えば、そうだな。……鯨汐噴く、旭日は躍る、浪に二丈の櫓が撓る、というやつだ」

「進八郎、よもや、お主、武家諸法度を忘れたわけではあるまい」

「忘れては居らん。おれも、まだ、旗本だからな。……ただ、二百年の間に、かびが生えてしまった公儀の掟を、どうやら破ってもいい時節が当来したのだな」

「莫迦な！　武家諸法度は、厳として守られて居る。去年、アメリカ船モリソン号が、浦賀へ来航した際、浦賀奉行は、これを砲撃して、しりぞけて居るではないか」

「一度や二度、砲撃して、しりぞけても、外国船は、つぎつぎとやって来る。船手頭ならば、浦賀へ駆けつけて、アメリカ船を見たろう。お主、その巨大さに、唖然、茫然としなかったか……。国を鎖し、大船製造を禁じ、金銀銅の輸入をせず、日本の国の中だけでつくった米で食いしのごうとするから、米価は高騰し、百姓一揆が起る。大坂の米穀がはねあがり、庶

民が何万人も餓死すれば、大塩平八郎が乱を起すのも、当然だろう。第二第三の大塩平八郎が、現われるのは、目に見えて居る。……もはや、天下は泰平ではない」

「だから、ご老中水野越前守様は、庶政の改革に着手なされた」

「改革か――。改革すなわち、節約だろう。これまで、いくたびもくりかえされた常套手段に過ぎぬ。羽二重を禁じて、木綿を着せてみたり、金銀細工の煙管の製造を止めさせたり、隠売笑婦を捕えてみたりしたところで、時候不順で米が不作になったのを、とりかえすことはできまい。……閣老は、なぜ、大きく目をひらいて、海の彼方の国を眺めないのだ。米が足りなければ、外国から買えばいいではないか。外国にはない日本の特産の品を見返りにすればいいのだ。……といったところで、礼儀三千威儀三百、てめえでてめえをしばりあげてしまったこの現状が、すぐに打破されるものでもあるまい。開国するまでには、まだ、数十年かかるだろう。……しかし、おれたちは、それまで、待っては居れぬ。……次郎右衛門、われわれ先祖が、八幡船を駆って、南洋に雄飛した史実を、ひとつ、教えようか」

「……」

進八郎は、次郎右衛門が、露骨に不快な表情をつくったのにかまわず、語り出した。

天正二年、支那海賊の巨頭李馬鴻は、日本海賊庄吾なる猛者を副将として、大小の船艦六十二隻、戦士二千人、水夫二千人で、呂宋から、スペイン人を掃蕩すべく、カガヤンに押し渡り、海路マニラ湾口のコレヒドールに至った。庄吾は、手勢六百を率いて、敵前上陸を敢行して、敵の要塞を奇襲して、その長官を斃した。庄吾は、さらに、李馬鴻に海上から援護させて、マニラに進撃し、自ら先頭に立って、城中に突入した。不運にして、庄吾が、敵弾に斃れたため、全軍は敗退の余儀なきに至ったが、その勇猛ぶりは、呂宋に於て、後世までの語り草になった。

天正十年には、堺の武商・呂宋助左衛門が、二十六隻の軍船を率いて、カガヤン河口を、占拠している。

すでに、この頃、呂宋には、各処に、日本人町が、つくられていたのであった。

サンミルゲというところには、三十余人の日本町が、つくられていた、という。

二

「安南にも、武勇侠気に富んだ日本人が、首都ウドンの東南ビニヤールというところに、町をつくっていた、という。慶長十四年に、カンボジヤに、王位継承の乱が、起るや、長崎から渡って来たオランダ人との混血児五平なる者が、同志を糾合し、ポルトガル人と提携して、大いに活躍した史実がある。カンボジヤを流れる大河メコンは、日本河と称されていた、というし、プノンペンでは、日本の武士が、オランダ人を刺して、統領となっていた。……シャムに於ける、山田長政の事蹟は、お主も、知って居ろう。……さらに、ジャカルタに於ても、元和五年に、イギリス艦隊が、攻め寄せるや、在留した日本の武辺らが、オランダ人をたすけて、城塞を守備して、イギリス兵を一人も、侵入させなかった記録がのこって居るのだ。……おれは、長崎で、当時、ジャカルタの城塞の大将であったオランダ人マテリエフの手記を、読んだが、こう書いてあったな。日本人は、みな勇壮なる男子にして、海賊の名に

背かず、戦って、敗れる時は、敵の手中に落ちて、残忍なる責めを受けんよりは、自ら、その腹を切って、相果てる云々……と。……どうだ、おれたちは、先祖に、こうした勇猛無比の武名を、西欧諸邦にとどろかした人々を持って居るのだ」

「……」

「先祖がやったことを、おれたちが、やってのけられぬ筈はない。公儀御用船を、八幡船にして、万里の波濤を押し渡って行けば、いまもなお、日本海賊の武勇を語り草にしている南洋の土地が、おれたちを待って居るのだ」

進八郎は、一気に述べたてた。

しかし、次郎右衛門は、手を振って、

「も、もう、よい。……わしは、そのような、そそのかしに乗るほど軽慮ではない」

と、云った。

その時、書院の瓦燈窓から、ひょいと、ひとつの顔が、のぞいて、

「進八郎、次郎右衛門を、いくらくどいても、徒労だぞ」

と、云った。

隣家の大和田甚内であった。

進八郎とは、遠縁にあたり、小十人組であった。

親の代から、竹藪と菜園がつづいていて、自由に、往き来できるのであった。両家とも四百石の旗本であるから、五百坪の屋敷を所有して居り、その広い地面を利用して、菜園を共有し、双方の奉公人につくらせていたのである。

「また、真昼から、酔って居る」

進八郎は、苦笑した。

大和田甚内は、酒豪で、酒ぐせがわるかった。酔うと必ず、人にからむのであった。

次郎右衛門は、いよいよ、苦虫を噛みつぶした顔つきになった。

次郎右衛門は、酒を一滴もたしなまぬので、酔漢を、極端に毛ぎらいしていた。

甚内は、広縁にまわって、書院へ上って来ると、

三人とも、幼馴染の間柄であったが、次郎右衛門と甚内の仲は疎遠になっていた。

「進八郎、仔細は、のこらず、窓の外で拝聴いたした。八幡船を駆って、呂宋を占領するというのだな。面白い。御用船を一隻のこらず、頂戴して舳艫相ふくんで、えいえい、おうっ、と乗り出そうではないか」

と、云った。

「甚内！　かるがるしゅう、そのようなことを、口にするではない。お主は、いやしくも上様のおん身をお守りする小十人組だぞ」

次郎右衛門が、たしなめた。

「小十人組がどうした、というのだ。四百石の切米で、食えるか食えぬか——阿呆らしい、裃の新調さえできかねるくらしぶりで、なにが、御番衆だ。殿中の小十人詰所で、互いにしゃべることは、明日といわず、今日を、どうやってしのごうか、という愚痴ばかりだ。手当五十両で、どうやって、旗本の体面が保てるのだ。山谷の八百善は、香物と煎茶一椀の茶漬けに、一両二分の代金を請求する世の中だぞ。……進八郎、こんな腰抜けは、すてておい

て、ひとつ、御用船を、無断で、頂戴しようではないか」
「甚内！　腰抜け呼ばわりは、許せぬぞ！」
次郎右衛門が、ついに、呶声を発した。
「許せぬなら、どうするというのだ。……さあ、どうする？」
甚内は、ぬっと、次郎右衛門へ、跼みかかって、顔を突き出すと、ふうっと、熟柿臭い息を吐きかけた。
「臭いっ！」
次郎右衛門は、甚内の胸を突いた。
甚内は、のけぞりつつ、片脚で、次郎右衛門の顔を蹴った。
「無礼者っ！」
次郎右衛門は、かっと逆上すると、脇差を抜いた。
「次郎右衛門、止せ！　対手は、酔って居るのだ」
進八郎は、あわてて、制止しようとしたが、それより一瞬早く、甚内が、
「腰抜けめ、斬れるものなら、斬ってみろ！」
と、とびかかった。
「くそ！」
「殺せるか！」
「なにおっ！」
甚内は、酔いをかりた無謀さで、次郎右衛門の頭髪をひっつかみ、片膝で、脇差を抜き持

った手を、はねざま、遮二無二、押し倒した。
次郎右衛門は、非力であり、あまり武芸の心得はなかった。
押し倒され、咽喉を締められると、眼球を剝き出し、口をひらいて喘いだ。
「どうだ！　殺せるか！　殺せるか！」
甚内は、喚いた。
「甚内、止さぬか！」
進八郎は、甚内の肩へ手をかけて、引こうとした。
とたん——。
次郎右衛門の口から、異様な呻きが、発した。
咽喉を締められた苦しさに、胴体をねじった刹那、おのれの摑んだ脇差で、おのが腹を刺したのである。
進八郎は、はっとなって、甚内を突きころがしておいて、
「次郎右衛門！」
と、呼んだ。
次郎右衛門は、目を口を歪めて、起き上ろうとしたが、もうその力はなく、双脚を、びくんびくんと痙攣させた。
みるみる、顔面が、土色に変じた。

三

「次郎右衛門、しっかりせい！」
進八郎から耳もとで、呼ばれたが、次郎右衛門は、ちょっと目蓋をひらいただけで、すぐに閉じてしまった。
進八郎は、大急ぎで、手当をしたが、
――これは、たすからん！
と、さとった。
甚内は、壁ぎわに寄って、胡座をかき、痴呆ていになっていた。
進八郎は、手当を終えると、甚内を視た。
「もう、酔いは、さめたか」
「さ、さめた」
甚内は、立って、ふらふらと、次郎右衛門のそばへ寄って来て、
「す、すまぬ！」
と、頭を下げた。
「すまぬでは、すまぬな」
進八郎が、冷やかに云った。
「……？」

「判らぬか。この顔は、もう死相を呈している」
「そ、そんな……、死んでは、こ、こまる！　すぐ、医者を――」
「呼ぶのは、無駄だ」
「し、しかし……」
「いまさら、うろたえても、はじまらぬぞ。……医者を呼べば、その口から、もれるおそれがある。このことは、世間に知れぬように、しなければならぬ。……お主、まだ、切腹したくはなかろう」
「う、う……」
甚内は、ひくく唸って、がっくりとうなだれた。
進八郎は、片手を、次郎右衛門の胸に入れてみた。
呼吸が止っていた。
甚内は、絶望の眼眸をあげて、
「駄目か？」
「うむ」
うなずいた進八郎は、
「すぐ、家へ帰れ」
と、促した。
「ど、どうして――？」
「お主は、知らなかったことにするのだ」

「い、いや、そんなことは……」
甚内は、酔いのさめはてた蒼白な顔を振った。
「この罪は、負わねばならぬ」
「お主には、妻子がある」
進八郎は、云った。
「し、しかし――」
「おれは、独身だ。養わねばならぬ親もなければ、女房も子供もない。次郎右衛門は、おれと争って、あやまって、脇差で、相果てたことにしよう」
「……」
「どうせ、江戸で老い朽ちる料簡を持たぬ男なのだ。軍資金をつくったら、日本を脱出して、海賊になってくれよう、と企てているのだ。……軍資金をつくるために、押込み強盗もやって居る」
「え？　そ、それは、まことか？」
「十日前、本両替町の酒問屋なだ屋に、不逞浪人の一団が、押し入った、という事件を、お主も、耳にしたろう？」
「うむ――」
「あれは、おれの仕業だ。まだ、これからも、手荒な方法で、軍資金づくりをやる。……さいわい、親から、頭脳の廻転が早いように、つくってもらってある。身をかくすすべも心得て居る。心配せずともよい」

進八郎が、そう云った時、庭から、女の声が、かけられた。
甚内の妻弓香であった。
進八郎は、すっと立って、広縁に出ると、障子を閉めた。
弓香は、菜園のはしに立っていた。
「あの……、ただいま、烈しい叫びが、きこえましたけど――、良人が、また酔うて、こちらへ参上いたしましたので、なにか、ご迷惑をおかけいたしましたのでは……？」
不安な面持で、云った。
「いや、甚内は、ここへは参らぬ。どこか、他処へ往ったのではないか」
そうこたえつつ、進八郎は、
――この女性のために、おれは、身代りになってやる気持を起したのかも、知れぬ。
と、自分に呟いていた。
進八郎は、弓香とは、彼女が隣家へ嫁いで来てから、知りあった。
三日に一度は、顔を合せる親しい交際をつづけているうちに、進八郎は、弓香を愛するようになっていたのである。
すでに、人妻になった女性を愛しても、致しかたのないことであったが、進八郎は、どうしても、弓香の姿が脳裡から、はなれなくなってしまったのである。
書院番から、自ら乞うて、小普請入りして、長崎へおもむいたのも、理由のひとつは、弓香を忘れるためであった。
しかし、三年余の長崎滞在の日々、やはり、弓香を忘れることはできなかった進八郎であ

る。

異能、という言葉があてはまる、鋭く頭脳の切れる、性情に氷のような冷たさも含めている進八郎であったが、弓香を愛する一点では、弱い男であった。

弓香は、なにか、包んだものを手にしていて、庭を横切って来た。

「里から、松茸がとどきましたので、すこしばかり、おわけいたします」

忝じけない」

進八郎は、受けとったが、弓香の視線が、沓石へ落されたので、はっとなった。

そこに甚内の草履がぬいであるのを、弓香は、みとめたのである。

「……」

弓香は、しかし、黙って、頭を下げると、遠ざかって行った。

進八郎が、書院にもどると、甚内は、俯向いたなりで、

「やはり……、わしは、ここで、腹を切る」

と、独言するように、云った。

「どうしても、そうしたいのであれば、止めはせぬが……、酔ったおのれは、別の人間であった、と考えたが、よかろう」

「いくらかくしても、真相は、やがて、露見しよう」

「急に、気が弱くなったようだな」

進八郎は、笑って、

「死んだら、あの美しい妻を、抱けぬぞ」

と、云った。

甚内は、びくっと肩を顫わせた。

「おれに、まかせておけ。……目撃した者は居らぬのだ」

「す、すまぬ。このご恩は、生涯――」

甚内は、畳に両手をついた。

「もうよい。そっと、出て行って、門の方から、屋敷へもどるのだ」

「もう、一滴も酒は――」

「あたりまえのことだ」

進八郎は、甚内が忍び出て行くと、用人を呼んだ。

亡父の代から仕えている老用人が、入って来て、書院内の光景に、仰天した。

「事の次第をしたためるから、組支配まで、届けてくれ」

進八郎は、命じた。

「そ、それで、どうなさいます？」

「また、留守居をたのむ」

「……」

「こんどは、屋敷へもどれぬかも知れぬが、処理は、お前に、まかせる」

「お身をかくされるあてが、ございますか？」

「ある。……次郎右衛門の妻女が、遺体を受けとりに参ったら、ひとえに、罪は主人にあった、と云ってくれてよい」

「は、はい――」

「お前にとっては、まことに、いろいろと手こずらせた主人であったな。最初で最後の詫びを云っておく」

進八郎は、用人にかるく頭を下げておいて、居間へ入って行った。

第十一話　夫婦というもの

一

狩野弥太郎は、不忍池の畔にならんだ水茶屋の前を、腕を組んで、歩いていた。

「弥太郎――」

声をかけられて、視線をまわすと、豆しぼりで頬かむりをした、着流し無腰の男が、落間で、腰かけていた。

一瞥して、それが、古城進八郎と判った。

弥太郎は、同じ床几に腰をおろすと、

「危険ではないか？」

と、訊ねた。

進八郎が、旧友の伊奈次郎右衛門を、あやまって、殺して、そのまま屋敷から姿をくらました、という噂は、弥太郎の耳にも、入っていた。

「危険だな。五尺の身の置きどころが、だんだん、せばまって来た」

進八郎は、頬かむりの蔭で、笑った。
「古城家は、即日改易となった、ときいたが――？」
「そこで、おれは、浮浪の徒として、町奉行所の捕方に、追いまわされる身となった次第だ」
「府内から、遁げ出せばよいではないか？」
「そうは、いかぬ。……おれの壮図を、鉄之助あたりから、きかなかったか？」
「海賊船をつくって、南洋へのり出す、という話か」
「そうだ。お主にも加わってもらう」
「……」
「八幡船再興には、軍資金が要る。それを、つくらねばならぬ」
「押込み強盗でか」
「そう、さげすんだ目つきで、見るな。手段をえらんでは居れぬ。千両つくればよいのだ。……千両できたら、公儀の用船を頂戴する」
――そうか、そのために、船手頭の伊奈次郎右衛門をくどき、話がこじれて、次郎右衛門を殺したのだな。
弥太郎は、そう思った。
「お主の壮図は、非常な無理があるような気がする」
「無理を通せば、道理がひっ込む、というやつだな」
「押込みをやったり、船手頭を殺したり、無理がひどすぎる」
「古来、英傑で、無理をせずに、覇を成した者は居らぬ。無理をしたから、信長は、今川義元を片づけることができたではないか」
「いまは、乱世ではない」
「天下泰平――というには、あまりに、国は疲弊しすぎて居るぞ。江戸城の金蔵でさえ、もう殆どの千両箱が、空だ。土蔵で金がうなっているのは、大きな商人だけではないか。大塩平八郎が乱を起したのは、やむにやまれぬ義心より発したものだ。……こっちは、大塩より、少々頭がいいから、海賊になって、異邦の金を奪おうというわけだ」
「それより、目下の自身の身を、捕吏から、かばわねばなるまい」
「それだな。身をかくすに、最も安全そうな場所を、考えてくれぬか」
「……」
「お主の周囲に、おれをかくまってくれる家は、見当らぬか？」
「優之助の屋敷なら、どうだろうか？」
「優之助?! あの不男のところか、かくまってくれるだろうが、夜になると、あいつ、おれの牀へ匍い込んで来るのではあるまいか。……おれには、あの方面の趣味はない」
「そんなことは、云って居れまい」
「ははは、たしかにな。優之助も、仲間にひき入れ、船に乗せて、たらいまわしに、尻を提供させるか」
「ともあれ、優之助の屋敷へ行ってみてはどうだろう」
「よし、行こう。……弥太郎、お主も、八幡船に乗るだろうな？」
「その時になってみなければ、どうなるか、いまから返辞をしかねる」

「必ず、乗り込むにきまって居る」
進八郎は、自信を以って、云った。
「優之助の屋敷へは、わたしも、あとから行ってみよう」
そう云いおいて、弥太郎は、水茶屋を出た。
ものの十歩も行ったところで、不意に、物蔭から、小走りに出て来た女が、行手をふさいだ。
「狩野様――」
必死な視線をあてて来た。
それが、伊奈次郎右衛門の妻津賀と知って、弥太郎は、はっとなった。
弥太郎は、伊奈家に、三度ばかり招かれたことがあって、次郎右衛門の妻とも顔見知りになっていた。
「貴方様が、いま、あそこの水茶屋でお話しなされていたのは、古城進八郎殿でございますね？」
津賀は、訊ねた。
弥太郎は、とっさに、返辞にまよった。
次の瞬間――。
津賀は、その水茶屋めがけて、奔り出した。

二

進八郎は、小銭を支払って、出ようとしたところを、
「古城進八郎殿、とお見受けつかまつります！」
と、鋭く呼ばれて、その武家の妻女を一瞥するや、
――次郎右衛門の女房だな。
と、直感した。
「古城進八郎？　さあ、身共は、そんな姓名を持った男ではないが……」
「おかくしなされても、もう、おそうございます。旗本衆ならば、卑怯な逃げ腰は、お止めなされませ！」
「古城進八郎に、なんのご用か？」
「いかなる意趣があって、良人を殺められましたか、その仔細をおきかせ下さいませ」
「身共は、古城進八郎ではござらぬゆえ、なんの仔細があってのことか、一向に存ぜぬが……」
津賀は、かまわず、
「貴方様が、組支配へお届けなされたところでは、良人次郎右衛門は、談合の途中、立腹して、脇差を抜いて、貴方様に斬りかかり、あやまって、自分の腹を刺した由――。なれど、良人は、自ら刀を抜くような短気者ではありませぬ。平素より、最も粗暴な振舞いをきらう人でありました。……貴方様が、なにか憎いことがあって、殺したに相違ない、と存じます」
と、云いたてた。

通行の者が、もう十人あまり、立ちどまって、じっと見まもりはじめていた。
「見知らぬ他人に向って、なぜ良人を殺したか、と迫られても、返答の致しようもない」
進八郎は、歩き出した。
「古城殿、卑怯でありましょうぞ！」
「卑怯、か。卑怯か卑怯でないか――男の世界のことは、所詮、女子には理解できぬ」
そう云いすてる後姿へ向って、津賀は、懐剣を抜きはなち、
「良人の敵っ！」
と、叫んで、突きかかった。
進八郎は、ぱっと走り出した。
「おのれっ！　待てっ！」
津賀は、裳裾が乱れるのもかまわずに、追おうとした。
とたん、横あいから、懐剣を持った手をつかまれた。
「は、はなせ！」
津賀は、もがき乍ら、それが狩野弥太郎と知ると、
「狩野様！　武士ならば、仇討ちをしようとする女子に、助太刀なさるのが、当然の振舞いではありませぬか。それを、かえって、敵の方に味方して――」
と、睨みつけた。
「ここは、野次馬のたかる物見高い場所であることを、忘れて居られるようだ。古城進八郎を討ちたければ、正式に、評定所へ願い出て、その許可を得た上のことにされるがよい」

弥太郎は、進八郎の姿が、人ごみの彼方にまぎれ込んでしまったのを、見とどけてから、津賀の手をはなした。
津賀は、掌で顔を掩うと、嗚咽した。
――それにしても、進八郎は、ろくに武芸を知らぬ次郎右衛門を、なぜ、殺害したのか？
弥太郎には、それが疑問であった。

三

「旦那様――」
襖をへだてて、次の間から、妻の声がした。
机の前で、蒼い顔をして、腕組みしていた大和田甚内は、われにかえって、
「うむ――」
と、返辞をした。
弓香は、お茶を持って、入って来た。
甚内が茶碗を把りあげる、その手が微かに顫えているのを、弓香は、冷静な眼眸で見まもり乍ら、
「おうかがい、いたしたい儀がございます」
と、きり出した。
「なんだ？」

甚内は、不機嫌な顔つきで、妻へは目もくれようとせぬ。
「伊奈次郎右衛門様のことでございます」
「伊奈次郎右衛門が、どうした、というのだ？」
「伊奈様が、お隣りの書院で、手負うて、お斃れになった折、貴方様も、そばに居合せておいでだったのではございませぬか？」
「なに？　わしが、どうして――、その場に居合せたなどと――莫迦な！　あの下手人は、進八郎に、きまって居るではないか」
甚内は、呶鳴るようにこたえ乍ら、心臓を早鐘のように動悸打たせた。
「わたくしが、お隣りにうかがいましたのは、貴方様が、酔って、竹藪を抜けてお行きになった直後、なにやら、おそろしい叫び声をきき、もしや、と心配したからでございます」
「わしは、進八郎など、たずねては行かなかったぞ。……わしは、往来を、ふらふら歩いて居った。古城の書院で、なにが、起ったか――知っている道理がない！」
「書院の前の沓石には、貴方様の草履が脱いでありました」
弓香は、おちついた声音で、云った。
「知らん！　わしは、あの書院になど、行っては居らぬ！」
甚内は、咆哮するように、叫んだ。
「まことでございますね？　ご自身の胸の裡を、いつわらずに、そう仰言るのでございますね？」
弓香は、鋭く、まっすぐに、良人の蒼白な顔を、瞶めて、念を押した。

「きさま！　わしが、伊奈を、殺した、とでも云いたいのか？」
甚内は、眦を裂いて、妻を睨みかえした。
「不審が、いくつか、ございます」
「なにっ！」
「あの日、お召しになっていた着物は、血汐がついて居りました」
「……」
甚内は、とっさに、ごまかす言葉が、うかばず、唇をわななかせた。
「貴方様は、平素、酒をお飲みになると、別人になったように、人にからむ悪癖がおありになり、また、短慮の点でも、しばしば、人様にご迷惑をおかけなされております。……伊奈様は、まことにおとなしい、石橋を叩いてお渡りになるお人柄ときいて居りますし、また、進八郎様は、かるがるしく人と争って、殺傷沙汰などを起される御仁とも思われませぬ」
そこまで弓香が、云った時、甚内の右手が、ふりあげられた。
弓香の頬が、鳴った。
甚内は、良人の威勢で、弓香を黙らせるよりほかはない、と考えた。
「つべこべ申すな！　伊奈次郎右衛門を殺したのは、古城進八郎だぞ！　まちがいはないっ！　だからこそ、進八郎は、おのが罪状をみとめて、組支配に届け出ておいて、逃亡いたしたではないか！　女子だてらに、妙な疑心暗鬼を起して、良人を責めるとは、何事だ！　たわけっ！」
「……」

「わしの草履が脱いであったとか、着物に血がついていたとか——まるで、それを証拠にして、良人たる者を、罪人扱いにしおって、それで、旗本の妻かっ！」

甚内は、もう一度、弓香の頬を、ひっぱたいた。

「わたくしは、貴方様の良心に、問うてみたのでございます」

「わしには、みじんも、やましい点はないぞ！」

「それなら、結構でございます。……貴方様が、どうしても、進八郎様を下手人だと云いはられるのでございますならば、それでよろしゅうございましょう」

「なんだと申すのだ、おのれ？」

「わたくしは、古城様に、お会いして、たしかに、伊奈様を殺害されたのかどうか、たしかめたいと存じます。もしや、貴方をかばいだてなされているのでありますれば……」

「黙れっ！」

かっと、逆上した甚内は、いきなり、弓香の頭髪をひっ摑んで、ひきずり倒した。

弓香は抵抗しなかった。

ひきずり倒されるままに、俯伏した。

甚内の拳が、顔へ、肩へ、乱打された。

「母様っ！」

廊下から、一子庄太郎の叫び声が、きこえた。

「庄太郎、入ってはなりませぬ！」

弓香は鋭く云った。

「母様！」

「なんでもありませぬ。自分の部屋で、あそんでいるのです」

庄太郎が、駆け去ると、弓香は、起き上って、裾や胸もとの乱れをなおした。

「弓香！　お前は、進八郎を、ひそかに、想うて居ったのではないのか？」

甚内が、上ずった声音をあげた。

「なんという、はしたないことを、申されます！」

「どうだ！　図星であろう！　お前は、進八郎を好きになったので、かばいたてして、良人のわしを、罪人にしようと、悪性のこんたんを起したのだ。……白状せい！」

「旦那様！」

弓香は、きっとなった。

「おいとまを頂きたく存じます」

「なにっ！　や、やっぱり、そうか！　おのれ進八郎に惚れているのだな！」

「そのあさましい卑怯さに、愛想がつきはてました」

弓香は、きっぱりと云った。

四

「ほ——、この屋敷に、かくまってくれ、と申されるのかえ」

桜田優之助は、庭に立った進八郎を、微笑で見まもった。

「たのむ」
進八郎は、頭を下げた。
「お安いご用――」
「たのまれてくれるか、忝じけない」
「なんの造作もないこと。いつまでも、かくれていたいだけ、かくれていなさるがよい。……但し、ひとつだけ、おうかがいしておこうぞえ。もし、その返辞が、あたしに気に食わなければ、即刻、お引きとりねがうことになります」
「なんでも、きいてもらおう」
「進八郎ぬし、お手前は、本当に、伊奈次郎右衛門を、殺されたのかえ？」
「殺した、とこたえれば、即刻お引きとりを、というのか」
進八郎は、笑った。
「そのこたえ、できましたわえ。さ、どうぞ、お上り下され」
座敷に招じられた進八郎は、あらためて、優之助を、じろじろと眺めやって、
「お主、いっそ、女装をすれば、ふるいつきたいような美形になろうな」
と、云った。
「ほほほ……、花嫁御寮にも、なってみましたぞえ。それはもう、惚れ惚れとするような美しさでありましたわえ」
「あらかじめ、ことわっておくが、おれの寝牀へ、忍んで来てもらうのは、まっぴら御免を蒙る」

「ご懸念には、及びませぬ。……されど、もし、あたしが、女装をしてみせれば、進八郎ぬしの方から、忍んで参られるのではあるまいか」
「冗談ではない。目下、敵と狙われたり、町奉行所の犬どもから、かぎまわられたりしている最中を、軍資金調達に腐心しなければならぬのだ。不男を抱く余裕など、ない」
「そういえば、先日、本両替町のなだ屋を襲われたそうな」
「うむ」
「召しあげたのが二百両では、軍資金にもなりますまい」
「その通りだ」
「あたしの考えでは、大きな商人の店に押し込むのは、金づくりになりませぬな」
「どうしてだ？」
「金を持った商人ぐらい、用心ぶかい者は居りませぬぞえ。金をためるのが、生き甲斐ゆえ、一番用心するのは、強盗に押し込まれること。それで、金のかくし場所に、けんめいの智慧を働かせて居ります。滅多なことで、見つけられは、いたしませぬわえ。家の中は、大名屋敷よりも、細心の造りを工夫して、金をかくして居りますぞえ」
「そう云われると、たしかに、そうだな。……商人を狙うのを止めては、しかし、どこも狙うところはあるまい。どの大名も、内証は窮迫して居るし、大坂まで出向いて行って、大店へ押し込んでも、江戸の商人と同様、用心ぶかくかくして居るとなると、いったい、どこを狙えばよいのだ？」
「大奥！」

優之助は、ためらうことなく、その場所を挙げた。
「大奥?!」
進八郎は、眉宇をひそめた。
「どういうのだ?」
「大奥には、金がうなって居りますわえ」
「まことか?」
「老女、中臈の部屋に、どれだけのたくわえがなされているか、世間の知らぬこと。……あたしは、ある筋から、ちゃんと、さぐって居りまする」
そう云って、優之助は、微笑した。
「面白いな! 大奥を襲うか。これは、押し込み甲斐があるぞ」
進八郎も、にやりとした。
「ひとつ、押し込んでごらんになるかえ?」
「やろう!」
進八郎は、自分が追われている身であることなど忘れて、大きくうなずいてみせた。
「手筈は、あたしに、まかせて頂きますぞえ」
優之助は、ぽんと胸をたたいてみせた。

第十二話　女心微妙

一

三千二百石の旗本屋敷だから、宏壮なものである。四十間四方——筆者は、大正生れだから、メートルは苦手なので、読者の方で計算して頂こう。
ちなみに——。
旗本屋敷は、禄高によって、宅地の規模がきめられていた。
一万石から七千石まで——五十間四方。
六千石から四千石まで——四十間から五十間まで。
三千石から二千六百石まで——三十五間から四十間まで。
二千五百石から千六百石まで——三十三間四方。
千五百石から八百石まで——三十間四方。
七百石から四百石まで——二十五間から三十間まで。
三百石から二百石まで——二十間から三十間まで。

すなわち、二百石の旗本で、四百坪の宅地である。
相当なものであった。
これから想像して、大名屋敷が、いかに宏大なものであったかが、割り出せる。
この当時――。
江戸には、町数が千六百七十数町、人口は百六十万に近かった。そのうち、町人は、百三十万人。
ところが、江戸の府内で、江戸城と武家屋敷と寺院と神社、火除地が、その五分の四を占めていた。
すなわち、のこりの五分の一の土地に、総人口の五分の四を占める町人が、ひしめいていたのである。
そのために、現代と同様、商業用の土地の価格は、年毎に、うなぎのぼりであった。
日本橋界隈は、一坪千両であった。
深川のあたりでも、八代将軍吉宗の頃は、一坪百八十両であったのが、天保時代になると三千五百両で売られている。あきれはてた暴騰である。
現代の比ではなかった。
ところで――。
かりに、千石取りの旗本のくらし向きはどうであったか。
一石二両として二千両の収入で、用人、用人並、侍五人、槍持ち二人、立弓、鉄砲、甲冑持ち、長刀、押足軽、馬口取、草履取りなど、平常抱えておかねばならぬ家来が二十数名、

必要であった。
まして、役附きでない小普請ともなれば、とうてい、知行だけで、くらせるわけがなかった。
この時代のことである。
小普請組三百石の旗本に、至急の用事があって、組支配が、呼び出しをかけたところ、屋敷を出て行って、数箇月、戻って来ない、という。
あちらこちら、さがしたところ、身分をかくして、芝居小屋の木戸番をやっていることが、判明した。
それぐらい、小普請組は、貧窮のどん底にいたのである。
三千二百石、桜田優之助も、例外ではなかった。
奥右筆をつとめていた亡父が、永年にわたってたくわえておいてくれた金子は、遊興でほとんどつかいはたしてしまっていた。
今日も――。
書院に於ては、優之助の前には、知行地の名主たちが、うちつれて、現われて、来年度の家計予算について、強談判をしている。
流石の優之助も、憂鬱な面持であった。
桜田家の知行地は、伊豆、上総、下野に分散していた。
優之助の前には、次のような予算表が、さし出されていた。
殿様御衣服金二十六両のところを十三両に、

殿様お小遣い一両のところを二分に、殿様雑費五両を二両一分に——

なんとも、ひどい節減の強請であった。

年間の総出費を三百五十両前後で、おさえようと、名主たちは、衆議一決したのであった。

桜田家の借財は、ざっと千五百両あり、この返済と利払いに、用人は、きりきり舞いをさせられているのであった。

優之助は、髭が一本もない頤を、そろりそろりと撫で乍ら、ずっと、沈黙を守っている。

主人と名主たちの間にはさまった用人才賀三郎兵衛は、しきりに、無尽をすすめていたのだが、優之助は、返辞もせぬ。

「殿様、来年度のご節約、ご承諾下さいましたでしょうか？」

伊豆の名主が、訊ねた。

「承知するもせぬもあるまい。……けど、小遣いと雑費合せて二両三分で、あたしが、どうして、一年間をすごせるのであろうかえ」

優之助は、ほっと、肩を落した。

二

「やむを得ぬ仕儀でございますれば、何卒、その……華美な御衣服を、お止め下さいまして——」

下野の名主が、思いきって、忠告した。

「あたしに、黒の綿服でも、まとえ、と申すのか」

「借財を完済いたすまでの、ご辛抱でございます」

「やれやれ——。日本橋の越後屋呉服店（現代の三越）は、われらが一年分の収益をたった一日であきないをして居る、と申すのに……」

優之助は、いまいましげに、云った。

「ご辛抱でございます」

三人の名主は、平伏した。

そこへ——。

取次の若ざむらいが、障子を開いて、

「大和田甚内様の奥方様が、是非、古城進八郎様に、お目にかかりたい、と申されて、門前にお立ちになって居ります」

と、告げた。

「古城進八郎は、当家には身を寄せて居らぬ、と返辞をいたしたのではないかえ？」

「そう申し上げましたところ、狩野弥太郎様よりうかがった、と申されまして……」

「弥太郎ぬし、よけいなことを、申して——」

優之助は、美しい眉宇をひそめた。

優之助は、進八郎から、伊奈次郎右衛門を殺したのは、実は、隣家の大和田甚内であった、と打明けられていたのである。

「どうなるか、会わせてみしょうか」

優之助は、腰を上げた。
「殿様、では、来年度のご節約は、ご承諾頂きましたものと、有難く、おん礼を申し上げます」
名主たちは、また平伏した。
――勝手にするがいい。
そんな気分で、優之助は、廊下へ出た。

進八郎は、短銃の手入れをしていた。
長崎出島のオランダ商館の通辞から、ひそかに購入した品であった。
三百発の弾丸を添えてもらい、そのうちの二百発を、撃って、かなりの腕前になっている。
――このような武器があるのに、わが国の武士たちは、まだ、刀を最大の武器だと思い込んでいる。ばかげている。
進八郎は、障子の一箇所へ、狙いをつけた。
跫音が、近づいたので、わざとそうしたのである。
障子を開けた優之助は、大袈裟におどろいてみせ、
「この玉の肌から血を流すのは、まだ、早うござんすぞえ」
と、云った。
「短銃を持てば撃ちたくなる、美しい女子がいれば抱きたくなる」
進八郎は、笑った。

「その美しい女子衆が、お主に、会いに来られたわえ」
そう云いおいて、優之助は、立ち去った。
しかし、訪客は、すぐに、姿をみせず、障子の蔭に、うずくまっている。
「入って頂こう」
進八郎は、促した。
ようやく、姿を現した女性を一瞥して、進八郎は、眉宇をひそめた。
「貴女か――」
進八郎は、短銃を机の上へもどして、
「どうぞ」
と、すすめた。
弓香は、突然の訪問を詫びてから、
「狩野弥太郎様に、うかがいまして、こちらのお屋敷とうけたまわり……」
と、云った。
「用向きは、なんでござろう？」
「是非にも、おうかがいいたしたき儀が、ございます。……貴方様は、まこと、伊奈様を殺害られましたか？」
「殺害たから、こうして、逃げかくれて居るのです」
「どうぞ、おかくし遊ばさずに、わたくしにだけは、真実をお打明け下さいませ」
「きいて、どうするといわれる？」

弓香は、じっと、進八郎を見まもって、
「良人は卑怯者でございます！」
きっぱりとした語気で、云った。
進八郎は、腕組みして、弓香の必死の眼眸を、受けとめている。
「伊奈様を殺害たのは、酒乱の良人のあやまちに相違ございませぬ。貴方様は、良人をかばって、罪を背負われました。……そうでございましょう？」
「……」
「斯様な罪は、どのようにひたがくしにいたそうとも、必ず、いずれは、露見いたします。……良人を、卑怯者にいたしたくないと、願うのは、妻として、子の母として、当然の願いでございましょう。……わたくしは、良人に、組支配に、真実を申し述べるように、すすめました。なれど、良人は、怯懦のあまり、どうしても、わたくしのたのみを、ききとどけては、くれませぬ。……何卒、貴方様より、甚内に、覚悟させて下さいますよう、お願い申し上げたく、おうかがいした次第にございます」
弓香は、両手をつかえて、頭を下げた。
「貞婦の鑑、と申せる」
進八郎は、いくぶんの皮肉を含めて、云った。
「いえ、わたくしは、ただ――」
「待ちなさい。貴女の云われることは、たしかに、筋が通っている。良人を卑怯者にしたくない。家のため、子供のため、良人を立派な武士として、自裁させてやりたい。……あっぱれな妻の心がけです。しかし、別の観かたもできる」
「と申しますと？」
「この世の仕組み――といって、わるければ、公儀がつくった制度だが、これは、別の国から、眺めた場合、必ずしも、正しいとは、きまって居らぬ。異邦で、もし、こういう場合、妻は、良人にすすめるに、逃亡をもってするかも知れぬ。夫婦で、必死に、逃亡する――その方が、正しい、という考えかたが、その国には、あるかも知れぬ。……名誉とか誇りとかのために、婦女子たる者が、良人に、死をすすめるのは、妙な女庭訓に、毒されているのではあるまいか。そういう観かたもできる」
「古城様！」
「まあ、きかれい。……貴女は、わたしに、甚内の心をひるがえさせてくれ、とたのみに参られた。……ところが、こちらは、いったん、すすんで、罪をかぶったのだ。罪をかぶっても、べつに、公儀に名のり出たり、捕吏につかまる存念は、毛頭みじんもないし、事の成行きで、そうなっただけのことなのです。いまさら、――いや、自分がやったのではない、実は、大和田甚内の仕業であった、とてのひらをかえしては、逆に、わたしが卑怯者になろう。べつに、武士道の吟味を重んじているわけではないが、これは、わたし自身の、まあ、気象といえる」
「良人には、その誇が、ございませぬ」
「甚内には、貴女と子供と――養わねばならぬ家族が、いる。わたしには、ないのだ」

三

「進八郎様！」
弓香は、まばたきもせずに、進八郎を見つめて、
「わたくしは、甚内のような卑怯者の妻として、大和田家に、とどまっていたくはありませぬ。……それで、良人に申し出て、子供を連れて、屋敷を出ました」
「……」
「子供を、実家にあずけておいて、それから、こうして、貴方様をおたずねしたのでございます」
「甚内が、離別を承知した、といわれるのか？」
「いえ、承知してくれたわけではございませぬ。わたくしの方から、申し出ただけで、良人の外出を見はからって、子供をつれて、屋敷を出ました」
「いささか、はやまったのではあるまいか」
「いえ、貴方様に、真実をおうかがいした上からは、良人の心がひるがえらぬ限り、わたくしは、二度と、屋敷へはもどりませぬ」
「わたしが、次郎右衛門を殺害した、といっているのだから、それでよかろうと存ずるが……、貴女も気がつよい」
進八郎は、笑った。

「いたしかたがありませぬ。わたくしの父母が、このような強情な女子にしてくれたのでございます」
弓香が、そうこたえた折、優之助が、小唄を口ずさみ乍ら、廊下を近づいて来た。

あとは苦労に
痩せゆく月と
知らぬ三五の宵の首尾

「ごめん――」
と、ことわって、障子を開けると、
「弓香殿は、しばらく、この家に、お泊りなさるかえ？」
と、訊ねた。
「え？」
弓香は、びっくりして、まじまじと、優之助を見かえした。
「弓香殿は、家出をして来られたのであろ？」
「は、はい――」
「ほほほ……、進八郎ぬし、あたしのカンのよいことは、無類であろ。……家出をされたのなら、さしずめ、今夜の泊るところを、さがさねばなりますまい。まさか、実家へ帰られるわけにもならぬ、とすると、ま――この家が、ちょうど、泊るにはよろしいようで……」

「滅相もありませぬ。ここには、進八郎様がかくれておいでになります。わたくしが、泊めて頂くなど、とんでもないことでございます」
「なんの――、部屋はいたるところ空いて居りますわえ。……親からもらったものの、家族を持たぬこの身には、ひろすぎて、もてあまして居りまする。たまには、成熟した美しいご婦人に泊って頂いて、その香を残して行って頂きたいと思います」
「わたくしは、まだ離別された身ではありませぬゆえ、みだりに、他人様のお屋敷に泊めて頂くことは、許されませぬ。……青山に、伯父が居りますれば、今宵は、そちらへ――」
と、弓香は、頭を下げた。
「青山は、ちと、遠すぎますぞえ。……家出をされたのであれば、もう、どこへ泊られようと、かまいますまい。今夜は、当家へお泊りなされ」
「ご好意は、忝じけなく存じますが、おいとまいたしまする」
弓香は、進八郎に、別れの挨拶をしておいて、立った。
しかし――。
弓香が、裏門の潜りから出ると、その前に立ちはだかった女性がいた。
弓香は、ぎくっとなった。
伊奈次郎右衛門の妻津賀であった。
二人は、幼馴染であった。
「弓香さん！」
険しい声音と表情で、津賀は、弓香をにらんだ。

「おお、津賀さん――」
「貴女は、どうして、このお屋敷へ参られました？」
「……」
弓香は、一瞬返辞をしかねた。
津賀には、親族らしい若い武士が二人、つき添うていたし、往還をへだてて、むかいの雑木林ぎわに、三人ばかり立っている武士も、どうやら、津賀に味方する者たちと思われた。
「桜田様に、一寸おたのみ申したき儀がございまして――」
「弓香さん、おかくしなさるな。古城進八郎殿が、この桜田家に、ひそんでいるのでございましょう。貴女は、古城進八郎殿に、会いに参られた――そうでしょう？」
「わたくしが、どうして、進八郎様に、逢う用向きなど……」
「かくされるな！」
武士の一人が、弓香に迫った。
「古城進八郎は、たしかに、この屋敷にひそんでいる！　まちがいはない！　貴女がごまかしても、無駄だ！」
「存じませぬ！　わたくしは、桜田様に、会いに来ました」
そうこたえつつ、弓香は、
――まことの下手人は、わたくしの良人大和田甚内でございます！
と、胸の裡で、叫んだ。
しかし、その言葉を、口にすることは、どうしても、できなかった。

「踏み込もうぞ！」
一人が、叫んだ。
「よしっ！」
もう一人が、気負い立った。
雑木林ぎわの武士たちも、馳せて来た。
――進八郎様を、斬らせてはならぬ！　とっさに、弓香は、ほぞをきめた。
「ちがいます！」
「なにが、ちがう？　古城が、この屋敷にひそむ、たしかな証拠がござるぞ！」
「い、いえ！　そ、そのことではありませぬ。伊奈様を殺害(あやめ)たのは、古城様では、ありませぬ！」
「弓香さん、古城進八郎殿を、かばいだてなさる理由は？」
「下手人は……、下手人は、別に、居りまする！」
「誰です？　何者です？」
津賀は、迫った。
弓香は、「わたくしの良人大和田甚内です」
と、打明けたかった。
その衝動にかられつつも、どうしても、口には出せなかった。
「いい加減なことを！」
武士の一人が、いまいましげに吐き出すと、ほかの者が、

「縁戚だから、かばいだてするのも、むりはない」
と、云いすてた。
「行くぞ！」
潜り戸を蹴って、次つぎに、屋敷内へ、とび込んで行った。
――進八郎様！　はよう、遁げて！
弓香は、祈った。

第十三話　夜働き

一

表玄関で、気負い立った叫び声が、あがった時、桜田優之助は、別棟の座敷の障子を開けていた。

「進八郎ぬし、どうやら、討手が押し入って参った様子でありますぞえ」

「頭数は？」

古城進八郎は、べつに動じる気色もみせずに、訊ねた。

「いそいで、報せに参ったゆえ、さあ、何人ぐらいであろうか」

「やむを得ぬ。このピストルの威力を示してくれるか」

進八郎は、短銃を、庭へ向けて、狙いをつけてみた。

「それは、ご遠慮なされ」

優之助は、かぶりを振った。

「そうだな、銃声一発で、この桜田家が改易になる」

「どうせ、借財で首のまわらなくなった当家が、とりつぶされるのは、一向にかまいませぬが、主人は切腹、ということになるのは、まっぴらじゃ。このやさ男が、腹をむき出して、短剣の切先を、ぷっつり突き刺してみたところで、さまになりませぬわえ」

優之助が、笑い乍ら、そう云った時、庭で、

「伊奈次郎右衛門が妻津賀、ご当家に身をひそめる古城進八郎殿に、見参！……卑怯の振舞いは、旗本の恥、姿をおみせあれ！」

との声が、あがった。

「女子と小人は養い難し、か」

進八郎は、呟いて、立ち上った。

「やむを得ぬ。三十六計をきめよう」

「表も裏も、助太刀が、詰めて居るに相違ありますまい」

「屋敷の外でなら、一人や二人、撃ち殺したところで、お主に、咎めはあるまい」

「人殺しは、なるべく、お避けなされ。……かくれていて頂きましょうわえ」

優之助は、思案のある微笑をみせた。

もうその時、庭をつききった助太刀の武士が二人ばかり、別棟の前に至っていたし、母屋では、用人はじめ家来たちが、白刃で脅されていた。

優之助が、別棟の縁側に出ると、助太刀の武士たちは、

「ここだぞ！」

と、叫んだ。

優之助は、その相貌を、鋭くきびしいものに一変させていた。
また、語気も言葉づかいもあらためて、
「お手前ら、なんのための狼藉か！」
と、睨みつけた。
津賀が、そこへ、奔って来た。
「桜田様、良人の仇敵を、かばいだてなさいますと、やむなき仕儀と相成りまする。古城進八郎殿に、ここへ出るように、お伝えなされませ！」
「古城進八郎など、当家には、泊って居らぬ」
「われらは、古城殿がひそんでいるのを、すでに、つきとめて居りまするぞ！　さ——お伝えなされませ！」
「当家のあるじが、泊って居らぬ、と申して居る。これほど、たしかなことがあろうか」
津賀は、猶予はならぬ、とばかり、助太刀の武士たちへ、目くばせした。
「ごめん！」
二人が、縁側へ、とびあがって来た。
優之助は、きっとなってみせ、
「無断の侵入者は、曲者とみなすぞ！」
と、叱咤した。
「かばいだてをされるから、余儀なく、力にうったえることに相成る！」
武士たちは、優之助を見くびっていた。

ずかずかと迫って、優之助を押しのけようとした。
瞬間——。
優之助は、目にもとまらぬはやさで、一人から、白刃を奪い取りざま、もう一人の肩へ、峰撃ちをくれた。
差料を奪われた方は、庭へ跳ぶと、
「当主が抵抗するぞ！　出あえ！」
と、味方を呼んだ。
母屋から、三人の武士が、疾駆して来た。
優之助は、三人が切先をそろえて、じりじり肉薄して来るにまかせていたが、ふっと、口辺をほころばせると、
「ばかばかしい」
と、呟いて、白刃を、庭へ抛った。
討ち気を抜かれた武士たちは、とまどった表情になった。
津賀が、気丈夫に縁側へ上って来て、
「入りますぞ！」
と、ことわった。
「女だてらに、仇討をしようなどと、顔をひきつらせて、むだな意気地と申すもの」
津賀は、かまわず、

「古城進八郎殿、見参！」
と、叫んだ。
武士たちが、障子を、切先で、突き開けた。

二

別棟には、十畳の座敷のほか、六畳と長四畳の部屋があった。
討手がたは、油断のない目くばりで、踏み込んだが、どこにも、進八郎の姿は、見当らなかった。
「逃げうせたか！」
武士たちは、庭へとび出すと、四方へ奔った。
津賀も、いそいで、去ろうとした。
「伊奈殿のご妻女！」
優之助が、呼びとめた。
「邸内をあらしておいて、一言の挨拶もせずに、立ち去ろうというのか？」
「古城殿は、たしかに、ご当家にひそんでいたのです。貴方様が、のがされたに相違ありませぬ！」
睨みかえしておいて、津賀は、遠ざかって行った。
優之助は、高い声をあげて、

「家の者ども！　屋敷が、けがれた。塩をまけ」
と、命じておいて、座敷に入ると、ぴしゃりと障子を閉めた。
座敷の床の間には、桜田家の家宝のひとつである山吹縅（おどし）の大鎧が、据えられてあった。
優之助が、障子を閉めたとたん、その大鎧が動いた。
両手がゆっくりと挙げられて、まず、胄を脱いだ。それから面頬をはずすと、進八郎の顔が、あらわれた。
優之助が、とっさの機転で、進八郎に、大鎧をつけさせたのであった。
顔に面頬をつけたので、それに人がかくれていることは、一瞥（いちべつ）では、看破し難かった。
「やれやれ――」
進八郎は、脛当をとり、大口袴をぬいで、大きく背のびした。
「われわれの先祖は、こんな重いものを身につけて、戦場へ出て行ったのだな。合戦にかこつけて、伊達をきそった、ということになるのか」
「進八郎ぬし。これは、冗談ごとではすまされぬ。伊奈次郎右衛門の妻女は、まなこを血走らせて居りまするわえ。……どうなされる？」
「なりゆきだな。いまさら、引っ込みはつかぬ」
「ぬしは、あくまで、伊奈殺しの下手人になっているおつもりかえ？」
「優之助、白状しよう。おれは、甚内の女房に――あの弓香さんに、惚れているのだ」
「それぐらいのことが、わからぬあたしか。お二人の話を、ぬすみぎいているうちに、すぐ察することができましたぞえ。……されば、そのためにも、甚内に自裁してもらう必要があ

りますわえ。……進八郎ぬしに、身を殺して仁を為す料簡があったとは、意外じゃ。……欲しいものが、手に入れられる絶好の機会ではないかえ」

優之助は、冷酷なことを云って、笑った。

「欲しいものなら、手に入れる、か」

進八郎は、先刻ここに現われた弓香の俤を、思い浮べ乍ら、呟いた。

その俤をふりはらった時、進八郎は、いつもの鋭利な刃物を思わせる表情にかえっていた。

「優之助、信頼の置ける忍びの上手を知らぬか！」

と、訊ねた。

「忍びの上手！」

「夜働きでもかまわぬ」

「あ――」

優之助は、にこりとした。

「大奥へ忍び込む、と申されますかえ」

「それだ。忍び込む手筈は、お主がやってくれる、と云っていたな」

「引き受けましたわえ」

優之助は、ぽんと胸をたたいてみせた。

三

江戸の街は、昼と夜が、全くの別世界となる。

どの町も、一丁目二丁目三丁目、と筋がつけられた裏通りは、宵の口までは、雑沓をきわめているが、宵闇がせまると、店はすべて大戸をおろすし、露店もまた、時刻のおくれるのを恥とするように、店片づけをしてしまう。同時に、寄席も講釈場も見世物小屋もはねてしまう。

あっという間に、往還から、通行人の姿は絶えてしまう。

街燈ひとつ、あるわけではなかった。

月のない夜などは、文字通り一寸先が闇となってしまうのであった。

星あかりの夜半ともなると、両側の商店の屋根は高く、間口がひろくなり、道幅もまた、こんなに広かったか、とおぼえさせられる。

ただ――。

人影のあるのは、辻の角などに出た、夜明しという酒飯をあきなう露店だけであった。

夜明しは、東雲を告げる頃あいまで、あきないをする。

しんしんとして、夜の寂寞がふかくなった時刻には、この夜明しという店で、皿や丼をあつかう物音が、異常に高くひびくのであった。

当時――。

江戸市中の夜半すぎの通行には、四害がある、といわれていた。

第一は、試斬り、という武家の暴行。

第二は、物取りの賊の出没。

第三は、酔漢。
そして、第四は、犬に吠えつかれること。
江戸には、どういうものか、ひどく、犬が多かった。
古人の言葉のごとく、一犬が吠える時は、万犬がこれにならう、というやつで、物音ひとつせぬ深更に、不意に、一匹の犬が、吠えると、たちまち、あちらこちらで寝ていた犬が、むくっと首をもたげて、吠えはじめ、およそ数町の間、犬の声だらけになる。
ちょうど、その夜——四更をまわった頃、数町四方といわず、十町四方もの犬が全部吠えたてるようなかまびすしい瞬間が、あった。
ようやく、その犬声が、なくなった頃、一個の黒影が、とある大名屋敷の裏門の屋根の上に、現われた。
ぴたっと、身を伏せて、往還をうかがっていてから、高塀へ跳び移った。
まず、かなり重い包みを、細引で、路面へおろしておいてから、身軽く、跳び降りた。
頬かぶりの黒い布をはらい、からげていた裾をおろすと、すたすたと歩き出した。
大名屋敷の塀がきれると、町家筋とのあいだの辻が、あった。
夜明しの灯が、片隅に、闇に滲んでいた。
男は、辻に出ると、酔歩蹣跚たる足どりをつくって、その露店へ、近づいて行った。
「一本、つけてくんねえ」
たのんでから、男は、ちょいと、視線をあげて、
「おや！　おめえさん——」

と、おどろきの声をあげた。
夜明しのあるじは、男ではなく、女だったのである。
お高祖頭巾をかぶっていて、まとっているものは粗末だが、あきらかに、武家の妻女であった。
行燈のまたたく灯影に映えた顔は、まだ若く、美しいのであった。
男は、狐にでもだまされているのではあるまいか、と疑ぐるように、怪訝のまばたきをした。
夜明しのあるじが、こんな若い美しい武家の妻女である、というのは、この時代の常識では、とうてい考えられぬことであった。
「おめえさん、どうして、こんな商いを、していなさるのだえ？」
男は、訊ねた。
「出会わねばならぬ人が、居りまして——」
女あるじは、酒に、肴を添えて、さし出し乍ら、こたえた。
「出会わねばならぬ人？　だって、おめえさんは、深夜の商いじゃないか」
「深夜でなければ、出会えぬ人でありますゆえ——」
「へえ。妙な対手を、さがしていなさるものだ。幼友達で、いまは零落れて、夜鷹をしている女、という見当かね」
「いえ、男であります」
「ふうん。深夜でなけりゃ、外へ出て来ねえ男なんてえのは、おめえさん、夜働きしかいや

しねえ」
「その夜働きに、出会うために――」
そうこたえて、お高祖頭巾の蔭で、にこりとしてみせた。
男は、一瞬、息をのんだ。
女あるじは、まっすぐに、男を見据えて、
「すなわち、お主に出会いとうて、こうして、もう五日間も、夜をあかして居りましたのじゃわえ」
と、云った。
ぎょっとなって、むささび吉五郎は、盃を台へもどした。
室町三丁目に、小綺麗な袋物の店をひらいて、小僧と小女一人ずつを使って、かたぎの商人ぐらしを、もう七年あまりも、つづけている吉五郎であった。
むささび、と異名をとる大名屋敷専門の夜働きであることを、知っているのは、仲間数人だけの筈であった。
「冗談じゃねえ」
むささび吉五郎は、ひくく呟いて、かぶりを振った。
女あるじは、微笑をつづけ乍ら、
「室町三丁目の袋物吉兵衛――おもての顔は、そうでありますな、お主は？」
「……」
「あたしは、べつに、町方の手先ではないゆえ、かくさずともよろしいぞえ」

「……」

四

むささび吉五郎は、無言で、一歩退った。
「あたしが、五日間、お主を待っていたのは、たのみがあったからじゃ。そう思うて、欲しい」
「……」
「要心するのは、むりはないが、素姓が判っているのは、こちらに、それだけの調べがついていることゆえ、もう、しらばくれるのも、遁走するのも、止めにしたがよい」
「おめえさん――」
吉五郎は、呻くように、云った。
「女じゃねえな」
「さすが、むささび吉五郎、目が鋭いぞえ。あたしは、旗本小普請組桜田優之助」
吉五郎は、名乗られて、ごくっと、生唾（なまつば）をのみ込んだ。
「ついて来るかえ？」
誘われて、吉五郎は、思わず、
「へえ」
と、うなずいてしまった。

——まさか、旗本が、女に化けるなんて？

なかば疑いつつ、吉五郎は、お高祖頭巾をかぶった、どう眺めても女でしかない後姿を、見まもり乍ら、ついて来た。

宏壮な屋敷の、裏門わきの潜りを、くぐらされて、

——やっぱり、そうなのか。

と、あらためて、あきれた。

別棟では、まだ、進八郎が、起きていた。

「進八郎ぬし、客を一人、ともないましたぞ」

優之助から告げられて、進八郎は、机の上にひろげられた江戸大奥の図面から、顔をあげた。

優之助は、吉五郎を促して、座敷に入って来ると、

「この男、むささび吉五郎といい、忍びの達人じゃわえ」

と、ひきあわせた。

「お主が、五日も、家をあけていたのは、この男をつれて来るためであったのか」

「左様じゃわえ。礼を云うてもらわねばなりませぬな。……室町で袋物の店をひらいて居るので、会いに行くのは、たやすいが、まともに、店をおとずれて、くどいたところで、ついて参るはずもない、と思い、大名屋敷からぬけ出して来たところを、つかまえましたぞえ」

進八郎は、うなずいて、吉五郎を凝視した。

どう眺めても、律義な商人でしかない風貌であった。

きちんと膝をそろえてかしこまり、目を伏せている。

「吉五郎——」

「へい」

「手つだってもらいたい仕事がある」

「へえ？」

「おれは、この桜田優之助と同じく、旗本小普請組の人間だが……、大きな野望を抱いている。その野望を遂げるために、軍資金が、必要なのだ」

「……」

「お前に手つだってもらって、千両ばかりつくりたい」

「……」

「お前は、大奥へ忍び込んだことがあるか？」

「へ、へい。一度だけございます」

「おれは、大奥から、千両盗みたいのだ」

「ご直参のお殿様が、そんなことを、なさっても、よろしいので——？」

「やむを得ない。手段をえらんでは居れぬ」

進八郎は、野望の内容を、説明した。

吉五郎は、目をひらいて、きき入った。

「……という次第で、海賊になるには、まず千両が要る。多ければ多いに越したことはない

が、あまり欲ばって日数を重ねていては、この身が危くなるので、事を急ぐ。……どうだ、手つだってくれるか？」

吉五郎は、ちょっと、考えていたが、

「承知いたしました」

と、引き受けた。

第十四話　大奥女中

一

大江戸二大祭のひとつ、神田明神の祭礼がおわって二日後の、秋晴れの朝——。

江戸城大奥の御用達町人の一人——本石町の井筒屋が、長持二棹をかついで、しずしずと、御切手御門を通った。

井筒屋は、京都から出て来ている染物屋であったが、たいていの御用は間に合せるので、大奥の女中がたは、さまざまの依頼をしていた。

この日、井筒屋は、ある旗本小普請組の娘が、奥女中として新参お目見奉公に上るのに、附添いも兼ねていた。

大奥の女中といっても、さまざまであった。大きく分けると、お目見以上と以下になっていた。

すなわち、上臈、中臈、年寄、中年寄など高位の者から、呉服之間、御三之間あたりまでを、お目見以上という。これは、身分の制限があり、どの家の娘でも、奉公できるわけでは

なく、直参旗本衆――それも、将軍家の側ちかくに勤めている小姓の娘が、大半であった。
お目見以下――仲居とか火の番とか使番、あるいは高級女中の部屋の使傭人ともなると、町人、百姓の娘が多かった。
井筒屋が附添うた娘は、五百石取りの三河譜代の家の長女なので、お目見するとすぐに、御祐筆にされることになっていた。
御切手御門で、駕籠から、降り立った時、門番がたが、思わず、息をのんだくらい、美しかった。
「あれは、きっと、上様のお手がつくのう」
「相違ない」
後姿を見送り乍ら、門番がたは、噂をしあったことであった。
娘には、その実家の用人と若党が、供をしていた。
井筒屋の主人と手代二人、小僧三人が、あとにつづいた。
怪しむべき気配は、全くなかった。
一行は、やがて、御広敷の関門である七つ口に到着した。
御広敷というのは、大奥へ出入りするには、必ず経由しなければならぬところであった。
高級女中たちが出入する玄関があり、下級女中の出入する口のほか、御用達町人が、御用をうけたまわる土間も、ここに設けられてあった。
添番という見張り役人の詰所は、玄関わきにあったが、かれらにも、奥向きの模様は、全く判らぬのであった。

医師以外は、完全な男子禁制で、御広敷からさきへは、老中若年寄といえども、入ることができなかったからである。
新参お目見の娘は、玄関に待ち受けたお坊主（頭をまるめた女中）に、渡された。
玄関の式台に上りかけた娘は、ゆっくりと頭をまわして、供をして来た用人に、かるくうなずいてみせた。
それは、誰の目にも、別離の挨拶と見てとれた。
娘は、優之助が化けた姿であり、用人は、進八郎の変装であった。
――では、首尾よく！
――お互いに成功を！
二人の無言のうなずき合いは、別離の挨拶ではなく、その合図であった。
優之助が化けたお目見姿が、お坊主のみちびきで、奥へ消えると、進八郎は、若党へ、目くばせした。
若党は、むささび吉五郎であった。
井筒屋の方は、部屋方の買物口である、丸太の勾欄をめぐらした土間へ、入って行った。
御広敷の七つ口は、七つ（午後四時）の拍子木が鳴らされると、板戸が閉められる。
ここに、締戸番という役人がいて、大天秤を備えつけて、長持や葛籠の目方を調べた。
そのむかし――正徳年間に、大奥年寄の江島が、御台所御用と称して、長持の中へ、歌舞伎役者の生島新五郎をひそませて、長局へひき込んだ不祥事件を起して以来、この貫目吟味がはじめられた、といわれている。

しかし、これが実行されたのは、ほんの数年だけであった。いまは、長持の目方をはかったり、蓋をあけたりするような調べは、一切行われていなかった。

井筒屋は、出て来た御末という女中がたに、長持の一棹は、呉服之間へお渡し下され、もう一棹は、本日新参お目見の旗本衆のお娘御のものであるゆえ、そのお部屋へおはこび下され、と告げた。

井筒屋が、そう告げているあいだに、用人姿の進八郎と若党姿のむささび吉五郎が、七つ口から、消えていた。

二

大奥というところは、まことに奇怪な世界であった。

大小とりまぜて、二百室もある建物に、住んでいるのは、一人のこらず、女子であった。

本丸だけで、将軍家附きでおよそ二百五十人の女中がいた。高級女中は、数人の部屋方という又女中を使っているので、総勢は六百人を越えていた。

御台所も、同数の女中を使っていた。

たった一人の男子将軍家に、千人以上の女子が、仕えていたわけである。

この大奥で、費消する一年の金高は、二十万両であった。

将軍家は、大奥よりも中奥で、起臥することが多かった。大奥は私邸で、中奥は官邸にあたり、そこには、一切女子を住まわせていなかった。

将軍家は、千人以上も住んでいる大奥よりも、身のまわり一切の世話を、若い男子がやってくれる中奥の方が、気楽だったようである。

中奥と大奥の間には、御錠口という杉戸の境があり、ここから奥へは、将軍家一人しか入れなかった。

また、御台所はじめ大奥女中は、中奥へ一歩も出ることは、許されなかった。御台所には、一生に一度だけ、御表拝見、という行事が許されていたが、大半の御台所は、ついに生涯、その政庁の方を見ることもなくおわっていた。

将軍家が、中奥から大奥へ入るのは、四つ（午後十時）であった。

御座の間から、御入側の廊下に出て、庭に面した長い廊下を進んで、御仏間の角で、右に折れ、宇治の間、御対面所などに添うた長廊下を、さらに南進して、庭につきあたり、これを右折して、御鈴番の部屋の前を通って、左折し、御小座敷に入る。

御小座敷が、将軍家の寝所であった。

この大奥西南隅の御小座敷は、将軍家が、中臈という側妾とともに寝るところであった。

正夫人たる御台所の住いは、反対側の西北隅にあった。将軍家が、御台所と一緒にやすむことは、滅多になかった。

将軍家が、御小座敷で、中臈と同衾する夜は、ものものしいしきたりをふまなければならなかった。

まず――。

その夜、将軍家と一緒に寝る、ときまった中臈は、長局の自分の住いから、半刻前に、御

小座敷に伺候した。

そのいでたちは、総白無垢の寝衣をまとい、髪を櫛巻きにして、簪を挿さず、長局のすべての女中の羨望の視線の中を、しずしずと長廊下を通って、御小座敷に入るのであった。

御小座敷には、先着の年寄が待ちうけていて、中臈が入って来ると、その櫛巻きの頭髪を解いて、中に、兇器や怪しい文書がひそめてないかどうか、あらためる。

それがおわって、中臈は、次の間に下り、全裸になって、三の間に待たせたお附女中に、温湯で、肌をふかせる。

三の間は、中臈の控室にあたり、そこに平常の衣裳、調髪化粧具をあらかじめはこんでおいて、自身のお附女中を控えさせておいた。

時刻になって、将軍家が入って来ても、中臈はすぐに、次の間から出て行かぬ。

年寄と二人の上臈が、将軍家を出迎えて、しばらく、雑談する。

さて、就寝の段になると、将軍家の夜具を中央に敷き延べ、その右に、中臈の夜具をならべる。

将軍家の夜具から、左側に、すこしはなして、添寝の上臈の夜具を敷く。この上臈は、就寝してからは、将軍家に背中を向けて臥し、朝までその姿勢を崩さず、睡ることも、ほとんどしない。この上臈は、処女でなければならなかった。いかに年をとっていても、男を知らぬ女性であった。

将軍家が就寝してから、中臈は、次の間から出て、自分の牀へ、そっと入って仰臥する。

その時、年寄が、しずかに近づいて、掛具の下へ片手をさし入れ、中臈の寝衣の前をはぐ

り、陰部をさぐって、人差指一本を奥へ挿入し、そこに兇器がかくされていないことをたしかめる。

中臈がたとえ処女の場合でも、この吟味からまぬがれることは、許されなかった。

吟味おわった年寄が、将軍家へ、挨拶しておいて、次の間へしりぞいてから、はじめて、中臈は、将軍家の牀へ、身を移す。

将軍家は、無言裡に、中臈の肌を愛撫し、契ることになる。前戯も、そのこと自体も、ごく短い時間のうちに、行われた。

なにしろ、すぐかたわらには、上臈が添寝しているのであった。

中臈が、すでに、肌の燃える身になっていても、声を立てたり、身もだえることを、はばかったのである。将軍家としても、あじけなかったに相違ない。

翌朝、添寝の上臈は、別の部屋で、年寄に向って、

「昨夜は、格別のお打ち解けにて、しかじかのおたわむれあり」

と、詳細を、具体的に報告した。

ばかげたしきたりであったが、将軍家としては、このしきたりを破ることは、絶対にできなかったのである。

将軍家が、正夫人以外と寝る時に、このような厳重な監視つきとなったのは、五代将軍綱吉の時に、事件が起ったためであった、といわれる。

いわゆる柳沢騒動である。

老中柳沢吉保が、おのれの私通した素姓卑しい女を、将軍綱吉にすすめた。吉保は、その

女を使って、綱吉に、同衾中に、百万石の領地下附の墨附きをしたためさせたのである。

さいわい、綱吉は、それからほどなく逝去し、柳沢吉保は、失脚して、百万石下附の墨附きは、幕閣に取りあげられ、この事件は、世間に表沙汰にならずに済んだ。

この事件以来、幕府では、将軍家に肌を与える女子が、その時を利用して、野望者の手先となるのを、未然に防ぐことにしたのであった。

いずれにしても、大奥の中で唯一の男性である将軍家の閨房生活からして、まことに奇怪なしくみになっていたのである。

三

辰上刻（午前八時）。

旗本小普請組の娘に化けた優之助は、大奥西北隅の御台所の住居に伺候して、お目見の挨拶をした。

次の間には、上臈ならびに年寄が、ずらりと控えていて、新参お目見女中を引見した。

お優と名のった優之助が、好感を持たれたのち、与えられた部屋へ、下った時は、辰下刻（午前九時）になっていた。

祐筆の下命があるまでは、一人ぐらしである。

そこが、狙いどころであった。

優之助は、はこび込まれた長持から、組み立て式の梯子を、とり出すと、これを、片隅に

立てかけて、のぼって行き、張りじまいの天井板をはずすと、蠟燭を点けて、天井裏の闇に滲ませつつ、大きく上下させた。

十もかぞえぬうちに、そこへ、するすると至ったのは、むささび吉五郎であった。

「今日は、将軍家が、あと半刻で、大奥にお入りになる」

優之助は、告げた。

「へい、合点――」

吉五郎は、うなずいてみせた。

優之助は、御台所にお目見したあと、長局の中を案内され、どの部屋に、どの上臈、年寄、中臈が住むか、挨拶まわりをさせられていたので、その見取図を手ばやくつくっていた。

「これを――」

「へい。旦那が、ごらんになったところでは、どの婆さんが、金をため込んでいる様子でございましたかい？」

「上臈では錦小路、年寄では松島、中年寄では瀬川――そんなところであったな」

「わかりました」

「ついでに、この一廓をさぐってみるがよろしかろう。お坊主どもが、住んで居る。こやつらは、賄賂取りの達人ゆえ、しこたま、ため込んで居ろう」

「承知いたしました」

吉五郎が去り、優之助は、天井板をもとにもどして、梯子を降りようとした。

とたん――、

「なにをして居ります！」
鋭く咎める声が、かかった。
優之助が、ふりかえると、御台所の許へつれて行ったり、各部屋に挨拶まわりをさせた篠井という、四十年配の中年寄が、眦をひきつらせていた。
——しまった！　不覚！
優之助は、狼狽した。
次の瞬間には、とっさの思案をしていた。
ゆっくりと畳の上へ立ち、梯子をおろして、それをたたんだ優之助は、両手をつかえると、
「粗相の儀、おゆるしを——」
と、頭を下げた。
篠井は、近づいて来ると、
「なにが粗相じゃ！　いったい、これは、なんの真似じゃ？」
肩をつかんで、激しく、ゆさぶった。
優之助は、やおら、顔をあげた。
「さ——申してみよ！　返答次第では、そなたは、自らを裁かねばならぬのじゃぞ！　毒を仰がねばならぬのじゃぞ！」
「毒を仰ぐのは、ごめんでございます」
「ぬけぬけと申して！　いったい、なんの振舞いをして居ったのじゃ？」
「お知りになりたいと仰せられますか？」

「おう、知りたいとも！　白状いたせ」
「実は、盗人の手引きをいたして居りました」
「なんじゃと?!　そなた、正気で、申すのか？」
「はい、いつわりは申して居りませぬ」
「正気で、そう申して居るのなら、そなた、生来の悪女じゃな」
「決して、悪女ではございませぬ」
「悪女でなければ、なんじゃ！」
「悪女でない証拠を、ごらんになりたければ、ごらんに入れてもよろしゅうございます」
「おう、ふてぶてしゅう申すものぞ！　見せい！　見せるがよい！」
「では、こちらの小部屋にて——」
優之助は、その小部屋の襖を開けた。
篠井は、覗いてみて、べつに奇異の光景も見当らぬので、不審の面持で、
「なんじゃ？」
と、優之助を振りかえった。
瞬間——。
優之助は、篠井を小部屋へ突き入れて、すばやく、襖を閉めた。
「なにをいたす！」
屹、となった篠井へ、優之助は、にやりとしてみせた。
「貴女様を、犯しまする」

「な、なんじゃと?!」
「ごめん――」
優之助は、篠井の鳩尾へ、拳を突き入れて、当て落した。

四

いくばくかの後――。
篠井は、おのが股間に加えられた圧力によって、意識をとりもどした。
目蓋をひらくと、顔の上に、新参お目見女中の美しい顔があった。
「……?」
愕然となって、篠井は、優之助を仰いだ。
「わたくしが、悪女でないことが、お判りか?」
優之助は、微笑してみせた。
左様、篠井の秘部には、太い堅いものが、きっちりと、一杯に、はめ込まれていたのである。
四十二歳の今日まで、篠井は、男を知らなかった。
――これが、男女の交合というものであったのか!
心の一隅では、冷静に、この事態を受けとっていた。
同時に――。

あられもない姿態にさせられていることに、堪えがたい羞恥の感情も、わきあがった。
堪えられないまま、篠井は、優之助の胸を押しのけようとした。
それでいて、大きく拡げさせられた両脚は、それなり、動かそうとはしなかった。
男を知らされたことに、徐々に、悦びが、五体をひたして来たようである。
篠井は、目蓋を閉じて、ぐったりとなった。
――どうにでもするがよい。
言葉にすれば、それであったろう。
眸子に映っている限り、対手が美しい女子であることが、篠井にとって、一種の自己欺瞞になったに相違ない。対手が、いかにも、むくつけき兇悪な面相の男であったならば、篠井の気持も、また、別のものになっていたろう。
優之助は、しずかに、篠井の上から、身をどけた。
「他言御無用――」
それだけ、云った。
篠井は、いそいで、はだけられた下肢を、衣裳で掩った。
しかし、すぐに起き上らず、袂で、顔をかくした。
優之助は、篠井をそのままにしておいて、座敷へ出た。
四つをまわっていた。
天井板がはずされ、つぎつぎと、包みが、投げ落された。
むささび吉五郎の盗みっぷりは、鮮やかであった。

優之助は、包みの重さで、金額をはかり乍ら、長持へ納めた。
篠井が、座敷へ出て来た時、その作業は、終っていた。
「お手数をかけまするが、お手前様のご才覚で、わたくしを、宿下りさせて下さいますよう——。わたくしが、大奥勤めは、不適当な女子であったことにして下されば、よろしいかと存じます」
優之助は、ぬけぬけと、たのんだことであった。

第十五話　裏切り妻

一

人通りのまれな、ひっそりとした往還には、左右の海鼠塀からさし出た樹木の影を落した秋の陽ざしのあかるさがあった。
大和田甚内の妻弓香が、その樹木の影を踏んで、しずかに歩いて来た。
憂悶で、睡れぬ夜がつづいているために、顔にも項にも肩にも、やつれが滲んでいた。
青竹の打ちつけられた旗本屋敷の門の前で、弓香は、足を停めた。
伊奈次郎右衛門の家であった。
当主の横死後、嫡子が幼少のため、処分未決定のまま、日が過ぎていた。
弓香は、潜りを通った。
玄関を避けて、勝手口にまわると、案内を乞うた。
年配の女中が出て来たので、
「大和田甚内の家内でございます。古城進八郎様のことにつきまして、是非とも、津賀様に、

お話し申したき儀がございまする」
と、告げた。
弓香が、案内されたのは、仏間であった。
真新しい位牌が、加えられ、たくさんの供物が置いてあった。
弓香は、合掌すると、良人に代って詫びた。
衣ずれの音がしたので、弓香は、仏壇の前から、しりぞいた。
津賀は、こわばった面持で、座に就いた。
二人は、十日前、桜田優之助の門前で、顔を合せ、険しい空気を持っていた。
津賀は、弓香が古城進八郎に会いに行ったのは、良人大和田甚内に命じられて、どこかへ遁走させるために相違ない、と推測したのであった。
「ご用の向きを、うけたまわりましょう」
津賀は、冷やかな語気で、促した。
「津賀さん、貴女のご主人を殺害したのは、古城進八郎様では、ありませぬ」
弓香は、云った。
「なぜ、かばいだてをなさる？　下手人が、古城殿でなくて、誰だと仰言る？」
「大和田甚内でございます」
「……？」
津賀は、眉宇をひそめて、弓香を瞶めかえした。
自分の良人を下手人呼ばわりをする弓香を、正気か、と疑わざるを得なかった。

「下手人は、わたくしの良人に相違ございませぬ」
弓香は、かさねて、明言した。
「まことに？」
「くわしく申し上げなければ、納得なさいますまいが……」
弓香は、語った。
あの日、良人は、したたかに酔って、家を出ると、竹藪を抜けて、隣りの古城進八郎の屋敷へ入って行った。しばらくすると、呶号が、あがった。自分は、はっとなって、酒乱の良人がまた狼藉を働いているのではあるまいか、と不安にかられて、行ってみた。
書院の広縁に出て来たのは、進八郎であった。甚内は来て居らぬ、と進八郎は否定した。しかし、自分の目には、沓石に、良人の草履がぬいであるのが、映った。
良人は、書院の中にいたのだ。
良人は、半刻ばかり後に、帰宅したが、あきらかに様子が変であった。また、その着物には、血汐がついていた。
良人甚内は、素面の時は、無口でおとなしいが、ひとたび酒を飲むと、別人になったように、人にからむ悪癖がある。おそらく、当日も、古城家に来訪されていた貴女の御主人に対して、無礼な雑言をあびせて、争いになったに相違ない、と思われる。
そして、ついに、殺傷沙汰をひき起したのである。
「わたくしは、数日後、良人に向ってそのことを糺し、何卒卑劣者にならぬように、といさめました。ところが、良人は、盗人たけだけしく、わたくしを打擲して、あくまで、進八

郎様を下手人にしてしまおう、といたしました」

「……」

「妻として、良人を、下手人と考えたくはございませぬ。なれど、良人が他人様に汚名をかぶせておいて、そ知らぬ顔をする人非人であることは、それ以上に、妻として堪えられぬことでございます。……わたくしが、こうして、貴女に打明けるのは、妻の道にはずれた行為かも知れませぬ。なれど、良人が人非人である限り、これは、やむを得ぬ仕儀と存じます。……津賀さん、良人が切腹することを願う妻は、やはり、人非人でありましょうか？」

そう問われて、津賀も、返辞をしかねた。

「弓香さん、このことを、組支配へお申し出になりましたか？」

「はい。……なれど、組支配では、古城進八郎自身が、下手人であると届け出て、逃亡いたした上からは、詮議しなおすのも妙なものだ、と申されて——、つまり、進八郎様が出頭され、また良人甚内も覚悟をきめて、調べの席に出て、両者が対決して、黒白をあきらかにしない以上は、どうにもならぬ由にございます。……これは、実現ののぞみは、ありませぬ」

「……」

「津賀さん、貴女だけでも、まことの下手人は、大和田甚内であることを、ご承知置き下さいませんか」

「よく、判りました」

津賀は、ふかくうなずいてから、

「で——弓香さんは、いま、どこに？」

と、訊ねた。

「子供を連れて、屋敷を出て、子供を実家に預けておいて、青山の伯父のところに、身を寄せて居ります」

「もう、大和田家へは、おもどりにはならぬお覚悟ですか？」

「はい」

不幸な女たちは、互いに、顔を見合せて、泪を滲ませた。

二

弓香にとって、津賀に納得してもらえただけでも、心の重みが、すこし軽くなった。

そっと、伊奈家を忍び出た弓香は、俯向いて、長くなった自分の影法師を、ゆっくり踏んで行き乍ら、

——良人が、いさぎよく、自裁してくれたら？

と思いつづけていた。

わが子庄太郎のために、父親が卑劣者であって欲しくはなかった。

「弓香！」

不意に、背後から、険しい声が、あびせられた。

はっと、振りかえった弓香は、そこに、凄じい形相の良人甚内が立っているのを見出して、

「貴方は――」
と、侮蔑の視線をかえした。
「弓香！　なんの目的で、伊奈家へ行った？」
甚内は、じりじりとつめ寄った。
「貴方は、わたくしのあとを尾けまわしておいでなのですか？」
「黙れっ！　わしの問いに、こたえろ！　なんの目的で、伊奈家へ行った？」
「おこたえする必要はありませぬ」
「うぬ！　次郎右衛門の家内に、下手人は自分の良人だ、と密告に参ったのだな？　そうだろう？」
「おわかれいたします」
弓香は、頭を下げておいて、歩き出そうとした。
良人が、これほど、あさましい、みにくい男であったのか、と絶望感で、心中が氷のように冷えていた。
「待てっ！」
甚内は、かっとなって、弓香の肩をつかんだ。かなり、酒を飲んで、その力をかりているようであった。
旗本屋敷から寺院につづくさびしい地域で、通行人の影はなかったが、往還上で、良人と妻が争わねばならぬあさましい光景は、弓香にとって、死ぬほどの苦痛であった。
「お止しなされませ！　あさましい！」

弓香は、甚内の手をふりはらおうとした。
「あさましいだと！　あさましいのは、おのれの方ではないか！　進八郎に惚れているために、良人を下手人にしたてて、屠ろうとするとは――そ、それが妻として為すべき振舞いか！」
「いまさら、かくしだてなど――」
弓香は、胸もとのみだれを、必死におさえて、顔をそむけた。
「おいっ！　ごまかすな！　進八郎に、惚れているなら、惚れている、と申せ！」
甚内は、呶鳴るうちに、嫉妬の炎に灼かれて、形相に朱を加えた。
弓香は、身顫いして、もう言葉を出す気がしなくなった。
「来い！」
甚内は、ひきずるようにして、連れて行こうとした。
とたんに――。
寺院の門前の石塔にぶつかって、だだっとよろめいた。
その隙に、弓香は、走り出した。
「弓香っ！　遁げるかっ！」
甚内は、われを忘れて、抜刀した。
「斬るぞ！」
呶号をあびた弓香は、
――斬られてもいい！

と、思った。

二度、三度――刃風が、背中を襲って来た。

――斬るがいい！　死んでやる！

弓香は、はじめて、良人を憎悪した。

往還が、雑木林につきあたり、右折した。

曲った地点で、弓香は、行手に人影をみとめて、

「ああっ！」

と、悲鳴をあげた。

偶然であった。

歩いて来たのは、狩野弥太郎であった。

弥太郎は、甚内夫妻とも顔見知りであった。

「大和田！」

弥太郎は、啞然として、

「なんだ、これは？」

と、眉宇をひそめた。

弓香は、弥太郎のわきをすり抜けると、雑木林ぎわに、べったり坐って、肩を喘がせた。

「亭主が、女房を成敗するのだ。他人の知ったことではない！」

甚内は、叫んだ。

「成敗？……成敗するなら、屋敷内でやったらよかろう」

「うるさい！　どけっ！」

弥太郎は、弓香をふりかえって、

「ご家内、往来で、成敗される理由がおありか？」

と、訊ねた。

弓香は、かぶりを振った。

「大和田、酒に狂っているようだな。そこいらの用水桶で、頭をひやしたらどうだ」

「狩野っ！　邪魔だてすると、貴様と果し合うぞ！」

甚内は、弥太郎に向って、青眼につけた。

「ばかげている！」

弥太郎は、呟いた。

「狩野っ！　抜けっ！」

「お主と果し合いをする理由がない」

「理由はあるっ！　邪魔だてしたではないか！」

甚内は、じりじりと間隔を詰めてきた。

三

弥太郎は、甚内がかなり腕が立つことを知っていた。

酒乱の剣は、手負いの野獣に似ている。

油断をすれば、斬られるおそれがあるので、弥太郎は、やむなく、身構えた。
間合いがきまると、甚内は、大上段にふりかぶった。
弥太郎は、わざと、すこしずつ後退してみせた。
「やあっ！」
懸声もろとも、甚内は、攻撃を放って来た。
ぱっ、と体をひらきざま、振り込んだ甚内の双手がのびきっているのを、みとめる余裕裡に、弥太郎は、峰打ちの迅業を、その頸根へ、くれた。
「うむっ！」
呻きとともに、ぐらぐらと首を振った甚内は、そのまま、地面へ崩れ込んだ。
弥太郎は、白刃を鞘に納めると、
「ご家内――」
と、弓香を呼んだ。
「どうなされる？」
弓香は、立ち上って、涙をぬぐうと、頭を下げた。
「このようなあさましいところを、お目にかけまして……」
「意識がもどれば、酔いもさめていよう。駕籠でも呼んで、つれてもどられるか？」
「いえ――」
弓香は、かぶりを振った。
「わたくしは、もう、大和田家の者ではありませぬゆえ、すててておきまする」

「……？」
「狩野様――。古城進八郎様は、いま、どこにおいでなのか、ご存じでございましょうか？」
「先頃までは、桜田優之助の許に、身をひそめている、ときいていたが……」
「お会いしたいのでございます」
弓香は、必死の眼眸をすがらせて、
「進八郎様の許へ、おつれ下さるわけに参りませぬか？」
と、ねがった。
「さがせば、居処は、判らぬでもないが……」
「是非！」
弥太郎は、やむなく気絶した甚内を、その場へすてておいて、弓香をつれて、歩き出した。

同じ頃合。
古城進八郎は、内藤新宿の宿はずれの、休み茶屋と安泊りを兼ねた小さな二階家の二階にいた。
朱引外（郊外）で、ここらあたりが、身をひそめるには、恰好であった。
新宿というところは、むかしからの宿場町であった。旅人のための遊女屋も、夥しかった。
享保年間に、一度、新宿は、とりつぶされて、野原になったことがある。

当時、四谷大番町に、四百石の直参内藤新五左衛門という人物が、屋敷をかまえていた。新宿は、この内藤家の知行地であった。

その弟に大八という遊蕩児がいた。酒癖がわるく、喧嘩好きで、土地の者にきらわれていた。

ある時、土地の信濃屋という旅籠屋（実は遊女屋）で、大八は、大あばれした挙句、破落戸どもに、半殺しに遭い、戸板にのせられて、屋敷へ帰って来た。

流石に、兄の新五左衛門は、肚に据えかねて、大八に詰め腹を切らせた。

武士道の吟味を重んじる新五左衛門は、弟大八の首を持参して、大目付松平図書頭邸へおもむき、

「斯様の次第につき、愚弟を成敗つかまつりましたが、これと申すのも、新宿という宿場が、淫猥の土地となって居るためであります。ついては、それがしが、知行をおかえしつかまつりますほどに、内藤新宿を、永代おとりつぶしにして頂きたく存じます」

と、申し出た。

願いはききとどけられ、内藤新宿の宿場は、一朝にして、野原にされてしまった。

内藤新五左衛門も、改易となって、何処かへ、姿を消した。

しかし、それから五十年後の明和九年に、宿駅は再興を許された。遊女屋、旅籠、商町がぞくぞくと立ちならび、むかしにまさる盛況を呈し、天保度に至っては、女郎の数は五百人以上とかぞえられていた。

ただ、内藤新五左衛門のことがあって、この絃歌の巷には、二刀をたばさんだ者は、一人も現われなかった。

進八郎が、探索の目をのがれて、身をひそめるには、まず、安全な土地といえた。

江戸城大奥へ忍び込んで、金を盗み出してから、三日が過ぎていた。

今日は、朝から、のんびりと、酒を飲んでいた進八郎である。

階段に、跫音がした。

姿をみせたのは、むささび吉五郎であった。

「どこか、さびしい無住寺でも、おえらびになると思って居りましたが、隠れ家をここになさいますとは、思いつかれたものでございます」

吉五郎は、笑って、云った。

進八郎は、盃を渡して、ついでやり乍ら、

「江戸の周辺には、いくらでも、身をひそめるところがあるな」

と、云った。

「へい――」

「もし、十万石の大名が、十家も盟約をむすんで、ひそかに、軍勢を寄せ、一挙に攻め込めば、江戸城を奪取することぐらい、造作もないな」

平然として、口にした。

「ご直参の貴方様が、そんなことを仰言っても、およろしいので――？」

「もう旗本ではない。盗賊だ。……それにしても、大奥の女中のへそくりは、ケチなものであったな」

大奥の長局から盗んだ金は、四百両あまりであった。
「やはり、大町人の土蔵を破るよりほかは、一攫千金とは参りませんかね」
「そうだな。……吉五郎、ひとつ、計画をたててくれぬか」
「むつかしゅうございます。大店（おおだな）というやつは、ま——申せば、金の鬼の巣でございますから……」
「江戸城はじめ、大名屋敷の金蔵が、空っけつ、となれば、大店の土蔵を破るよりしかたがないではないか」
「たしかに、その通りでございますが」
吉五郎は、首をひねった。
夜働きの達者も、進八郎に会ったおかげで、料簡（りょうけん）に変化があった。
ただの盗みではなく、異邦の土地に雄飛するための軍資金、という名分が与えられたのである。
吉五郎は、おのが力の限りをつくして、進八郎のために、金を盗み集める肚になっていた。
「いかがでございましょう。佐渡から、送られて来る金を、途中で、奪うという手段は？」
吉五郎は、ふと思いついて、云った。
「ふむ。それは、面白いな」
進八郎の双眸（そうぼう）が、光った。
「やり甲斐は、あるな」
「へい」

「但し、これをやるには、相当の犠牲者が出ることを覚悟しなければならぬ」
「てまえは、その行列を見たことはございませんが、警戒はよほど厳重なのでございましょうね？」
「まともに襲撃すれば、十人以上はあの世へ行くことになろう」
しかし、進八郎の脳裡では、
——やるか！
という決意が、成りかけていた。

第十六話　熟れた肌

一

麹町二番町の旗本屋敷では、奇妙な生活が、つづいていた。

盲目のある じ篠田主水之介と、婚家を追われた不貞の妻志乃が、ほとんど口をきくこともなく、千坪の屋敷内で、その静寂を擾す振舞いをさけての明け暮れであった。

志乃が、主水之介の食事の給仕をするようになったのは、ごく最近のことであった。

主水之介は、酒をたしなまぬので、給仕が手持ち無沙汰であった。

志乃は、黙って、膝に手をそろえて、主水之介を見まもっているばかりであったが、主水之介の方は、それをべつにわずらわしいとも思っていないようであった。

主水之介は、わざと不能者のふりをして、志乃をためして以来、一度も、その居間をおとずれたことはなかった。

あの時、志乃は、蛇の生ごろしのように生かしておかれるのに堪えがたいゆえ、いっそ殺して欲しい、と願ったことだった。

それに対して、主水之介は、

「……いつの間にやら、そなたのことが、四六時中、脳裡にあるようになって居る。……魔性の女ゆえ、無視してはおれぬようだ。このままで、ひとつ屋根の下でくらせば、あるいは、わしが、負けるかも知れぬ」

と、云い、ひとつ、どちらが勝つか、男と女のたたかいを試してみる、とつけ加えたものであった。

その男女のたたかいは、しかし、目に見えた限りでは、為されていなかった。

小石ひとつ投げられぬ、鏡のようにしずまりかえった湖面のような日々がつづいていたのである。

今日も——。

昨日と同じ一日が暮れて、志乃は、夕餉の給仕の座について、主水之介の箸をはこぶさまを、じっと、見まもっていた。

香ばしい焙じ茶を、手にした主水之介は、珍しく、口をきいた。

「そなたには、閨のもだえは、ないのか？」

「ありまする」

志乃は、ためらわずに、こたえた。

「わしが、忍んで来るのを期待する気持は——？」

「ありまする」

「もだえている時、もう濡れて居るか？」

「はい」

主水之介は、焙じ茶をもう一杯所望した。

志乃は、茶碗を渡してから、主水之介の次の言葉を待った。

しかし、主水之介は、なぜか、喋ろうとはしなかった。

志乃の方から、口をひらいた。

「いつまで、わたくしを、このまま、すてておかれまする？」

「わからぬ」

「負けたくない、とお思いでございますか？」

「わしは、いそぐことがきらいな男だ。そなたが、どれほどの魔性の所有者であるか、見とどける秋が来るのを、待って居るまでだ」

「……」

志乃は、黙って、膳部を下げていった。

それから、一刻以上も、主水之介は、昏れなずむ座敷で、動かずにいた。

縁さきに、人の気配がした。

主水之介は、立って、縁側へ出た。

沓石の前にうずくまっているのは、中間ていの男であった。

伊賀の刃心、という忍者であった。

主水之介が、十年前、八王子の千人同心の子弟の中から、特にえらび出して、伊賀の里へ遣して、忍びの術を修業させた男である。

伊賀の刃心は、今春、伊賀の里から、還って来ていた。

盲目の主水之介にとって、刃心は、おのが目であった。

「古城進八郎は、その後、如何いたした？」

主水之介は、訊ねた。

主水之介は、若い旗本たちの動静を、刃心に調べさせていた。

閣老たちの無能ぶりに愛想をつかしていた主水之介は、それだけに、若い旗本たちが、ありあまる精力を、無謀な乱行に費していることを、憂えていた。

狩野弥太郎や井部鉄之助のような有能な青年が、職もなく、小普請組で、無為にすごしていることが、主水之介には、気がかりであった。

最近になって、長崎から帰府して来た古城進八郎という青年のことも、主水之介は、懸念せざるを得なかった。

曾て、品川砲台で、オランダから購入した大砲の試し撃ちをした際、主水之介は、隊員の一人が操作をあやまったため、砲身が炸裂して、盲目になったが、隊員の方は即死であった。

古城進八郎は、その隊員の息子であった。

二

「古城進八郎殿は、伊奈次郎右衛門殿を殺害ののち、一時、桜田優之助殿のお屋敷に、身をひそめて居られましたが、先日、桜田殿をお目見女中にしたてて、大奥へ潜入し、長局から、

金子を盗み出し、いまは、内藤新宿の旅籠に、かくれて居られます」

流石は、主水之介がえらび出して、十年の修業をさせた忍者だけあって、古城進八郎が、大奥長局から、金子を掠奪したことまで、ちゃんと調べていた。

「天保倭寇党などと称して、町家へ押し込んでみたり、大奥を荒らしてみたり……、無謀もきわまることをやってのけて居る。長崎へおもむく前までは、才気はあっても、それを、おもてへ出さぬようにつとめている男であったが――」

主水之介は、呟いてから、

「刃心、いざとなったら、進八郎を助けるのだ」

「かしこまりました」

主水之介が、座敷に入ろうとすると、刃心が、呼びとめて、

「お屋敷を、うかがっている怪しい者が居ります」

と、告げた。

「どんな男だ？」

「浪人者でございます。覆面をして居りますが、片目がつぶれている模様でございます」

「そうか。すてておけ」

主水之介は、気にもかけぬ態度を示した。

志乃は、部屋を闇にして、就寝した。

文目も分たぬ暗黒に、双眸をひらいた志乃は、先刻の主水之介の言葉を、思い出していた。

――あの御仁は、なぜ、あのような質問をなされたのだろう？　わたくしを、からかわれたのであろうか？

判らなかった。

――もしかすれば、今夜あたり、忍んで行く、という暗示だったのだろうか？

もし、そうであるなら、からだをきれいにしておかなければならぬ、と志乃は、考えた。

今日は、湯に入っていなかったのである。

志乃は、起き上ると、行燈にあかりをつけておいて、そっと、部屋を出た。

湯殿は、あまり遠くないところにあった。

主水之介は、午後に入浴するならわしであった。その湯が、まだ、湯槽にのこっているはずであった。

志乃は、脱衣所で、寝衣をすて、二布を足もとに落した。

そっと、胸の隆起から腹へ、掌を撫でおろしてみた。

自分でも、まだ瑞々しい肌だと思う。腹から腰、そして腿へかけての、しっとりと脂肪ののった曲線に、すこしの崩れもなかった。

この弾力のある白い豊かな皮膚に、男の手が触れぬ日が、どれだけつづいていることだろう。

――女の盛りは、短いというのに……。

志乃は、湯殿に入った。

流し場がひろくとってあり、檜の湯槽が小さく見えるくらいであった。

湯槽の中へ手を入れてみると、かなりぬるくなっていた。
志乃は、そのぬるま湯を、玄蕃（桶）で汲むと、肩から、かけた。
つめたさが、肌にしみわたり、志乃はかえって、それが、心地よかった。
湯槽には沈まず、白い真岡の糠袋で、しずかに、からだをこすった。
片隅でまたたく百目蠟燭が、白い肢体に濃い陰翳を刷いて、流し場へ長い影法師を匍わせた。
肩から胸、それから腹部を、丹念にこすったのち、志乃は、五指を、黒い茂みの下へ、すべらせた。
ゆっくりと、洗い乍ら、志乃は、この恥部を与えた男たちを思い浮べた。
志乃は、鵜殿家に嫁いだ時、すでに、処女ではなかった。
実家に、狂人の兄がいた。その兄に、幾度か犯されていたのである。
志乃の性情が、歪んだのは、そのためであった。
良人の主馬は、不能者であった。実の兄に犯されつづけ、ようやくその魔手をのがれて、嫁いでみれば、良人は不能者であった。
志乃は、良人が不能者であると知った時、おのが人生が、のろわれているような絶望に陥ちたことであった。
すでに、狂人の兄によって、からだの燃えることを教えられていた志乃は、その一点だけを行い得ぬ良人の愛撫に、満足できなかった。
志乃は、用人の松尾嘉兵衛を誘惑し、次いで、舅を誘惑した。

——わたしは、本当にここを与えたい人には、与えることができなかった。
志乃の脳裡には、狩野弥太郎の俤が、浮んでいた。
弥太郎に、ここを与える機会は、二度あった。
一度は、舅の隠居所で、もう一度は、この屋敷で、志乃は、牀の中で、弥太郎の愛撫を受けた。
しかし、その愛撫は、乳房を吸われるところまでで、中断されたのであった。
隠居所では、舅に邪魔され、この屋敷では、主水之介に、はばまれたのであった。
——弥太郎殿のものが、ここに入って来ていたならば、わたしは、もだえ狂って、気を失っていたかも、知れない。

三

志乃は、じんわりと濡れて、海綿のように柔かくふくれて来た器の中へ、思わず、人差指を吸い込ませた。
目蓋を閉じ、俯向いて、それなり、微動もせずに、幾秒間かを、すごした。
あっ、と志乃をわれにかえらせたのは、ぎやまん戸が開く音であった。
四肢を縮めて、ふりかえった志乃は、主水之介ならぬ、覆面、着流しの浪人者が、そこに佇立するのを、見出した。
修善寺左膳に、まぎれもなかった。

「……」
「……」
左膳の隻眼が、志乃の裸身へ、食い入った。
志乃は、悲鳴もあげず、左膳が、のそりと入って来て、ぎやまん戸を閉めるのを、見まもった。
「そなた、斬られるか、肌を与えるか、いずれを、えらぶ？」
左膳は、問うた。
「斬るがよい」
志乃は、ためらわずに、こたえた。
「死にたいのか？」
「生きていても、もう、なんの希望もないゆえ、斬るがよい」
「心をいつわらずに、そう云っているのであれば、あの世へ送ってくれてもよい」
「この世に未練はない」
志乃は、冷たく云いすてた。
「そうか。やむを得ぬ。……おれは、そなたに、惚れて居る。惚れた弱味で、力ずくで手ごめにすることが、できぬ。……死をえらぶというのなら、斬ってくれる」
左膳は、白刃を抜きはなった。
——この男には、わたしを斬れぬ！
志乃は、ひややかに、薄ら笑った。

と——その折であった。
志乃は、ぎやまん戸に、人影がうつるのを、みとめた。
主水之介が、脱衣所に入って来たのだ。
瞬間——。
志乃の気持が、一変した。
「貴方は、それほど、わたくしが、欲しいのですか？」
「欲しい」
左膳は、呻くように云った。
志乃は、無言で、すっと、流し場へ、仰臥した。
——主水之介様、よくごらんなさるがよい。魔性の女が、犯されるさまを——。
志乃は、胸の裡で、呟いた。
「そなた、死ぬかわりに、肌を与えるというのか？」
左膳が、訊ねた。
「……」
志乃は、こたえなかった。
左膳は、白刃をすてた。
唇が奪われ、男の双腕に胴が抱きしめられるや、志乃は、自ら下肢をひろげ、膝を立てた。
——さあ、とくとごらんになるがよい。……今日まで、すてておいたおん身が、わるいのだ。

志乃は、一種の快感さえおぼえつつ、声のない叫びをあげていた。
志乃は、主水之介が、盲目であることを忘れていた。

四

主水之介は、自身の居間へ、ひきかえして来た。
撃たなかった短銃を、机の上に置いて、ひとつ、深呼吸をした。
もし、志乃がいささかの抵抗でも示していたならば、主水之介は、躊躇(ためらい)なく、修善寺左膳を、撃っていたであろう。
志乃は、抵抗するどころか、自らすすんで、肌を与えたのである。
――わしが、脱衣所に入った、と知って、あの女は、気持を変えたのだ。
官能の疼きに堪えられないような、激しい声を発しつづけた志乃であった。
その声が、まだ、主水之介の耳に、のこっている。
――修善寺左膳ともども、志乃も、撃ち殺してやった方が、あの女にとっては、幸せであったかも知れぬ。
主水之介は、そう思った。
「殿様――」
障子をへだてて、刃心のしのび声が、呼んだ。
「うむ――」

主水之介が、返辞をすると、
「浪人者が、志乃様をつれて、お屋敷を出て行きまする」
と、告げた。
「……」
「如何なさいます？」
「うむ――？」
主水之介は、迷った。
「浪人者を、討ちはたしましょうか？」
「いや――」
主水之介は、かぶりを振った。
「すてておけ」
「遁げるままにしておきまするので？」
刃心は、不審を語気にこめた。
「そうだ。そのまま、行かせろ」
「はい――。念のため、行先は、つきとめておきまする」
刃心は、音もなく遠ざかった。

狩野弥太郎が、訪れたのは、その夜も、丑刻（午前二時）過ぎであった。
用人に、呼ばれて、睡りからさめた主水之介は、

「弥太郎が、いま時刻、何用で参ったか、申したのか？」
と、問うた。
「ご婦人を帯同なされて居ります」
「女を――？　またか」
主水之介は、苦笑した。
志乃は、弥太郎がつれて来た女であった。
その志乃が、姿を消すと、まるで、それを待っていたように、弥太郎は、またもや、女をともなって来た、という。
「書院で待たせておけ」
主水之介は、命じたが、べつに起きようとはしなかった。
主水之介が、書院に入ったのは、夜が明けてからであった。
弥太郎も、連れの女性も、端座したまま、待っていた。
女性は、大和田甚内の妻弓香であった。
主水之介は、べつに、待たせた、とも云わずに、座に就いた。
「夜中に、おさわがせいたしました儀、ふかくおわびいたします」
弥太郎は、弓香が、人目を避けねばならぬ身である旨を、述べた。
「この女人、また、わしに、あずかってくれと申すのか？」
「ほんの数日でよろしいのですが……」
「志乃は、昨夜のうちに、姿を消したぞ」

「は――？」
「修善寺左膳と申す浪人者が、連れ去った。……女人をあずかるのは、こりたぞ」
「二、三日だけでも、おあずかり頂けますまいか。それがしが、古城進八郎をさがし出すあいだだけ――」
「進八郎に会おうとしている女人か？」
「弓香殿の希望でありますので……」
弥太郎は、その事情を述べた。
「進八郎は、伊奈次郎右衛門を殺害して居らぬ、と申すのか」
「はい。わたくしの良人大和田甚内の仕業にございます」
弓香は、こたえた。
「そなた――」
主水之介は、冷やかな語気で、
「進八郎に、惚れているのではないか？」
と、訊ねた。
「……」
弓香は、はっとなって、主水之介を視かえした。
「男に必死に惚れている女人の匂いが、この書院に、たちこめて居る」
「……」
弓香は、俯向いた。

主水之介に、はっきりと指摘された刹那、弓香は、自分の心の中にかくれていたものに、はっと気がついたのである。

良人甚内に、そう云われた時は、ばかげている、と思ったばかりであったが、いまは、主水之介の指摘を否定することは、できなかった。

第十七話　恋慕行

一

主水之介は、古城進八郎が、大和田甚内の身代りになって、自分が、伊奈次郎右衛門殺害の下手人であると組支配へ通報しておいて、逃亡したこと、それを、弓香だけがさとって、良人を責めたあげく、大和田家を出たいきさつを、くわしく、弓香の口から、きき取った。

そのあと、しばらく、主水之介は、腕組みをして、沈黙をまもった。

狩野弥太郎は、主水之介の顔を、凝視して、その返辞を待った。

ようやく、主水之介は、口をひらいた。

「そなた、進八郎に会って、どうしようというのだ？」

「はい――」

弓香は、ちょっと、ためらっていたが、

「こちらへ、おうかがいするまでは、どうして自分が、進八郎様にお会いしなければならぬのか、自身でも、はっきりとして居らなかったのでございます。……貴方様から、先程、進

八郎に惚れているのではないか、とご指摘を受けて、はじめて、自分の気持が、判りました」

と、云った。

「ふむ。……古城進八郎は、おそらく、そなたが、隣家の大和田家へ嫁いで来た時から、そなたに、惚れていたに相違あるまい」

「……」

「そなたは、進八郎から、惚れられていることに、気がつかなかったか？」

「は、はい……」

「気がついていたのではないのか？」

「いつとなく、そのようなお気持で、おいでになることは、存じ上げて居りました」

「もしかすると、進八郎が、書院番から、自らしりぞいて小普請入りして、長崎へおもむき、三年も還って来なかったのは、そなたのことが原因であったかも知れぬ」

「……」

「三年ぶりで、還って来てみたが、恋慕の情は、すこしもうすれてはいなかった。……そうでなければ、進八郎がそなたの良人の身代りになったことが、他人には、合点しがたい。そなたに惚れているからこその行為であったとすれば、納得できる。……で、そなたの方も、こういう事態にたち至ってみて、進八郎に惚れていた自分に、はっきりと気づいた、となると、これが、男女の心の微妙というものであろう。……そうではないか、弥太郎？」

主水之介は、弥太郎に同意をもとめた。

「は――たしかに！」

弥太郎は、うなずいた。

弥太郎の方は、修善寺左膳につれ去られた志乃のことを、想いやっていたのである。

「進八郎は、いま、内藤新宿の旅籠に、身をかくしている」

主水之介は、告げた。

弓香の顔が、かがやくのを、弥太郎は、ちらと、視やった。

「わたくし、これから、たずねて参ります」

「たずねて行って、そなたが、はたして、幸せが、得られるかどうか、これは、恋慕ということとは、おのずから、問題が別になる。あるいは、互いに、惚れ合っているだけで、逢わぬ方が、いっそ、よいのかも知れぬ」

「なぜでございましょう？　わたくしは、どんな艱難でも、いとわぬ覚悟をきめて居ります」

「左様――、そなたは、その覚悟であろうし、また、実際に、堪えるに相違ない。しかし、進八郎は、ちがう。あれは、男だ。しかも、いま大きな仕事を企てて居る。いま、そなたを引き受けるのは、迷惑かも知れぬ」

「足手まといになれば、わたくしは、この身をあの世へ送ることができまする」

「進八郎と、ただ一度だけでも、他人でなくなることができれば、あとはどうなってもかまわぬ、というのか？」

「はい！」

弓香は、羞恥に頬を染めつつも、はっきりとうなずいてみせた。
主水之介は、弓香を、この屋敷へひきとめることは不可能と、さとった。
「弥太郎。新宿まで、この女性を、送ってやるがよかろう」
「かしこまりました」
弥太郎自身、主水之介の言葉に賛成であったが、弓香の決意がひるがえらぬ上からは、進八郎へ渡すまでは、守護役をつとめる肚であった。

二

弥太郎と弓香は、篠田邸の裏門から、忍び出た。
お高祖頭巾をかぶった弓香は、弥太郎から、三、四歩おくれて、歩き出した。
——志乃が、このひとのような、一途で、しかも優しい心根の持主であれば、よかったのだが……。
弥太郎は、路面へ視線を落し乍ら、そう考えていた。
二人は、黙々として、歩いた。
麹町二番町から、内藤新宿までは、一筋道であった。
四谷見附を過ぎた時、弥太郎は、弓香が七、八歩もおくれているのに気づいて、足を停めた。
その瞬間——。

——尾けられているな！
その直感を持った。
弥太郎は、わざと何気ないふりで、頭をまわした。
何か思い沈んで、しぜんに、歩みをのろくしていた弓香が、はっとわれにかえって、足をはやめて、追いついて来た。
弥太郎は、弓香の背後に、旅の薬売りが、やって来るのを、みとめた。
——あいつだ！
弥太郎は、胸中で、呟いた。
べつに、怪しい気配を示しているわけでもなかったが、弥太郎は、自分のカンを確信した。
「すこし、急ぐ」
弥太郎は、弓香に、小声で云った。
「はい」
弥太郎は、尾行者がいることは、弓香に告げずに、しだいに足をはやめた。
うしろの薬売りは、依然として、同じ距離をたもって、歩いて来る。
これで、尾行者であることが、明白となった。
弥太郎は、大木戸を出て、ものの一町も往き、左右がひろびろとした畑地になるや、弓香に、
「先へ行かれい」
と、命じた。

「え？」
弓香は、不審の面持になった。
「先へ行かれるのだ！」
弥太郎からきびしい語気で命じられると、弓香は、理由が判らぬままに、前へ出た。
とたん——。
弥太郎は、身をひるがえすや、疾風を起した。
旅の薬売りは、大きく、一間を跳び退った。
「なんだ、おのれは——？」
弥太郎は、じりじりと間隔を詰めた。
「……」
対手は無言であった。
「なぜ、われわれを尾ける？　云え！」
「……」
「こたえられぬところをみると、尾行していることに、やましさをおぼえて居るのだな」
「……」
「それとも、こういう仕事を職としている男か、貴様は？」
そうあびせた刹那、弥太郎は、はっとなった。
——こいつは、公儀隠密ではあるまいか？
弥太郎自身、公儀隠密に尾けられるおぼえはなかった。

しかし、弓香は連れていた。
弓香は、古城進八郎に逢おうとしている。それと察知して、公儀隠密が、尾けているとすれば、これは、進八郎の行方をつきとめようとしていることなのだ。
——進八郎らの企てていることが、もう、閣老の耳に入っているのではあるまいか？
疑惑が、弥太郎の脳裡にひろがった。
いずれにせよ、対手が、公儀隠密ならば、問答無用である。
「斬る！」
弥太郎は、抜刀した。
薬売りは、それに合せて、背負うた荷を頭上へ投げて、弥太郎めがけて、落下させた。
凄じい炸裂音を発して、荷は、ぱあっと、白煙を噴いた。
弥太郎は、その中へ突入しようとして、双眼に激しい痛みをおぼえ、跳び退った。
泪があふれる双眼を、むりにみひらいて、うすれる白煙のむこうを、すかし視た。
もうその時は、薬売りの姿は、そこから、かき消えていた。
「狩野様！」
弓香が、馳せ寄って来た。
「彼奴、お庭番に相違ない！」
弥太郎は、告げた。
「えっ？」
「古城進八郎の行方をつきとめようとしている、と思われる」

「どうすれば、よろしいのでしょう？」
「もう、あわててもおそい。対手は、隠密だ。われわれが、大木戸を出たのを見とどけたのだ。進八郎が、新宿の旅籠にかくれている、とさとったに相違あるまい」

三

古城進八郎は、その旅籠の二階で、畳の上へ、日本の地図をひろげていた。
佐渡と江戸をむすぶ線を、いくつか、引いて、鋭く視線を落していた。
佐渡の金山から、江戸へ送られて来る純金は、その都度、道を変えている、という。
直江津まで、船ではこばれ、高田、野尻湖、善光寺、上田、小諸を経て、中仙道に入る経路。
能登をまわって、加賀に入り、金沢城下で、しばらく、前田藩に保管させておいて、美濃越えして、岐阜へ出て、東海道をはこんで来る経路。
越後から、三国峠を越えて、沼田、渋川を経て、中仙道の高崎城下へ下る経路。
それから、まれには、陸奥を抜けて、奥州街道から日光街道に入る道順をえらぶこともある、という。
「これでは、とらまえようがない」
進八郎は、独語した。
「佐渡から、御用船が出るところを、見とどけ、そいつが、どこに着くか、つきとめなければ、襲うことは、不可能だ」
いまいましげに、吐きすてた時、階段に、跫音（あしおと）がひびいた。
「旦那――」
むささび吉五郎であった。
「入れ」
進八郎は、吉五郎が、前にかしこまると、
「佐渡から送られて来る金を、途中で、奪うという手段は、むりな相談だな」
と、云った。
「と仰言（おっしゃ）いますと？」
「どの道筋を、はこんで来るか、判らぬのでは、襲いようがあるまい」
それをきくと、吉五郎は、にやりとして、
「旦那、奪うのは、御府内から十里以内の地でございますよ」
「なに?!」
「旦那は、御用金が、はこばれて来ると、勘定奉行所から、朱引外まで、出迎えがされるのを、ご存じなかったので？」
「知らなんだぞ」
「たとえば、この甲州街道ならば、府中まで出迎えられます。中仙道ならば、大宮あたりまで、出迎えられる模様でございます。つまり、勘定奉行所を、見張っていれば、御用金が、どの街道をはこばれて来るか、すぐ判る理窟でございます」

「そうか、蛇の道は蛇で、こういうことになると、お前には、敵わぬな」
進八郎は笑った。
「てまえが知っている限りでは、越後に雪が降る直前の季節がえらばれて居ります」
「すると、今月うちか」
「左様でございます」
佐渡の金山で、春から秋にかけて、掘り出し、これを江戸の金座へはこんで来るならわしなのであったろう。
「よし、やろう！」
「おやりなさいますか」
「うむ。文字通りの一攫千金だな、吉五郎」
「へい――」
「佐渡金山の一年分の黄金があれば、山田長政の雄飛ぶりを再現するに足りるぞ」
進八郎は、早速、天保倭寇党の面々へ、密書をしたためて、吉五郎に、持たせた。
「必ず当人に手渡してくれ」
「かしこまりました」
吉五郎は、去った。
狩野弥太郎が、その旅籠に入って来たのは、それから四半刻も経たぬうちであった。
内藤新宿の旅籠に、武士が宿泊することは稀なので、弥太郎は、すぐにたずねあてたのである。

「おう、弥太か」
進八郎は、思いがけない旧友の出現に、破顔した。
進八郎もまた、子竜平山行蔵の門下であり、少年の頃から、弥太郎や伊部鉄之助と、木太刀を撃ち合っていた。
「お主に会いたかったが、行きちがって、会えなかった。おれの企てていることは、すでに、耳に入れて居るだろう」
「うむ」
「大店へ押し込んだり、大奥の長局から盗み出したり、軍資金づくりに、苦労して居る。……お主も、倭寇党に入ってくれるな？」
「志は、判るが……」
「賛成しかねる、というのか？」
「孤独ですごすことに馴れているので、徒党を組むことに、抵抗をおぼえる」
「江戸で虫のように地面を匍いまわって生きるか、大きくはばたいて、海の上を翔けるか――どちらがいい、弥太？」
「その相談は、後日にしたい。それよりも、お主にどうしても逢いたいという女人をつれて来た」
「ふん――？」
「大和田甚内の妻女だ」
「弓香さんを、連れて来たというのか？」

進八郎は、眉宇をひそめた。

四

「お主は、あのひとに、惚れているのだろう？」
弥太郎は、じっと、進八郎を瞶めた。
「うむ。惚れている」
進八郎は、率直にみとめた。
「あのひとの方も、自分が古城進八郎に惚れていることを、知ったようだ」
「……」
「良人をすて、子をすてて、お主に、逢いに来たのだ。……一度だけ、お主に抱かれれば、あとは、どうなっても——死んでもいい、と覚悟している」
「……」
「どうする？」
進八郎は、ちょっと考えていたが、
「階下で待たせているのか？」
「いや、半里ばかりさきの、わたしの知りあいの家に——郷士だが——あずけてある」
「どうしてだ？」
「ともなって来る途中、公儀隠密らしい男に尾行された。お主の行方を探索している奴と看

た。……お主が、この内藤新宿にひそんでいることは、おそらく、察知したろう」
「まずいな」
「まずい。お主の企てているところは、評定所に、きこえて居るのかも知れぬ。……ともあれ、この旅籠からは、すぐに出ることだ」
「五尺の身の置きどころなしか」
進八郎は、苦笑した。
「大和田の妻女に、逢ってくれ」
「……」
「その郷士の家なら、二、三日は、泊めてくれる。そのあいだに、思案すればよかろう」
「壮図を前にして、恋におぼれる、というのは、どうかな」
「それも、人生だろう」
「では、逢うことにするか」
進八郎は、腰を上げた。
「ちょっと、待て」
弥太郎は、出窓の障子を、開けて、往還をうかがった。
虚無僧の行列が、しずしずと入って来るのを、彼方にみとめて、
「おい、あれは、どうだ？」
と、進八郎に、問うた。
「怪しいな」

進八郎は、弥太郎と目を合せた。
「ここは、わたしが、引き受ける。お主は、裏手から、ぬけ出して、奔れ」
弥太郎は、弓香をあずけた郷士の家の在処を、教えた。
「稲荷神社のむこうに、松だけの林にかこまれているから、すぐ判る」
「お主、一人で、大丈夫か？」
「わたしは、まだ、お主の党に入っては居らぬ。むこうが斬ろうとしなければ、こっちから、しかけることはせぬ」
「弥太、恩にきる」
進八郎は、頭を下げると、廊下へ出た。
裏窓から、風呂場の屋根へ跳び、そこから、裏手の雑草地へ身をおどらせた。
弥太郎は、出窓の障子の隙間から、虚無僧の一団が、この旅籠の前で、横列になって、立ちどまるのを、見下した。
——十人か。
かぞえて、
——襲って来たら、生きられぬな。
と、自分に云った。
べつに、犬死とも思わなかった。
われ乍ら、意外におちついている。
生きているのが面倒くさくなっているわけではなかった。どうしても生きのびなければならぬ理由がないだけのことであった。

弥太郎は、虚無僧の一人が、店の中へ入って来るのを見とどけておいて、床柱を背にして、坐った。
やがて——。
階段をのぼって来る跫音が、きこえた。
「お客様でございます」
番頭の声がした。
返辞をせずにいると、障子が開けられた。
弥太郎は、目蓋を閉じて、見ようとしなかった。
「古城進八郎殿は、何処に？」
かわいた声音で、訊ねかけて来た。
「知らぬ」
弥太郎は、にべもなくこたえた。
「まこと、ご存じないのですか？」
「知らぬ」
「失礼いたした」
意外にも、おとなしく、虚無僧は、出て行った。
ぱっと双眼をひらいた弥太郎は、対手がたがおとなしくひきさがったことに、かえって、不安をおぼえた。

第十八話　契　る

一

「いかん！」

弥太郎は、裏窓からのぞいて、自分の顔面が一変するのをおぼえた。

十人の虚無僧が、一斉に、裏手へ奔駆するのをみとめたのである。

公儀隠密たちは、その部屋に、狩野弥太郎しかいない、と知るや、古城進八郎が、裏手へ遁れた、と看破したに相違ない。

弥太郎は、自分が弓香を、知己の郷士の家へ預けるのを、別の尾行者に見とどけられた、と直感した。

進八郎は、その家へ行ったのである。

公儀隠密たちは、それをさとったに相違ない。

弥太郎は、思慮をめぐらすいとまもなく、進八郎がそうしたように裏窓から風呂場の屋根へ跳び、そこから、裏手の雑草地へ、身をおどらせると、

「待てっ！」

と、叫んだ。

虚無僧団は、弥太郎を振り向きもせず、疾駆して行く。

――行かせるか！

弥太郎は、抜刀した。

すると、それを待っていたごとく、三人が、ぱっと踵をまわして、深編笠をぬぎすてると同時に、白刃を手にした。

いずれも、左手持ちで、切先をまっすぐに突き出し、右手の方は懐中にかくした。

この変形の構えは、無気味であった。

弥太郎は、猛然と斬り込むことの無謀を知りつつも、七人の虚無僧が、みるみる遠ざかって行くのを視て、そこに足を釘づけていることに堪えられなかった。

「おおっ！　りゃあっ！」

凄じい懸声もろとも、五体を大地へたたきつけるようにころがしたのは、咄嗟の策であった。

弥太郎がころぶのと、三人の敵が、懐中から手裏剣らしいものを抜きとって、投げるのが、同時であった。

弥太郎の策は、成功した。

はね立ちざまに、一人の胴を薙ぎ、薙いだその一閃で、もう一人の突きを、払った。

あとの一人が、跳び退るのを、ちらと視野の片隅にとらえつつ、弥太郎は、七人を追って、

疾駆しはじめた。

三人のうち、一人だけを斬っておいて、虚無僧団を追ったのは、やはり、無謀であった。つづけさまに、二本の手裏剣が、背中を襲って来た。

その一本が、肩に刺さった。

「くそっ！」

弥太郎は、さらに手裏剣が投げられるのを意識しつつも、向きなおって、二人と闘う余裕はなかった。

さいわいに、雑木林が深くなったので、その立木を後楯にする走法をとり乍ら、疾駆しつづけた。

しかし――。

林をくぐり抜けた地点で、弥太郎は、全身に急速にまわった麻痺感で、上半身をぐらぐらとゆれさせ、膝がしらから力が抜けた。

肩に刺さった手裏剣には、毒が塗られてあったのである。

弥太郎は、がくっと膝を折ると、無念を、叫びにした。

「進八郎！　逃げろ！」

せめて、その声を、進八郎の耳に、とどかせたかった。

弥太郎は、視野を失って、闇に包まれると、その場へ、昏倒した。

二

その時、進八郎は、かなり立派な構えの郷士の屋敷に、到着していた。

門前に、二十歳あまりの、意志の強そうなひきしまった風貌の青年が、待っていて、

「こちらへ――」

と、母屋のわきから、土蔵へ案内した。

「外から錠をおろします」

「忝じけない」

厚い扉が閉められると、内部は一瞬、暗闇になった。

それに目が馴れて来た時、上から、

「進八郎様――」

弓香の声が、呼んだ。

進八郎は、階段をのぼった。

二階は、畳敷きになっていた。

弓香は、具足櫃の前に、坐っていた。鉄格子の高窓から入る明りの中で、その姿は、美しいものに、進八郎の目に映った。

「ご迷惑と存じましたが……」

弓香は、両手をつかえた。

「貴女に、このような勇気があるとは知らなかった」
進八郎は、云った。
「おゆるし下さいませ」
「兇事によって、お互いの心がふれ合うことになったのは、因果というほかはない」
「はい」
「貴女は、良人も子供もすてて、ここへ来たのか？」
「はい」
「あとは、どうなってもかまわぬ、というのだな？」
「はい！」
進八郎は、覚悟をきめた人妻の姿を、じっと、見下した。
その折、遠くを、疾駆して来る跫音が、ひびいて来るような気がした。
進八郎は、具足櫃を二つ重ねにすると、その上にあがって、高窓から外をのぞいてみた。
幾個かの虚無僧姿が、散開して、この屋敷へ迫って来るのが、みとめられた。
進八郎は、畳へとび降りると、
「追手が来た」
と、告げた。
弓香は、不安と困惑と、恋慕と謝罪をないまぜた眼眸を、進八郎にすがらせた。
「追手は、公儀隠密どもだ。遁れるすべはない。……どうやら、ここが、死場所となったらしい」

「進八郎様！」
「そうときまったら、じたばたしても、はじまらぬ」
「ああ！　わたくしが、たずねて参りましたために、貴方様を――」
「愚痴は無用。それよりも、弓香殿、この危機のさなかに、ひとつ、契るか」
進八郎は、微笑して、云った。
「えっ？」
「貴女が、せっかく、慕って来てくれたのだ。最初で最後の契りをむすぶのも、わるくない」
「……」
「扉を破られるまでには、時間がある。……他人のままで、死ぬことはない」
「……」
弓香は、喘いだ。
進八郎は、すっと寄ると、弓香を抱いた。
「わしは、貴女が、大和田家へ嫁いで来た時から、好きになった」
「ああ……」
「貴女を忘れるために、わしは、長崎へ行った。しかし、忘れられなかった」
「進八郎様！」
「好きなのだ！……生れてはじめて、一人の女性を、死ぬほど、好きになったのだ！」
「わ、わたくしも――」

進八郎は、弓香の唇へ、口を重ねた。
弓香の細腕は、進八郎の頸へまわされた。
進八郎は、弓香の唇をむさぼり乍ら、一人の子の母にしては、その肢体がなんとなく稚いのを感じた。
この一瞬の悦楽のために、良人によって成熟させられることを、こばんで来たのであろうか。
良人の愛撫で、一度も燃えなかったからだを、いま、はじめて、もの狂わせようとしているのであろうか。
進八郎は、徐々に、弓香を畳の上へ倒し、その上へ掩いかぶさった。
唇から、頬へ、頬から項へ、項から耳朶へ、耳朶からさらに項へ——進八郎の口は、せわしく移った。
弓香は、男の舌が、耳朶の中へ入って来た瞬間、抑えきれぬ官能の戦慄に、声をたてた。
ひとたび、悦楽の声をたてると、もう弓香は、羞恥を忘れた。
衣裳の前が、男の手で剝がされるのに応えて、白い下肢を拡げた。
進八郎は、その下肢にも、稚さがのこっているのをたしかめようと、片手をすべらせた。
たしかに、腿の線は繊細で、薄い肉は軽かった。
男を受け入れようとする秘部に、おののきがあるようであった。
進八郎は、おのが下腹を、弓香の下腹へ、密着させると、両の掌で、頬をはさみ、
「はじめて、女になるのだ、弓香！」

と、ささやいた。
目蓋を閉じた弓香は、顫える唇から、小さな呻きを、処女のように優しいひびきで、もらした。
すでに、土蔵の外は、追手がたで包囲された気配があった。
しかし、その気配は、進八郎に対して、ひとつの刺激を与える効果をつとめるばかりであった。
「弓香！　女になれ！」
「あ——ああ！」
男の力が、徐々に、女の体内へ、押し入る。
押し入る力がふくれ、弓香の下半身は、完全に、その力に占められた。
——このまま、死にたい！
弓香は、喘ぎつつ、思った。
土蔵の扉の錠前が、壊される音が、高くひびいて来た。
「弓香！」
「……は、はい！」
「女になったのだぞ！」
「はい」
唇と唇が、狂おしく、もとめ合った。
男の力は、さらに、女の体内で、大きくふくれ、かたくなった。

——本当に、このまま、死ぬことができたら……。
弓香は、気遠くなるような感動の中で、願った。

三

——面妖しいな。
意識をとりもどした弥太郎が、最初に感じたのは、その不審であった。
どこかの屋内に、自分が寝かされているのであった。
自分は、たしか、雑木林を抜け出た地点で、昏倒した。
いつの間にか、どこかの屋内に、はこばれている。
——捕虜にされたのか？
と、四肢を動かしてみたが、べつに、そうでもないらしく、手足は自由であった。
毒はなお体内を巡っているとみえて、目蓋をひらくのも、億劫であった。
ようやく——。
目蓋をひらいてみた。
物置小屋らしかった。農耕道具やら、薪やら、飼葉桶やらが置かれてあり、自分のからだは、莚の上へ寝かされていた。
そっと、片手を、肩の傷へはこんでみると、手当がしてある。
——誰かが、救助してくれた。

あの地点で、近くに味方はいなかったはずなのだが、とけげんに思い乍ら、しばらくは、そのまま、じっとしていることにした。
——進八郎と大和田の妻女は、どうなったろう？
男女が折り重なって斃れた光景が、想像された。
——やはり、主水之介殿の申された通り、二人は、逢わない方がよかったのだ。
弥太郎は、弓香を、連れて来たことを、悔いた。
——わざわざ、二人を死なせるために、おれは、働いたようなものだ。
それにしても、自分だけは、どうして、生きのこったのか？
弥太郎は、薄くらがりの中で、双眼をひらいて、まばたきもせずに、じっとしていた。
と——。
戸が開かれた。
中間ていの男が、すっと入って来た。
「目がさめられましたな」
「お主、どなたか？」
「名もない男でござる」
「身共を救ってくれたのは、理由がある筈だ」
「いえ、ただ、なんとなく——」
「……」
対手がこたえぬ以上、こちらから、しいて問い詰めることもない、と弥太郎は、口をつぐ

んだ。
「古城進八郎様と、大和田様の奥方も、無事でござるゆえ、ご安心を――」
男は、云った。
「あの二人も、お主が、救ってくれた、というのか？」
「左様でござる」
「あれだけの多勢のお庭番が、攻めて来た中を、よく救えたものだ」
「それがしの智慧ではなく、お二人の幸運でありました」
「進八郎と大和田の妻女は、あの家の土蔵へかくれた筈だが、お主、どうやって、土蔵から、助け出した？」
「いえ、まだ、ご両人は、土蔵内にひそんで居られます」
「……？」
「あの土蔵は、ただの土蔵ではなく、壁が二重になり、壁と壁のあいだに、人がかくれることのできる隙間が、設けてあります」
「そうか、成程！」
「お庭番衆は、お二人が、土蔵から脱出して、どこかへ奔った、と思って、四方へ散って、追跡いたしました。お二人は、土蔵内で、ゆっくりなされて居ることでござる」
「お主！」
弥太郎は、むっくり起き上って、男を、見据えた。
「忍び衆だな」

「……」
「もしや、篠田主水之介殿に使われている忍び衆ではないのか？」
伊賀の刃心は、そうはっきりといいあてられると、みとめざるを得なかった。
「べつだん、主人より、貴方様がたが、危機に陥ちたならば、救助するように命じられていたわけではござらぬが……」
「忝じけなかった」
弥太郎は、あらためて、礼をのべた。
「ところで、貴方様は、志乃様というおひとが、修善寺左膳と申す浪人者に、連れ去られたのを、ご存じでござるか？」
「篠田殿から、うかがった」
「それがしが、修善寺左膳の住居を、つきとめておきました」
「……」
「志乃様を、あのまま、すてておかれますか？」
「……」
弥太郎は、こたえなかった。
――あの浪人者の玩弄物になってしまった女を、いまさら、とりもどしてみたところで、どうなる？
その気持があった。
しかし、一方では、もう一度、志乃に逢いたい、という心も動いていた。

四

恰度、その時刻——。

浅草馬道の、俗になめくじ長屋と称ばれている、最下等の裏店の一軒で、志乃は、まさしく、修善寺左膳の玩弄物になっていた。

敷具の上に、緋の長襦袢一枚になった志乃は、仰臥して、左膳のなすままに、まかせていた。

左膳は、敷具の裾にうずくまって、志乃の片足を、捧げるように持って、その指を、しゃぶりつづけていた。

しゃぶらせるにまかせて、天井へうつろな眸子を投げていた志乃は、いつまでも、それを止めようとせぬ左膳へ、視線を移した。

「そんなに、足の指が、おいしいのですか？」

「う、うむ」

「もう、いい加減で、止めて下さい」

「う、うむ——」

左膳は、脛から腿へ、となめあげはじめた。

「くすぐったい！」

不意に、志乃は、邪慳な声をあげて、ぱっと、左膳の顔を蹴った。

蹴られた左膳の顔は、完全な痴呆の色をうかべていた。

長襦袢の裾が散って、あらわになった下肢が、わざと拡げられたままになっているのを、左膳は、茫然と、見まもって、まばたきもせぬ。

志乃は、いそいで、前をかくして、起き上ろうとした。

すると、左膳は、のろのろと、その上へ、かぶさって来た。

「いや！」

志乃は、激しく、左膳の胸を突いた。

「たのむ！」

「いや！　いや！　真昼は、いや！」

「た、たのむ！」

無理矢理に抱きすくめて来る左膳に対して、志乃は、憎悪を燃やすや、その頤へ嚙みついた。

左膳は、無言だった。

志乃は、肉を食いちぎらんばかりに、歯へ力をこめた。

一瞬——。

左膳は、おそろしい勢いで、志乃の上から、とび起きた。

志乃は、左膳が、差料を摑むのを見て、自分が斬られるものと思って、ひいっ、と悲鳴をあげた。

左膳は、抜く手も見せぬ迅業で、うしろの壁を、貫いた。

げえっ、という悲鳴が、壁のむこうで、ほとばしった。

隣りは、駕籠舁きが住んでいたが、壁の破れ孔から、こっそり、ぬすみのぞきをしていたのである。

左膳の迅業は、破れ孔にあてた駕籠舁きの片目を、刺した。

顔面を血まみれにして、ころげまわる隣家の住民に対して、左膳は、冷やかな声をあびせた。

「駕籠舁き、片目だけで許されたのを、有難いと思え。貴様から、長屋の者どもへ、つたえておけ。こん後、この家を覗く奴は、一人のこらず、片目にされるとな」

いままで、痴愚となって、志乃にまつわりついていた人間と、とうてい同一人とは思われぬ、鬼気迫った態度であった。

志乃は、恐怖で、全身がわなないた。

第十九話　権　謀

一

きわめて質素な茶亭であった。

桜田優之助は、その茶亭に端座して、この屋敷のあるじが現われるのを、待っていた。

――当世とぶ鳥もおとすほどの権勢を誇っている遠藤但馬守としては、このたたずまいは、あまりにも、みすぼらしい。

優之助は、不審の面持でいる。

遠藤但馬守胤統は、老中水野越前守忠邦が、天保の改革に失敗した直後、若年寄となった大名であった。

利け者として、すでに、その評判は、若年寄になる以前から、ひびいていた。

優之助は、正門から、まっすぐに、庭を横切って、この茶亭へ案内されたのであったが、二千坪ばかりの平庭には、白砂が敷きつめてあるだけで、樹木一本、石ひとつ置いてなかった。

篝目のつけられた、目の痛くなるような白一色の平庭は、それだけで、見事なものであったが、これは、主人の趣味というよりも、庭にかかる費用を極端に節約しているものと受けとれた。

大名の経済生活が、非常に苦しいものになっている時世とはいえ、若年寄ともなれば、知行地、蔵入地の収益の数倍の実入りがあるのが、常識であった。

幕府の制度は、老中が、将軍家政治の最頂点に就き、その老中に、若年寄が、次ぐ。

老中は、徳川譜代大名のうち、十万石以下の大名がえらばれた。徳川家政策として、権力を少数の者に与えぬようにしくんであった。

したがって、外様大名は石高が多く、その代り遠隔の地に在り、また、幕府の閣老にはなれなかった。譜代大名でも、十万石以上の大名となると、要衝の地を与えられているが、決して、老中職に就くことは、叶わなかった。

時として、酒井とか井伊とか、十万石以上の譜代大名が、幕閣入りすることがあったが、これは、老中の上の大老になるためであった。

大老は、いつの時代でも存在せず、むしろ、空席の時の方が多かった。

十万石以下の小大名が老中になるところに、徳川幕府制度の巧妙さがあらわれていた。

老中ともなれば、その権威は非常なもので、その往来に対して、すべての大名が、道をゆずった。

老中は、前田とか島津など、巨大な領地を持った大大名に向っても、

「その方」

と、呼びかけて、命令の権限を持っている。

徳川御三家――尾張、紀伊、水戸の当主からも、さらに会釈を受けた。

老中は、政務の殆どすべてを統裁し、禁中、公卿、門跡、大名などに関する大事の奉書連判をはじめとし、天領の租税、鋳貨から、寺社の建立まで、認可拒否の権限を持っていた。

五人あるいは六人が、定員で、月番の老中が、用部屋で、執務した。

若年寄は、老中に次いで要職で、三人乃至五人がえらばれた。ふつう五万石程度の、城を持たぬ小大名であったが、ひとたび若年寄となると、一挙に権力を有し、旗本に関する一切の統轄、官工、医員に関する事項、定まった普請など、さらに、勝手方・廐・数寄屋・猿楽など含む年中行事の監理もした。

当然、老中・若年寄には、諸方からの進物が、ひきもきらぬ筈であった。

桜田優之助は、はじめて、若年寄に呼び出されて（小普請組の旗本が、若年寄から、個人的に呼び出されるのも例外であったが）その屋敷へ来てみて、あまりの質素ぶりに、いささか、あきれたことである。

二

露地に跫音が、ひびいた。

優之助は、まだ、若年寄の顔など、見たことがなかったので、すこし緊張した。

入って来たのは、あばただらけの奇妙な馬面の、長身の人物であった。

「やあ、足労をかけた」
遠藤但馬守は、きわめて、気がるな態度で、席に就くと、
「成程――、噂にたがわず、お主、絶世の美男子だの」
と、云った。
「おそれ入りまする」
優之助は、頭を下げた。
「その美貌ならば、やすやすと、女に化けられるの」
「おからかいあそばす――」
「なんの、からかっては居らぬ。本当のことを申して居る」
但馬守は、かなり気ぜわしい手つきで、点前をした。
優之助が、一服喫するのを待ってから、但馬守は、云った。
「先般、大奥に、本石町の井筒屋の世話で、五百石旗本の娘が一人、お目見に上ったそうだが、たった一日で、奉公不得手と申して、宿下りしてしまったそうな」
「……」
「その娘、どうやら、ただの娘ではなかったらしい」
「……」
「おぼえがあるであろうな、桜田優之助」
但馬守は、じっと、優之助を、見据えた。
「は――、そう仰せられましても……」

「同じ日、長局のあちらこちらの部屋から、老女、中臈らのへそくりがなくなった由。その娘が、盗み去ったものと思われる。あまつさえ、中年寄の篠井と申す女中が、その娘に、犯された形跡がある」
「……」
「娘のぶんざいで、男を知らぬ四十女を犯したとは、あっぱれではないか。……わしは、宿下りして来た篠井を、つかまえて、白状させてみた。篠井は、その日以来、うつけ状態に相成って居る。娘に化けたその男が、恋しゅうて、恋しゅうて、片刻も忘れられなくなっている模様だ。ふびんとみてやるには、あまりにも婆あすぎる。……そやつ、罪なことをしたものではないか」
但馬守に、云いまくられて、優之助は、
――ままよ！　どうにでもなれ！
と、覚悟をきめた。
すると、但馬守の方は、優之助の表情の微妙な変化を、鋭く看破って、
「桜田優之助――、わしは、べつに、お主の罪を問うために、ここへ呼びつけたのではない。安心してもらおう」
と、云った。
「わたくしを、なにか、役立たせようと、仰せられますか？」
優之助は、内心ほっとして、訊ねた。
「うむ」

但馬守は、うなずいて、
「お主が、大奥でやってのけた行為を、もう一度、やってもらいたい」
「は――？」
優之助は、いささか、あきれて、但馬守のあばた面を、見かえした。
「やってくれるかどうか、その返答をきいて、仔細を打明ける」
但馬守は、云った。
「女性を犯すばかりではなく、金を盗むのでございますか？」
「いや、金ではなく、物を盗んでもらいたい」
「物、と申しますと？」
「南蛮渡来の珍奇の品だな」
「はあ……」
「どうだな、返答は――？」
「大奥での行為を、罪を問わぬ、と仰せられます上からは、わたくしの返辞は、きまって居ります」
「では、たのまれてくれるか」
「承知つかまつりました」
「堀田摂津守正衡――わしと同じ年に、若年寄に相成った大名だ」
「……」
「摂津守には、一人娘が居る。当年三十二歳。無類の醜女だ。そのために、嫁に行きそこね

た。その娘を、お主に抱いてもらおう」
「……」
「側女中として、奉公に上って、抱くのだ。……どうやら、田鶴というその娘、嫁に行きそこねて、いささか、性情が狂って、新参の側女中を、男代りにしている模様だ。それを、こちらは、利用する。……無類の醜女に、はじめて男の味を知らせてくれる。無我夢中に相成ろう。……三日間でよい。無我夢中にさせた挙句、父親の摂津守が、嫁かず後家のふびんさに、さまざまの品を与えている中から、お主が、これは、と思うしろものを、二つ三つ盗って来る。とうてい、普通の手段では手に入らぬ南蛮渡来の珍奇の品が、その部屋には、ごろごろしている筈だ」
そう云って、但馬守は、にやりとしてみせた。

三

若年寄遠藤但馬守邸を出たその足で、優之助は、まっすぐに、室町三丁目へ行った。
「色や」
ちょっと変った店名の、間口二間の小綺麗な袋物屋が、むささび吉五郎の住居であった。
「あるじは、在宅かえ？」
小僧に訊くと、今朝から用足しに出かけている、という。
「二階で、待たせてもらおう」

優之助は、さっさと、上って行った。

八畳一間の二階であった。

女の部屋ではないか、と疑いたくなるよそおいがされていた。鏡台、三味線、浮世絵をちらした枕屏風、衣桁など、やもめぐらしにふさわしくない品が、配置されて、なんとなく、なまめかしい風情であった。

——あの男が、こんな部屋に住んでいるとは？

優之助は、小首をかしげ乍ら、壁から三味線を、とりおろした。

つまびきはじめた折、不意に、床の間の壁が、小さな軋り音をひびかせて、動いた。

はっ、となって、視線を移すと、壁は、一廻転して、女を一人、押し出して来た。

水髪の美しい、小股のきれあがった年増が、

「あら、吉っつぁんじゃなかったのかえ」

と、狼狽の色を、切長の眸子にうかべた。

「あいにくだった。……お前、吉五郎の情婦か？」

優之助は、微笑し乍ら、問うた。

「隣りに住んでいる莫連でございます。……殿様は、どなたか、わかりますよ。桜田優之助様——」

「お前は？」

「小まきと申します。お見知りおきを——」

吉五郎は、壁ひとつで区切られた隣家に、この女を住まわせ、二階で自由に逢えるような

仕掛けをつくっているのであった。

「お前も、夜働きの手つだいをするのか？」

「いえ、とんでもございませぬ。……あたしは、ずぶかたぎで、吉っつぁんの本業にはらはらして居りますのです」

優之助は、小まきの物腰を眺めていて、ふと直感が働いた。

「お前は、武家奉公をしたことはないか？」

「おわかりでございますか？」

「あたったか？」

「本郷の前田様のお屋敷に、三年ばかり、奉公に上って居りました」

「そうか」

「恥を申し上げます。貧乏御家人の娘で、金にいやしい性根から、お屋敷で、盗みを働いているところを、忍び込んだ吉っつぁんに、天井裏から、のぞかれて……それが、縁になり、こうした囲い身になりました」

「面白い」

「え——面白い、と仰言いますと」

「お前のような女が、恰度必要だったのだ。……手つだってもらいたい」

「どんなお仕事でございましょう？」

「吉五郎が、戻って来てからのことにしよう」

小まきが、自分の家から、酒と肴をはこんで来た時、吉五郎は、帰宅した。

「あっしの女を、呼びつけて、一杯おやんなさるとは、殿様も、ぬけ目がありませんねえ」
吉五郎は、笑った。
「いや、小まきの方が、勝手に押しかけて来たのだ。……相談がある、吉五郎」
「へい。あっしの方も、申し上げたいことがございます」
優之助は、若年寄遠藤但馬守からたのまれた仕事を、話した。
「へえ。大奥の一件が、ばれましたかい」
吉五郎は、腕を組んだ。
「どういうものでございましょうね、その仕事は？」
「承諾した上からは、やってのけねばなるまい」
「遠藤但馬守ってえ御仁は、敵にまわすとおそろしい、と噂にはきいて居りますが……、うっかり、その飼い犬におなりなさると、次から次へと、仕事をおしつけられるのじゃござんすまいか？」
「いや、一度だけ、とことわって来た。……但馬守は、同輩の堀田摂津守を、若年寄の席から蹴落すこんたんとみえた。……想像するところ、堀田摂津守は、オランダ商館から将軍家へ献上の品を、途中で、猫ばばしているらしい。但馬守は、その証拠を、つかんで、摂津守を、蹴落そうというわけじゃな。……油断も隙もならぬ、おそろしい世の中だわえ」
「全く――」
「ところで、お前の話は、なんだえ？」
「古城進八郎様が、新しい資金づくりを、なさろうというわけなんで――」

「どのような？」
「佐渡からはこばれて来る金を、途中で、こっちに頂戴するという大それた計画でございます」
「それは――たしかに、大それた掠奪行だが、やりそこなったら、こっちは、全滅になるおそれがあるぞえ」
「男は度胸――古城様は、ほぞをきめて居られます」
「吉五郎」
優之助は、微笑すると、
「その計画、お前が思いついて、古城をそそのかしたのではないかえ？」
と、云いあてた。
吉五郎は、頭をかいた。
「へえ、その……、いっそ大金をつかむなら、と思いまして――」
「夜働きとしては、佐渡から送られる金を、横奪りする、という夢を描くのは、人情であろう。……しだいに、忙しゅうなって来たわえ」

四

伊賀の刃心が、狩野弥太郎を駕籠にのせて、篠田主水之介邸へ、戻って来たのは、同じ日の宵であった。

主水之介は、刃心から、内藤新宿に於ける公儀隠密団との争闘をききとると、
「進八郎も、追い詰められたの」
と、呟いた。
刃心は、進八郎が、佐渡の金山から送られて来る金を掠奪する計画をたてている旨を、告げた。
「たわけた企てを！」
主水之介は、吐きすてた。
「商家へ押し込むのや、大奥の長局から女中の貯えた金を盗るのとは、わけがちがう。無謀もはなはだしい。……しかし、こう追い詰められては、実行は不可能であろう」
主水之介は、立って、廊下に出ると、弥太郎が休息している部屋へ、足を向けた。
弥太郎の五体からは、まだ毒は消えて居らず、床柱に凭りかかっているのが、やっとであった。
「弥太郎、ひどい目に遭ったそうだな」
主水之介が前に坐ると、弥太郎は、頭を下げて、
「面目次第もありませぬ」
「お主も、これで、白昼を大手を振って歩けぬ身となった」
「いや、それがし自身、べつに罪を蒙ることはして居りませんから……」
「暗殺をおそれぬ、と申したいのか」
「はあ――？」

「お庭番を指揮して居る目付が、お主を、このまま、すてておく筈はない。……明日からは、必ず、身辺に、刺客が、つきまとって来るぞ」
「覚悟いたします」
「江戸から脱出したら、どうだ？」
「江戸以外の土地を、それがしは、知りませぬ」
「わしの知行地が、木曾にある。そこで、ほとぼりのさめるまで、のんびりしていたら、どうか？」
主水之介は、すすめた。
弥太郎は、黙って、顔を伏せている。
「そうしろ、弥太郎」
「……」
「いやか？」
弥太郎は、顔を擡げて、主水之介を視た。
「それがしは、古城進八郎の壮図に、だんだん、魅力をおぼえて来ました」
「……」
「公儀の軍艦を奪って、八幡船をしたてて、異邦の土地を占拠する壮図は、一般の人々からは、狂人沙汰と受けとられましょう。それがしも、その話をきいた時には、そう思いました。……しかし、こうして、公儀隠密方と争っているうちに、進八郎のは、決して、夢想ではない、と思うようになりました」

「たしかに、夢想ではない。あっぱれな壮図といえる」
「それならば……」
「待て、弥太郎。……海賊となって、異邦へ攻め入るには、奇略縦横の大将の指揮を必要とする。古城進八郎は、大将の器ではない」
「……」
弥太郎は、そう云われると、沈黙せざるを得なかった。
「進八郎は、軍師としても、まだ器の足らぬ小人物だ。一軍を率いるには、それだけの大きさをそなえた人物でなければならぬ。……見渡したところ、お主らの仲間に、それだけの器量を持った男が、居るか？」
「……」
「居るまい。……とすれば、これは、画餅におわる」
「篠田様！」
弥太郎は、云った。
「貴方様が、総指揮を、とって下されば――」
「ははは……」
主水之介は、笑い声をたてた。
「この盲に、大将になれと申すのか。莫迦も、やすみやすみに申せ。わしにできるは、失敗するとみすみす判っている企てを、事前に阻止することだけだ」

（上巻・了）

集英社文庫　目録（日本文学）

司馬遼太郎・編　長城とシルクロードと
芝木好子　面影
芝木好子　巴里の門
芝木好子　女の橋
芝木好子　幻華
芝木好子　青磁砧
芝木好子　女の肖像
芝木好子　女の庭
芝木好子　冬の椿
芝木好子　黄色い皇帝
芝木好子　夜の鶴
柴田錬三郎　英雄・生きるべきか死すべきか（上中下）
柴田錬三郎　度胸時代
柴田錬三郎　生死の門
柴田錬三郎　大将
柴田錬三郎　図々しい奴

柴田錬三郎　地獄の館
柴田錬三郎　曲者時代
柴田錬三郎　乱世流転記
柴田錬三郎　貧乏同心御用帳
柴田錬三郎　江戸っ子侍（上）（下）
柴田錬三郎　遊太郎巷談
柴田錬三郎　生きざま
柴田錬三郎　おらんだ左近
柴田錬三郎　うろつき夜太（上）（下）
柴田錬三郎　花の十郎太
柴田錬三郎　毒婦伝奇
柴田錬三郎　日本男子物語
柴田錬三郎　若くて、悪くて、凄いこいつら（一）（二）（三）
柴田錬三郎　われら旗本愚連隊（上）（下）
島尾敏雄　われ深きふちより
島尾敏雄　島の果て

島尾敏雄　夢の中での日常
島田荘司　嘘でもいいから殺人事件
島田荘司　漱石と倫敦ミイラ殺人事件
清水一行　虚業集団
清水一行　首都圏銀行
清水一行　重役室
清水一行　投機地帯
清水一行　小説　兜（しま）町
清水一行　同族企業
清水一行　動脈列島
清水一行　神は裁かない
清水一行　相場師
清水一行　動機
清水一行　合併人事
清水一行　背信重役
清水一行　敵意の環

清水一行　砂の紋
清水一行　覆面工場
清水一行　密室商社
清水一行　買占め
清水一行　副社長
清水一行　女教師
清水一行　私刑（リンチ）七人心中
清水一行　支店長の遺書
清水一行　最高機密
清水一行　死の谷殺人事件
清水一行　冷血集団
清水一行　汚名
清水一行　密閉集団
清水一行　偶像本部
清水一行　兜町物語
清水一行　悪名集団
清水一行　機密文書
清水一行　小説財界
白石かずこ　記者の目　女の目　アメリカン　ブラックジャーニー
城山三郎　華麗なる疾走
城山三郎　臨3311に乗れ
城山三郎　わたしの情報日記
新宮正春　鷹たちの砦
新宮正春　不知火殺法
杉本苑子　マダム貞奴
杉本苑子　隠々洞ききがき抄　歴史に咲く花々―人物おんな日本史―
杉本苑子　孔雀茶屋心中
杉本苑子　雪中松梅図
杉本苑子　春日局
杉本苑子　鶴渡る
杉森久英　錆びたサーベル
杉森久英　アラビア太郎
杉森久英　天皇の料理番
杉森久英　挑戦する経営者　日本プロ野球復活の日
鈴木明　追跡
鈴木健二　女らしさ物語
瀬戸内晴美　おだやかな部屋
瀬戸内晴美　女の海
瀬戸内晴美　吊橋のある駅
瀬戸内晴美　ひとりでも生きられる幻花（上下）
瀬戸内晴美　終りの旅
瀬戸内晴美　涯しない旅
瀬戸内晴美　見知らぬ人へ
瀬戸内晴美　見出される時
瀬戸内晴美　妬心
曾野綾子　私の中の聖書
瀬戸内晴美　女たち
曾野綾子　辛くて「私」である日々
瀬戸内晴美　生きるということ
曾野綾子　慈悲海岸
瀬戸内晴美　美女伝
高井有一　夜明けの土地
瀬戸内寂聴　寂庵浄福
高井有一　蟲たちの棲家
瀬戸内寂聴　寂聴巡礼
高杉良　あざやかな退任
瀬戸内晴美　談談談
高杉良　人事異動
瀬戸内晴美　私小説
高杉良　白い叛乱
草野唯雄　明日知れぬ命
高杉良　銀行人事部
草野唯雄　爆殺予告
高杉良　社長解任
草野唯雄　瀬戸内海殺人事件
高杉良　対決　企業内帝王と戦う男たち
曾野綾子　リオ・グランデ
高杉良　いのちの風
曾野綾子　片隅の二人
高杉良　新聞辞令
曾野綾子　海抜0メートル
高千穂遙　狼たちの曠野
曾野綾子　アラブのこころ
高千穂遙　だからバイク大好き！
曾野綾子　人びとの中の私
高千穂遙　獣（上）（下）
高橋たか子　ロンリー・ウーマン
高橋三千綱　よろしく愛して
高橋三千綱　我らが仲間
高峰秀子　いいもの見つけた
滝沢秀樹　ソウル讃歌
田久保英夫　奢りの春
田久保英夫　水中花
立原正秋　雪の朝
立木義浩　マイ・アメリカ
立木義浩　花気色
立松和平　途方にくれて
立松和平　火の車
立松和平　歓喜の市（上）
立松和平　歓喜の市（下）
立松和平　地上の翼
立松和平　蜜月

集英社文庫　目録（日本文学）

田中光二　黄金の罠
田中光二　闇の牙
田中光二　爆発の臨界
田中光二　蒼き大地の伝説
田中光二　勇者の血
田中光二　森の涙
田中小実昌　乙女島のおとめ
田中光常　自然 動物 わが愛(上)
田中光常　自然 動物 わが愛(下)
田中文雄　蔦に覆われた棺
田中文雄　猫窓
田中文雄　猫路
田辺聖子　愛の風見鳥
田辺聖子　お聖どん・アドベンチャー
田辺聖子　愛してよろしいですか？
田辺聖子・佐藤愛子　男の結び目
田辺聖子　オムライスはお好き？
田辺聖子　炎の女たち わたしの日本女性史
田辺聖子　お目にかかれて満足です(上)
田辺聖子　お目にかかれて満足です(下)
田辺聖子　返事はあした
田辺聖子　歳月切符
田辺聖子　新・私本源氏 春のめざめは紫の巻
田辺聖子　風をください
田辺聖子　竹取物語・伊勢物語
田辺聖子　恋にあっぷあっぷ
谷恒生　喜望峰
谷恒生　マラッカ海峡
谷恒生　ホーン岬
谷恒生　北の怒濤
谷川俊太郎　わらべうた
谷川健一　海の群星
谷川健一　白鳥伝説(上)(下)
田村隆一　インド酔夢行
田村隆一　小さな島からの手紙
田村隆一　ぼくの憂き世風呂
檀太郎　新・檀流クッキング
檀晴子　檀流クッキング入門日記
陳舜臣　日本人と中国人
陳舜臣　怒りの菩薩
柘植久慶　喜望峰の星
辻邦生　モンマルトル日記
津島祐子　童子の影
筒井康隆　馬は土曜に蒼ざめる
筒井康隆　国境線は遠かった
筒井康隆　あるいは酒でいっぱいの海
筒井康隆　みだれ撃ち瀆書ノート
筒井康隆・編　異形の白昼

集英社文庫　目録（日本文学）

筒井康隆・編　12のアップルパイ
都筑道夫　暗殺教程
都筑道夫　怪奇小説という題名の怪奇小説
都筑道夫　雪崩連太郎幻視行
都筑道夫　雪崩連太郎怨霊行
都筑道夫　犯罪見本市
都筑道夫　全戸冷暖房バス死体つき
都筑道夫　びっくり博覧会
都筑道夫　殺されたい人この指とまれ
都筑道夫　銀河盗賊ビリイ・アレグロ
都筑道夫　猫の目が変るように
都筑道夫　サタデイ・ナイト・ムービー
都筑道夫　二日酔い広場
都筑道夫　蓋のとれたビックリ箱
常石茂他・編　中国の故事と名言
津村秀介　時間の風蝕 こだま269号から消えた女
津村秀介　雨の完全殺人黒い流域
津村節子　葬（とむらいめ）女
津村節子　玩具
津村節子　石の蝶
津村節子　星がゆれる時
津村節子　夜光時計
津村節子　白い焔
津村節子　婚約者
津村節子　女の椅子
津村節子　ひめごと
津村節子　女
津村節子　風の吹く町
津村節子　凍蝶
津村節子　空中楼閣
津村節子　母の部屋
津村節子　娼婦たちの暦
津本陽　牡のたてがみ
戸井十月　摩天楼区アベニューC
戸板康二　黒い鳥
常盤新平　アメリカン・ジャズ・エイジ
常盤新平編　パーティ・ジョークI
常盤新平編　パーティ・ジョークII
常盤新平　ニューヨーク五番街物語
栃折久美子　モロッコ革の本
殿谷みな子　いつかあなたを見失う
富岡多恵子　ニホン・ニホン人
富岡多恵子　壺中庵異聞
富岡多恵子　詩よ歌よ、さようなら
富岡多恵子　「英会話」私情
富岡多恵子　うき世かるた
富島健夫　青春の野望I
富島健夫　青春の野望II

富島健夫　青春の野望III
富島健夫　青春の野望IV
富島健夫　青春の野望V
富島健夫　妻・母・女
富島健夫　虹は消えない
富島健夫　流氷は帰らない
富島健夫　夜は別れない(上)(下)
富島健夫　雲のあばれん坊
富島健夫　おさな妻
伴野朗　必殺者
伴野朗　三十三時間
伴野朗　大航海（上・下）
伴野朗　密室球場
豊田有恒　バチャカマに落ちる陽
豊田有恒　地球の汚名
豊田有恒　暴走狩り
豊田有恒　海神の裔
豊田有恒　イワシの頭
豊田有恒　異次元神話
豊田有恒　神々の黄昏
豊田有恒　アメーバ妖女
豊田有恒　ライダーの挽歌
豊田穣　撃墜——空戦記——
豊田穣　撃沈——海戦記——
豊田穣　出撃——決戦記——
豊田穣　四本の火柱
豊田穣　海軍特別攻撃隊
豊田穣　海の紋章
豊田穣　激戦地
豊田穣　炎の提督
豊田穣　燃える怒濤
豊田穣　空母信濃の生涯
豊田穣　江田島教育
豊田穣　割腹
豊田穣　空母瑞鶴の生涯
豊田穣　北ボルネオ 死の転進
豊田穣　マレー沖海戦
内藤陳　読まずに死ねるか！
内藤陳　読まずば二度死ね！
永井路子　寂光院残照
永井路子　旅する女人
永井路子　恋のうき世新今昔物語
永井路子　女の四季、愛の四季
中上健次　鳩どもの家
中上健次　十八歳、海へ
中上健次　水の女
中上健次　破壊せよ、とアイラーは言ったルクレツィア・ボルジア(上)(下)
中田耕治　ニコル

中島梓　美少年学入門
中薗英助　密航定期便
中村真一郎　死の遍歴
中村紘子ほか　私の猫ものがたり
中山ピーチャム　珍々発明
なだいなだ　おっちょこちょ医　しおれし花飾りのごとく
なだいなだ　カルテの余白　鞄の中から出てきた話
なだいなだ　ボタン戦争
なだいなだ　娘の学校　同窓会
夏樹静子　影の鎖
夏樹静子　蒼ざめた告発
夏樹静子　第三の女
夏樹静子　アリバイのない女
夏樹静子　星の証言
夏樹静子　花の証言
夏樹静子　ひとすじの闇に
夏樹静子　遙かな坂(上)
夏樹静子　遙かな坂(下)
夏樹静子　雪の別離
夏樹静子　殺意
夏堀正元　北に燃える
楢山芙二夫　午前零時の星条旗
南条範夫　古城物語
南条範夫　続・古城物語
南条範夫　抛銀商人
南原幹雄　鴻池一族の野望
南原幹雄　暗殺者の神話
南原幹雄　闇と影の百年戦争
南原幹雄　幕末おんな恋歌
ニコル　ぼくのワイルド・ライフ
ニコル　ニコルの青春記　「お肌の曲かり角」からUターン
西川勢津子　ふりかえれば、サバンナ
西木正明　凍れる花火
西木正明　血ぞめの試走車
西村京太郎　現金強奪計画
西村京太郎　イヴが死んだ夜
西村京太郎　真夜中の構図
西村京太郎　夜の探偵
西村寿行　闇に潜みしは誰ぞ
西村寿行　回帰線に吼ゆ
西村玲子　暮しのときめき図鑑　女の人生わくわくブック
西村玲子　悔いなき煩悩
丹羽文雄　鮎
丹羽文雄　再会

集英社文庫

われら旗本愚連隊（上）

1988年12月20日　第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著者　柴田錬三郎

発行者　若菜正

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ッ橋2-5-10
〒101-50
電話　東京（230）6100（編集）
（230）6393（販売）
（230）6080（製作）

印刷　凸版印刷株式会社

本書の内容の一部または全部を無断複写、複製、転載することを禁じます。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

©Eiko Saitō　1988

Printed in Japan

ISBN4-08-749410-1 C0193